

さしすの先輩聡人く
ん！

コトバノ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

高専さしすにテキトーなオリ主を絡ませる話。歌姫とも絡むし多分七海とか灰原とかとも絡む。展開は懷玉の2年くらい前から。感想や評価貰えたら嬉しいです。

完結したよ！

目次

第1話	黒い青春	1
第2話	始めて、初めて	16
第3話	刀と刀	27
第4話	刀と刀と斧と鳥	36
第5話	先輩	51
第6話	死・指・肢・思	67
第7話	目を覚ます	81
第8話	変化	100
第9話	ショッピング&リーピング	109
第10話	怖い新入生たち	120
第11話	強おい新入生たち	133
第12話	夏の思ひ出	142
第13話	『破』破れたり	151
第14話	冬の思ひ出	170
第15話	良い子な新入生たち	180
第16話	出遅れ、手遅れ	189
第17話	異分子2人	200
第18話	イレギュラー・イレギュラー	212
イレギュラー		212
第19話	∞と0とx	221
第20話	俱に天を戴かん	232
第21話	クラッカーは鳴らされた	244
第22話	サプライズパーティー	

第23話 宴もたけなわ

第24話 目が覚める

第25話 存在しなかった未来

最終話 廻る青春

閑話 双子 上

325 310 297 280 268

第1話 黒い青春

くあと欠伸を漏らしつつ、車の窓から外を眺める。

そこを流れていくのは、延々と続く木立だ。人の手などが一切入っておらず、そのためおもしろみも見られない。

かれこれ数十分変わらないその景色に暫くは耐えていたものの、いよいよ我慢できなくなつた俺は、運転席にいるスーツのお兄さん——ホジヨカントク？さんに、話しかけることにした。

「——ねえ、お兄さん。これ、どこまで行くの？もう山の中なんだけど……」

「はい？……ああ、墓はかのせ之瀬さんは一般からの入学でしたから、知らないんですね。呪術高専は、筵山麓——都内の奥地に位置しているんですよ。そのため移動には、随分と時間がかかるとです」

「はあ……そうなんスカ……」

返された答えに、生返事を溢す。

呪術高専……何度聞いても、やはり眉唾物に感じる。もしかしたら、盛大なドッキリなのでは？という考えすら浮かんでしまう始末だ。

そもそも俺が、こんなに長い時間を車で揺られる羽目になってるのは、今から2ヶ月ほど前——中学3年生という身分を誤魔化しながらしていたバイトの帰途で、怪しげな美女に声をかけられたことが発端だった。

いつもの様に働き尽くしてたくたになつた身を引きずって、補導時間ギリギリの夜道を歩いていたところ、後ろから呼び止められ。

ノロノロ振り返れば、そこにいたのは黒ずくめの服を纏つた淡い水色の髪の毛のキレイなお姉さん。

その姿に見惚れている間に、気付けば連絡先交換やら予定調整やらをされて、今日は遅いから翌日の昼にゆっくり話そうということになり。

よく分からないけどこれももしかして逆ナンってやつでは？と、期待を胸に、待ち合わせ場所に指定された喫茶店を訪れ——そこに昨夜の美女と一緒にめちやくちや厳つい顔のオツサンがいることに気付いた俺は、悟つた。

さてはこれ……美人局だな？恐喝される感じだな？（名推理）

話には聞いたことがあつた。美人につられてノコノコついていくと、怖いお兄さんにイチャモンつけられて、お金を払うことになる。恐ろしい手法だ。

思い至った俺は、正直帰りたい気持ちでいっぱいだったが……お姉さんとはこれでもかというほどに目が合ってしまっていたし、にこりと微笑まれながら手招きもされてしまったので、帰るなんてことはできず。

大人しく席に着けば——なんか厭ついオッサンが、呪いだの霊だの言い始めて、俺は再び悟った。

さてはこれ……霊感商法だな？壺、売りつける気だな？（名推理）

話には聞いたことがあった。幽霊やらなんやらの存在を持ち出して、人を不安にさせ、そこら辺のゴミを高い値段で買わせる。恐ろしい手法だ。

けど、既に美人局やつてるのに、更に霊感商法を積むなんて、意味あるのか？欲張るところ違くないか？なんて、思っていたのだが……ヤガとかいう厭ついオッサンの話を聞いていく内に、段々と俺は困り出した。

彼の言う呪霊という存在に、心当たりがあったからだ。

小さい頃から俺には、人には見えない異形の化物の姿が見えていた。そのためまあ、結構苦勞して生きてきていたんだけど……厭ついオッサンが語る呪霊の姿は、まさしく俺が見ている異形の化物の姿の特徴と合致していた。つまるところ、彼はマジもんの人なのかもしれないのだ。

そして俺は、驚きと、不安と、ちよつぴりの期待のもとに、本腰を入れて彼の話を聞

き——やはり彼は、マジもんであるという結論に至り。

お姉さんと、厳ついオッサンとに勧められるままに、俺は呪術師とやらになること、呪術師になるために呪術高専なる所に通うこととなったのだった。

まあある種の流された感は否めないが……呪術高専では学費についての心配をする必要はないらしいし、同類の人も会えるらしいしと、利点はあるので今のところ後悔はない。価値観の共有できる同級生とワチャワチャしたり、美人の先生にイロイロ教えてもらえたりなんて青春は、とうの昔に諦めていたので、降って湧いた幸運ですらあった。

唯一後悔があるとしたら、呪術高専までのこの移動時間の長さだろう。長えよ……景色も変わらないし、ちょー飽きた。

退屈に息苦しさを覚えていると、ホジヨカントクさんが、運転の最中、ちらとこちらを見て言う。

「……あ、墓之瀬さん。いい機会ですし、何か質問があれば答えますよ?」

「お、ほんとですか?」

渡りに船なその言葉に、俺は喜色を浮かべる。これで少しは、暇を潰せそうだ。

「んー、じゃあ、そうですね……ホジヨカントクさん、彼女います?」

「できれば高専とか、呪術に関する質問でお願いします……」

「あ、そう？しょうがないな……じゃあ、高専のカリキュラム的なのと違って、教えてもらえたりします？」

「はい、それなら。高専では、午前中に座学を、午後に実技実習を行うようにしています。座学は墓之瀬さんが学んできたような一般科目についても学びますし、呪術についても学びます。実技実習は、呪霊との戦い方についてなどを学びます」

「へえ……」

午前と午後で、別れているのか……面白いな。けど座学はこれ、普通の高校より学ぶこと多い気が……え、定期テストとかあったらマズそう。理系苦手なんだよな……。

「他に何かありますか？」

「あー……じゃあ、どんなやつが同級生になるかとかって知ってます？」

「……すみません、その辺りはあまり……例年なら、男子が2人ほど、女子が1人ほどという感じなのですが……如何せん、昨今は不作と言いますか、呪術師を目指す人も少ないので……」

新たに尋ねると、少々口ごもるお兄さん。しかし、呪術師を目指す人は少ないのか……。

「……なんかちよつと意外だな。呪霊とやらを倒せばお金貰えるらしいし、同類の人とも会えるわけだしで、結構好環境なのに……」

「命の危険がありますから……本人も、また親御さんも、二つ返事で了承なんてしませんよ」

「俺、二つ返事で了承しましたけど……」

「え……親御さんの反対とかはなかったんですか？」

「死んでるんで、なかったですね。一応保護者やつてる叔父も、むしろ喜んでたくらいでしたし」

「それは……」

——そう。俺の両親は、俺が小学生のときに、交通事故で死んだ。

その当時から既に俺は所謂見える人であることが親戚には伝わっていたので、気味悪がられていたが……両親が死んだことで、その対応はいよいよ苛烈なものとなった。両親の葬式では公然と罵られたし、殴られた、引き取り手も当然出てこなかった。最終的には、叔父が親戚一同から育児金だったりを徴収して引き取ってくれたが……この叔父も、まあクズなやつで。

本人は徴収金を使って贅沢三昧、俺には衣食住全てに劣悪なものを押し付けてきた。中学には行かせてはもらったが、制服やら給食やらかかる費用だつてほとんど払ってくれなかったので、中学生ながらにバイトに明け暮れる日々。

そんな、将来に希望なんて見えない中で、お金の心配のいらぬ呪術高専にスカウト

されたのは——まさしく、救いの手だったのだ。

「……すみません、嫌なことを聞いてしまつて……」

「いいです、別に気にしてないんで。あ、それよりアレ……なんかお寺っぽい
の覚えてきたんですけど、もしかしてもう着く感じですか？」

「はい、いえ。敷地内ではありませんが……あそこから、更に進むことになります」

「遠すぎんだろ……」

重くなった空気を払い、和やかに言葉を交わしていく。呪術師の簡単なイロハだった
り、呪術規定と呼ばれるきまりの存在など、呪術師の常識のようなものを教えてもらつ
ている内に——車が停まる。

道の脇には縁石と石階段があり、その先には古びた校門。表札には文字が刻まれてい
る。東京都立呪術高等専門学校——どうやら、目的地に着いたみたいだった。また、校
門の傍には、喫茶店で会った厳ついオッサンも控えている。

「——それでは墓之瀬さん。ここからは校門の近く立っているあの人……夜蛾さんに
案内してもらつたことになります」

「お、了解です」

運転席から告げられた言葉を受けて、俺は、車のドアを開ける。

制服として支給された黒の学ラン——カスタムができるらしかったので、長ランにし

た——の、裾に気をつけながら、地面へと降り、同じく支給……というか、受注した学帽を被る。

様相を整えた俺は、運転席に座するホジヨカントクさんに向けて。

「じゃ、ありがとうございしました、お兄さん。行つてきます」

そう言うと、彼は一瞬面食らつた顔をした後、笑みを浮かべて。

「はい。行つてらっしゃい……はかのせそうと墓之瀬聡人さん。遅ればせながら、入学、おめでとうございます」

その言葉に、俺は笑みを返して——厳ついオッサンの待つ校門へと、力強い歩みで進んでいったのだつた。

……そして、5歩目くらいで学ランの裾を踏んづけて転びかけた。

長ラン……歩きにくつっ!!!

学ランの裾に苦戦しつつ、なんとか階段を昇り終える。

そこで腕組みをして待つていた黒服のヤクザっぽいオッサン——ヤガさんは、厳めしい顔を更に厳めしくしながら、口を開いた。

「……色々君には教えなければならぬこと、言わなければならぬことがあるのだが……まず君、長ランを辞めた方がいいぞ」

「え、嫌つス。長ランカッコいいんで」

「……ならば、きちんと歩けるようにしておいてくれ」

「あ……前向きに検討し、予定を調整していく方向で善処します」

「遠回しのやらない発言全部乗せだな……本当に頼むから、歩けるようにしておいてくれ」

「あはは、分かっていますって」

手をヒラヒラさせながら答えると、彼は頭を押さええて溜め息を吐いて。

「……とにかく、高専を案内するでしょう。ついてきてくれ」

「はい」

ぐるりと踵を返し、彼は校門をくぐる。追従して俺もくぐり——呪術高専見学ツアーが始まった。



——特に意味はないらしい神社にお寺、楼閣に塔から、意味のある寮に食堂、校庭に

倉庫ときて。

最後に連れてこられたのは、本校舎だった。

ここまで見て回った施設と同様に、内装は和風建築。床や壁、窓には木製が目立ち、昭和の名残を感じさせる。

廊下を抜けて、入った1つの教室は、広々としているが、あるのは黒板に教壇、教卓、机に椅子だけ。少し寂しげだ。

入ってきた足のまま教卓についたヤガさんに促され、俺は席に着く。

それを確認してから、彼は口を開いた。

「——さて、墓之瀬聡人くん。今日から君には、ここ、呪術高専にて呪いを学び、呪いを祓う術を身につけてもらうわけだが……」

そこで彼は、一旦言葉を区切ると、しかと俺の目を見つめ。

「本当に後悔はないんだな？」

そう問いかけてきて。

「……どういう意味ですか？」

「そのままの意味だ。君はこれまで一般人で、呪いの世界にはほぼ無縁だったのだから、呪術の恐ろしさを肌身に染みて分かっているわけではないだろう」

「まあ、そうですけど……」

「勧めた手前で言うのも何だが……呪術師というのは、不快な職業だ。常に死とは隣り合わせ、呪いに殺された人を横目に、呪いの肉を裂かねばならんこともある」

淡々と紡がれるのは、呪術師の内情だ。俺は呪霊を見えてはいても、呪術については何も知らない。喫茶店で多少は教えてもらってはいたが、改めて聞くと、呪術師というのはなんとおぞましく苛辣な職なのだろうか。

「ある程度のイカれ具合とモチベーションが無ければ、すぐに呪いのエサとなりお陀仏だ。その未来に、道を指し示した俺たちでも責任を取ることはできん。その上で、もう一度問おう。……本当に後悔はないんだな？」

鋭い眼差しで質される。内容はひどく残酷なものだし、空気は張り詰めている、ヤガさんの表情だって真剣そのものだ。

けど、そこに秘められているものに気付いて俺は、つい相好を崩してしまふ。

「……何を笑っているんだ」

「ああ、すいません。なにぶん……人に心配されたのは久しぶりのことだったので」
「……………」

「でも、心配しなくても大丈夫ですよ、ヤガさん。あのまま生きていても、俺は本当の意味で人としては生きられなかった。……けど、呪術師になれば、学校に通える、同類の人とも出会える。青春だって、送れるかもしれない。短くても人として生きられるん

だ。それだけで、呪術師を目指すのには——充分です」

「……生きるために、か……」

目を見てはつきり宣言すると、彼はアゴのひげを擦り呟く。そして、小さく笑みを溢す。

「理解した。改めて歓迎しよう。——ようこそ、呪術高等へ」

「……ははっ。3年間、よろしくお願ひします、ヤガさん」

「夜蛾先生だ」

「はいはい……あ、ところで夜蛾先生」

一転して緩んだ空気、俺はキョロキョロと室内を見渡して言う。

「俺のクラスメイトって、いつ頃来ます？今日、明日？席、俺が今座ってるこの1つしかないですけど……新しく運んでくるの、手伝いましようか？」

すると夜蛾先生は、目をスッと逸らし。

「……君に同級生はいない」

そんなことを述べてきて。

「……………は??? いや、いやいや……………え???は???」

「……元々数名は通う予定だったのだが……途中で断念したり、京都校へ通うこととなったりで、東京校の1年生は、君だけになっている」

………終わってんな、高専辞めるか???だってオマエ、同級生いない学校って……それは最早、学校じゃないだろう。ほんとに終わってる。めちやくちや辞めたくなってきた。

……いや、待て、落ち着け……たしかに同級生がいないのはクソみたいな環境、というかもう肥溜めだが……高専には、諸先輩方だっているはず。横ではなく、縦の関係でわちやわちややる青春だって……あつてもいいだろう。

なんとか落ち着きを取り戻した俺は、新たに夜蛾先生に問いかけた。

「ま、まあ、クラスメイトがいなくても、先輩方はいますよね?ならそつちと仲を深めれば問題ないでしょう……先輩たちとはいつ頃会えます?もしかして寮にもういたり?」

すると夜蛾先生は、またしても目をスつと逸らし。

「………全員、数カ月は戻らないだろう」

そんなことを述べてきて。

「……………は??? いや、いやいや……え??? は???」

「………昨今は、人手不足で、重なる形で呪いの発生も多発して………そのため、2、3年生は遠征として数カ月出払ってること、ザラにあるんだ」

……………終わってんな、真面目に高専辞めるか???だってオマエ、先輩とも会えな

いつて……俺の求めてるもの、全く満たせてないんだが??学校通えても、同類の人と出会えないし、青春も送れないんだが??呪術高専に入った意味が……かき消される。

……いや、待て、落ち着け……たしかに先輩すらいないのはクソみたいな環境、というかもう肥溜めだが……高専には、あの淡い水色の髪美人お姉さんだっているはず。横だの縦だの越えた、教師との背徳的で爛れた青春だつて……あつてもいいだろう。

なんとか落ち着きを取り戻し、むしろ興奮すら覚え始めた俺は、更に新たに夜蛾先生に問いかけた。

「ま、まあまあ先輩すらいないのは下痢クソうんこですけど……俺にはあの魅惑のお姉さんがいますから。ええ、魅惑のお姉さんがいますから。あの人の名前ってなんですか? 彼氏いませんよね? 何の科目担当してるんですか?」

すると夜蛾先生は、またまたしても目をスつと逸らし。

「君の言う彼女は、おそらく冥冥のことだと思うが……彼女は、高専の教師ではない」
そんなことを述べてきて。

「……………は??…いや、いやいや……え??…は??…」

「……彼女は外部の人間で……高専からの謝礼金目当てで君をスカウトしてきただけだから、当然彼女の授業を受けることなど……ない」

……………終わってんな、ガチで真面目に高専辞めるか??…だつてオマエ……もうこ

れ、何も青春ないじゃん。真っ黒だし、冬じゃん。肥溜めじゃん。……ええ???

「……………やっぱり高専辞めるか……………」

「ん???お、おい、さっきまでの意気込みはどうした!!???おい——!?!」

——かくして。

呪術高専での、俺の黒い青春が始まった。

第2話 始めて、初めて

呪術高专に入学してからの1ヶ月は、実に目まぐるしいものだった。

なにせ絶望の事実を突きつけられ、意気消沈していたその初日から、呪術師になるための勉強はいきなり始まったのだから。

身体づくりや体力づくりについては、元々の朝から晩までのバイトである程度はできていたものの、呪いを祓うに際しての体捌きに足運び、武器の扱いなんかはてんで素人。みっちり教え込まれたわけだし、呪いを扱う術についてもみっちり教え込まれた。

なんでも呪術師は、呪力と呼ばれる不思議パワーを利用して呪いを祓っているらしい。

呪力は怒りや悲しみなどの負の感情から溢れ出るエネルギーだそうで、呪術師として戦うには、それをきちんと操作できるようになることが前提なのだとか。

ちなみに俺は、その呪力総量が結構多めらしい。やったぜ！……いやこれやったのか？なんかオマエ負の感情多い根暗野郎って言われてる感あるよな。なんかちよつとヤだわ。

また呪術師を語るうえで欠かせないのが、術式の存在だ。大抵の呪術師は、生まれながらに生得術式を所持しており、彼らはその術式に呪力を流し込むことで、強大な技を行使して……って、夜蛾先生は言ってた。

そしてまたちなむけど、俺にも術式はあるらしい。曖昧なのは、俺の幼少期の話から夜蛾先生が推測しただけで、俺本人が意識して使うことはできないからだ。いつか使えるようにはなりたいところだが……まあ、要努力といったところだろう。

他にも、呪いについての歴史だったり、呪霊の生態といった座学部分も、一般教科と並列して行ったりして——今日。

日も少し落ち始めた昼頃、俺は、始めての実習に臨もうとしていた。

高専から車で揺られてやって来たのは、寂れた廃病院だ。

外壁は薄汚れており、所々にひび割れのようなものも入っている。辺りには雑草も生い茂っており、いかにも出そうといった装いだった。

その廃病院の入り口前に、荷物を肩掛けにして立った俺に、脇に立つ夜蛾先生が声をかけてくる。

「——さて……最後の確認だ、聡人。俺は今回、オマエが呪霊と戦う際、余程の危機がない限りは一切手助けをしない。オマエの独力で、呪霊を祓わなければならぬんだ……分かってるな？」

「はい、分かってます」

「……………ならない。それと窓や補助監督の調査によると、この病院に出る呪霊は、4級から3級相当が7、8体といったところだそうだ」

「ほ……………」

なされる任務の説明。

けど、ここでも出てくるのか、窓さんに補助監督さん。マジでこの人たちには頭が上がないわ……………すごいんよ彼ら、戦闘力こそないものの呪いを視認できて、様々な点で呪術師のサポートをしてくれるの。

移動の車の運転もそうだし、情報集めもしてくれる、高専の一般教科の授業をしてくれるのもこの人たちだし、自販機の飲み物とかとかご飯の準備とかもしてくれるのもこの人たち。ほんと、いつもお世話になっております……………。

彼らに心の中で謝辞を送っている間にも、夜蛾先生の説明は続く。

「今のところ大きな被害が出たという確認はないが、放っておけば悪い結果に繋がることは間違いない。ヤツらは必ずここで祓う必要がある。心してかれ」

「あいさー」

「……………帳を下ろす」

ゆるーく返事をする、彼は暫し物言いたげな目でこちらを見てから。諦めたように

首を振り、印を組んだ手を構えて唱える。

「——闇より出でて闇より黒く、その穢れを禊ぎ祓え」

次の瞬間、空からどろりと闇が溢れ出す。青空は半球状にその闇に覆われていき——
廃病院一帯は、夜に包まれた。

帳。呪いを炙り出し、また呪術師の姿を一般人から隠すものだ。呪霊は一般人の怯えや恐怖といった負の感情から生まれる。そのため呪霊と、それと戦う呪術師の存在を隠す帳を張るは、任務のときには大抵必須事項なのだ。

廃病院が位置する場所も、近くに住宅地が存在している。人払いをしているとはいえ、もしものときも考慮して、帳は下ろす必要があった。

帳が確と張られたのを確認した俺は、肩掛けにしていた荷物——刀袋を降ろすと、中から鞘ごと刀を取り出し、腰に携え、同時に呪力を身体に流し、強化していく。

何事も初めが肝心だ。油断して失敗なんて、目も当てられない。

「……それでは行くぞ」

「りよーかいでっす」

ある程度の余裕と、少しの緊張感を持って、俺は夜蛾先生と共に、廃病院内へと足を踏み入れた。



廃病院内には、冷たく湿った空気が満ちていた。

当然も当然というか、電気は通っておらず、帳も下りているので、通路は薄暗い。

遠くに見える非常口の緑の灯りのみが、微かに光を発していた。

慎重に辺りを窺いながら進みつつ、俺は夜蛾先生に話しかけた。

「夜蛾先生……こういう呪いを捜している最中って、雑談とかって控えるもんなんですか？」

「……一概に肯定も否定もできんな。過ぎた恐怖心は、判断を鈍らせる。そうならないためにも雑談を行うことで気分を保ったり、また仲を深め連携を密にするためにも、雑談は有効だ」

「なるほど……」

「だがオマエはこれが、初めての任務だ。雑談などせずに、呪いの発見に集中していた方が得策だろうな」

「おー、了解です。……ところで夜蛾先生、朝ご飯何食べました？俺目玉焼き食ったんですけど、なんと双子だったっぽくて、2個セットだったんですよ！すごいくないですか!？」

「俺の話、聞いてたか??？」

聞いてたけど俺、無言でじっとしてるのとかできないタイプだから……。喋ってないと落ち着かないのよ。

楽しく雑談を交わしている内に、1階フロアの捜索が終わる。

通路だけでなく病室も治療室も、トイレの中までも覗いてはみたものの、呪霊の姿を見とめることはできなかった。

そして俺たちは、階段を昇って行って、2階のフロアに辿り着き——出会う。

通路に佇む幾つかの影。

ソレらは皆、豚のような頭部を持っていた。身体は狒々に似ていて、体毛に覆われており、ずんぐりとしている。

その顔に浮かぶのは、ニタニタとした醜悪な笑み。

このような異形の存在を見るのはいつぶりだろうか。当時はバケモノと暫定的に称していたが……。知識を得た今は違う。

呪霊だ。人の内より漏出した負の感情の集積体。形を成した呪い。

夜蛾先生をちらりと見ると、彼は静かに頷く。俺もそれに頷きを返すと、1歩前へと出て、静かに息を吐き。腰に提げていた刀を鞘から引き抜いて、身体に流していた呪力を通す。

ゆつくりと俺は、刀の切っ先を地に向けながら、呪霊たちに近付いていく。

呪霊たちの数は3体、そのどれもがこちらを警戒しているのか、奇声を発し威嚇するのみで動かない。

やがて、1番近い場所にいる呪霊との彼我の距離が2メートルほどになったところで——強く床を踏み締め、長ランをはためかせて駆ける。

一足飛びで距離を縮めた俺は、がら空きの呪霊の首元に斬り上げを放つ。

刃は鋭く首に食い込み断ち斬って、呪霊の頭部が血飛沫と共に飛ぶ。

血が舞い散る中を俺は、勢いそのままに次の呪霊へと肉薄する。

ようやく呪霊たちも動き始めるが、それよりも速くもう1体の呪霊の懐に飛び込んだ俺は、その頭部に刀を突き刺す。

ずりゆりゆと肉を弄くる感触に顔をしかめながら、そこから血を溢れさせつつ刀を引き抜くと、奇声を上げ接近してくる最後の呪霊目掛けて斬り下ろす。最後の呪霊の胴体は、2つに別たれた。

終わる攻防、だが斬り損ねの心配もある。地に崩れた呪霊をじっくりと観察していると、ソレらは二度と動くことなく、濁った粒子へと姿を変えて消えていった。

……あれ？なんか思ったより簡単だったな？

若干拍子抜けしつつ、後方の夜蛾先生に振り向く。腕組みをしてこちらを見つめる彼へ俺は、声をかけようとして——壁の中からナニカが飛び出して、その腕を迅速な動き

で俺の顔へと伸ばしてくる。

完全なる不意打ちだ。ソレの動きの速さも充分なもの、これは反応でき……いや、なんかできるな？ 鍛練で戦った、夜蛾先生の操るぬいぐるみの方が数倍速かったし。

襲い来る腕を、上体を少し反らずことで躲す。余裕を持った状態で、落ち着いてそのナニかを観察すると、やはりソレは呪霊だった。顔に無数の目を備えた蜥蜴のような呪霊だ。

飛びかかって来た動きのまま空中を流れていく呪霊、その頭部を刀を持っていない方の手で掴むと、思い切り床に叩きつける。

呪力で存分に強化された身体能力で行われたそれは、呪霊を祓うに足るもので。

先の呪霊たちと同じく濁った粒子となっていくのを見送ると、刀を鞘に収め、改めて俺は夜蛾先生を振り返り呼びかける。

「——夜蛾先生ー！ 見てました今の!? ぱーふえくとな動きでしたよね!? 俺、天才かもしれないっす！ っつか天才だわ！ ヤバい！」

「……たしかに最初の呪霊3体を祓う手際は目を見張るものはあつたし、不意打ちにもきちんと対処できていた。良い動きであつたのは間違いないが……戦闘時とのその落差はどうかならんか??？」

「なんないです!!」

「そうか……」

きっぱり告げれば、頭を押さえて彼は溜め息を吐く。苦勞してんだなと思つて、てくと俺は彼の元へ寄りポンポンと慰めるように肩を叩き、ゴンつと拳骨を落とされる。

ぬおおおつ、い、痛い……!!とても、痛い……!!

別の意味で頭を押さえてうずくまっている俺に、夜蛾先生は搜索を続けるよう促してくる。

なんて冷血漢な先生なんだと思いつつ俺は、涙目で立ち上がると。

再び薄暗い廃病院内を、夜蛾先生と一緒に歩き出した。



廃病院を出て、帳を上げると、空はもう茜色に染まっていた。

ぐぐつと伸びをすれば、緊張していた身体が解れ、余計な力が抜けていつて気持ちいい。

初戦を終えたあと、引き続き呪霊の搜索に取りかかった俺たちは、新たに3階で1体、4階で3体と遭遇。特に目立ったミスを犯すこともなくそれらを祓い、全階の見回りを

完了すること……すなわち任務を完了することに成功していた。いいいいーい!!
腕を伸び切りさせ、ふへーと息を漏らしていると、その様を眺めていた夜蛾先生が、言葉を発する。

「……………さて……………まずは聡人、任務ご苦労だった」

「いいいえ、夜蛾先生こそ、バカの引率大変でしたでしょう？お疲れ様です！」

「……………続けて講評に移る。今回の任務でのオマエの動きだが……………全体的に見て、なかなかのものだった。戦闘面においては言うことなしだ。これからも向上に努めろ」

と、お褒めの言葉を与る。ちよつと……………いや結構嬉しい。ニヤニヤしちゃう。褒められて伸びるタイプだから、もつと褒めて……………？

「だが、心構えはまったくなくなっていないな。てんでダメだ」

「……………いや、あの……………」

「私語が多すぎるし、へらへらもし過ぎだ。危機感を持って任務を取り組め」

「……………す、すいやせん……………」

……………ふ、ふつーに怒られた……………辛い……………

バツの悪さに俯いていると、夜蛾先生は、はあ……………と一つ溜め息を漏らし。

「……………まあ、そこら辺はこれから直していけばいい。それよりも……………もう、いい時間だ。何か食いたいものはあるか？」

そう、尋ねてくる。

恐る恐る面を上げれば、彼はその険しい顔に、微笑を浮かべていて。

「…………え、それって…………」

「初任務の成功祝いだ。俺が奢ってやろう」

「…………えっ、マジですか!?! うっそ夜蛾先生、やつぱりめっちゃいい人だ…………! 最初の1ヶ月はコイツ絶対呪術師じゃなくてヤのつく人だと思つててすいませんでしたっ!」

「そんなこと思つていたのか…………」

「焼き肉!俺、焼き肉食べたいです!おねしやすっ!」

ガバリと頭を上げて勢いよく頼み込む。

それに夜蛾先生は、鷹揚に頷くと——くるりと俺に背を向けて、丁度やつて来た車に向かいながら、言った。

「飛び切り高くて美味しい所に連れてってやろう…………覚悟しておけ」

「や、夜蛾先生…………!! 一生付いてきます——!!」

第3話 刀と刀

「——ふっ！」

呪力を籠めた刀を、声と共に振り下ろす。

キーン……！と鳴り響く甲高い音。

今では低級の呪霊くらいなら問題なく祓えるようになった一撃、それを難なく受け止めたのは、対面にて同じく呪力で強化された刀を頭上に構えた男だ。

今の俺と同じく、ワイシャツに黒のズボンといったラフな格好。黒の短い髪を逆立てており、口には煙がくゆるタバコをくわえている。

日下部篤也さん。俺の刀の先生である。

「おちよっ！」

暫しの鏝迫り合いの後、掛け声を上げて彼は、刀を振り、受け止めていた俺の刀を払う。体勢を少し崩した俺に彼は、一撃二撃と刀を打ち込んでくる。

向かって左下からの斬り上げに、横薙ぎ、速く重いその攻撃に何とか食らい付き、刀

を立てて防御していく。幾許か俺の防勢が続き——見つける日下部さんの攻撃の隙間、逃さずにこちらにも斬り返す。

巡り巡る形勢、その流れを10度ほど繰り返したところで、彼の斬り払いに耐えられずに俺の手から刀が吹き飛ぶ。刀はくるくると回って宙を舞い、やがて地に突き刺さった。

「……………(一)までだな」

「ふー……………ですね……………ありがとうございます」

「おう、ありがとうございます」

言って、刀を鞘に収める日下部さんに、ジンジンと痺れる手を揉みながら感謝を告げる。

呪術高専に通うようになってから2ヶ月。初夏の柔らかい日差しを浴びながら、俺は校庭にて、日下部さんに稽古をつけてもらっていた。

「いやー、にしても、やっぱり日下部さん、強いっすね。勝てねえ……………」

「つたりめえだろ。こちとらオマエより長く呪術師やってんだ、流石に成り立てのガキに負けるわけにはいかねえよ」

「んなー……………でも俺、この前3級になったんですよ?」

「なったんですよ?」

「3級なんざゴロゴロいるっちゅーの」

「え、そうなんだ……」

飛んでいった刀を回収しつつ、休憩がてら雑談に入る。

しかし3級っていったばいいんのか……ちよつとシヨックだ。等級の存在は知ってても、誰がその等級なのかとかは全然知らなかったからな……。

「ま、オマエは飲み込みが早いからな。呪力操作に身体強化、刀の扱いもすぐ覚えやがったし……2級ぐらいにはすぐなれるだろうよ」

「おおーお……おお？2級か……ちよつとシヨボくないですか？」

「バカ言うんじゃねえよ。大抵の術師は準1級か2級で終わり、1級になれるやつなんざそうそう居ねえ。だってえのに、オマエは術師になって2ヶ月で、2級に挑める実力を持つてる……俺からしちやあ、最早気持ち悪いよ」

「へへっ、いやあそんな……気持ち悪いは違うかい??？」

後頭部を掻き照れようとして、全然褒められていなかったことに気付く。気持ち悪いは違うかい??？」

「でも俺としちやあ、オマエにそんな早急に昇格してほしくねえんだけどな。何せガキに稽古つけてるだけで任務が免除されるんだ。こんな旨い仕事がすぐに終わっちゃうなんて勿体ない」

「あー……たしかに日下部さんからしたらそうっすね。命の危険もないし、気負う必要もない、更には俺みたいな可愛い弟子までついてくる……おいおい日下部さんったら幸せもんじゃん。羨ましいなあ、このこのっ」

「黙つてろバカヤロー」

悪態を吐く日下部さん。この前一緒にお昼を食つてるときに教えてくれたのだが、なんでも彼は、前向きに呪術師をやつてるわけではないらしく、できるなら任務はなるべく避けたいんだとか。

まあ普通はそうだよな。俺は呪霊と戦うの、強くなつたのを実感できるし、お金も貰えるから嫌いじゃないけど。ああでも、俺がそう思ってるのも今だけなのかも……？昇格するにつれて、呪霊の危険度もドンドン上がつてくわけだし……。

自らの将来に一抹の不安を覚えていると——何かに気付いたかのように、日下部さんが首を動かす。つられて俺もその方向を見れば、そこには。

「——やあ、日下部。それに……久しぶりだね墓之瀬くん」

いつぞやの美人なお姉さんが、小さく手を振りながらこちらに向かつて歩いてきていて。

「お久しぶりです！冥冥さん、ですよね!!今日もおキレイですわね！よっ、美しさも1級術師！」

「フフ……ありがとう、墓之瀬くん。それと私のことは、冥でいいよ」

「いいんスか？それじゃあ……ンン、了解だ、冥。これからよろしくな」

「フフ……相変わらず面白い子だね」

名前呼びを許可されたので彼氏面してみるも、あえなく笑って流される。動じない……！大人のオンナだ……！

怖い内にも、彼女は俺たちの立つているすぐ近くまでやって来る。

今日の彼女の風貌は、淡い水色の髪を後ろの高いところまでまとめたポニーテールに、黒のワイシャツに裾の広がるパンタロンといった、カッコいいめの装い。クールビューティーだ。

計らずも彼女の姿に見惚れていると、ちよちよんと日下部さんが俺の肩を叩き、忠告してくる。

「なんだ？墓之瀬オマエ、冥冥を狙ってんのか？やめとけやめとけ、ソイツは金の亡者だぞ」

「別に狙つてるとかじゃないですよ。知り合いと仲良くなりたいただけ。というか、金の亡者って……？」

「知らねえのか？ソイツは金のためならなんでもやるイカレ野郎なんだよ」

「なるほど……つまり金銭面でしっかりしているいいオンナってことか」

「捉え方がポジティブすぎねえか??？」

いやあ、マジかあ……冥さん、キレイでスタイルよくて大人っぽくて、更にはお金に
関してもしつかりしてる人なのかあ……憧れちまうなあ……。

「うん、やつぱり墓之瀬くんは面白い子だね。それにしても……聞いたよ？もう3級
に上がったそうじゃないか。凄いね」

「あ、あざーす！……ほら、日下部さん！普通はこうやって褒めるんですよ！見習って
！」

「メンドクせえ。つーかどうせ冥冥が興味あるのは、この先墓之瀬が活躍して金を落
としてくれるかだろうに」

「フフフ……」

日下部さんが白い目で言えば、冥さんは意味深に笑う。おいマジか、俺は金の成る木
として見られてたのか？

「ええー……ひどいっすよ冥さん。身体目当てで褒めたんですか？」

「墓之瀬言い方。オマエの身体つっつか将来性ってことな??？」

「フフ……とても良いものだったよ。ぜひともこれからも楽しませてほしいね」

「冥冥オマエも言い方。現時点で分かるコイツの将来性が良いものだったってことな
??？」

喫茶店とかだと真面目な話しかしなかったから分かんなかったけど、冥さん面白いな……。冗談もいける口なのか。ヤバいなこの人、魅力が溢れて止まらねえ。好きになっちゃいそう。

ああでも歳の差が……いや冥さんって何歳だ？10代って言われても納得できるし、40代と言われても納得できる雰囲気持つてるんだが。不思議だ……！

「……そうだ、墓之瀬くん。丁度いい機会だし……これから私が行こうとしている任務、一緒にやるかい？」

「任務と一緒に……ですか？」

「うん。どうやらある廃校に呪いが大量発生したようだね。下は3級から、上は1級までの呪霊が出るらしい。君、上級の呪霊と戦ったことはまだないだろう？ここらで上級の呪霊に慣れておくと、今後の生存率が上がると思うよ。今回なら、もしものときは私たちが助けてあげられるし」

冥さんのミスティアスさについて考えていたところに突然もたらされる提案。

聞いた限りは利点ばかりのように思える。経験も積めて、安全マージンも取れてる、冥さんの戦い方も見れるしアドバイスもしてもらえるかもしれない……うん、本当に好条件だ。怪しさすら感じる。

「……肉壁要員とかじゃないスよね？」

「私を何だと思ってるんだい？ そんな一銭の得にもならないことしないさ。私はただ、君の利益潜在力を考えて先行投資しようとしているだけだよ」

「すげえ、後半何言ってるか微塵も分かんねえ……！ 日下部さん！ 翻訳してください！」

「あー……簡単に言えば冥冥は、オマエの将来性を見込んで、今の内に恩を着せて唾をつけておこうとしてるって感じだな」

「冥さんが唾くれるんですかっ?!?!」

「違えよアホ」

「なんだ違かったのか……残念だ……冥さんレベルの美人さんの唾なら、全然欲しいけどな……全然……ん？ あれ俺、キシヨすぎでは??」

「——まあ、唾はあげられないけれど……良い経験にはなると思うよ？ それで、どうするのかな？ 墓之瀬くん」

自らのキシヨさ具合にビビっていると、話を切り替え問いかけてくる冥さん。その顔には、張り付いたような微笑が浮かんでいるものの、瞳は真剣だ。

しかしどうするか、か……正直悩むまでもないな。

だってこれは——夢に見た美人の先生にイロイロ教えてもらえるチャンスなのだから。シチュエーションはまあ、ちよつとあれだけでも。

「当然任務、参加させてもらいますよ、冥さん。手取り足取り、イロイロ教えてくださいな」

「フフ、任せてもらおうかな？……それじゃあ行こうか、墓之瀬くん、日下部」

「おつす!!」

「……え、何これ俺も行くの？メンドクせえんだけど……」

「日下部。監督責任って言葉、知っているかな？」

「チツ……分かったよ、行くよ行きます、行けば良いんだろう？」

言葉巧みに、ごねる日下部さんを操る冥さん。折れた日下部さんは、抵抗を諦める。

それから、簡単な準備をして。

俺たちは、廃校へと向かった。

第4話 刀と刀と斧と鳥

黒塗りのワゴン車に乗せられ到着したのは、山の麓。そこから山を登って20分ほどして見えてきたのは、開けた山頂にドンと佇む廃校だ。

ボロボロの校門を越えた先、3、4階建ての木材でできた古びた校舎の壁面は黒ずんでおり、所々に蔦も侵食している。窓はヒビが入ってるものが多く、中にはスプレーで落書きされたものも見られた。全貌からは、おどろおどろしいという言葉がぴったりのように思える雰囲気醸し出されている。

「おー……これまたいかにもって感じっスね」

「そうだね……しかしまったく、いくら呪いが潜んでいるのやら。報酬、もう少しつり上げた方が良かったかな？」

感想を漏らせば、隣に立つ冥さんが相槌を打つ。その手には、巨大な長斧が握られていた。彼女の愛用武器らしい。クールだよな！

逆隣に立つ日下部さんは、タバコをふかしつつ、行きたくないオーラを全面に出しながら、用心のためにか腰の刀の柄に手を当てている。隙はなさげ。

俺はというと、日下部さんと同じく腰に刀をぶら下げて、ついでに身体強化も施している。なお、身体強化についてはおそらく他の2人も既にしているはずだ。

というのもこの任務の事前情報で、前任者だった2級術師数名が、どこからともなく繰り出された攻撃に重傷を負わされたというのがあるからである。つまりは呪霊の中に、こちらに気取られない遠距離からの攻撃手段を有しているものがあるかもしれないということ。攻撃に当たらずに済むのならそれが1番良いわけだが、万が一を考え今の内に身体強化で防御力を上げているのである。

しかし遠距離、か……狙撃でもしてくるのか？事前情報には他にも、急に動けなくなったとかがあったが……ふむ………分っかんね！

「冥さん冥さん。遠距離攻撃ってどんなのか分かります？」

「そうだね……考えられるのはざっくりいって2つだ。1つは、ただ呪力の塊を遠くから飛ばしてくるというもの。シンプルだけど厄介だね」

「ほーほー……」

「もう1つはそういう術式を持っているというもの。準1級以上の呪霊は姿は確認できていないそうだけど、間違いなくいるだろうし、私はこちらの方が確率が高いと思っているよ」

「術式……モノ飛ばすとかですかね？」

「フフ、そんな簡単なものだったら嬉しいんだけどね……とにもかくにも、接近してみなければ分かるものも分からないよ。そろそろ行こう。……日下部、帳下ろして」

「俺がやんのかよ……」

冥さんの要望にブチブチ言いながら、日下部さんは応えて帳を下ろす。

辺り一帯が闇に包まれていき——ヤツらが姿を現したのは、ほぼ同時だった。

校舎前の、俺らがいる校庭との交錯場所。そこにヤツら……呪霊たちは、いた。

目視できる限りは7体、どれもが人間ほどの大きさではあるものの、容貌は当然異形だ。カマキリの身体にニンジンのような頭部をもつモノ、ネズミの身体にゾウのような頭部をもつモノ、ナマコのような身体に無数の目があるモノ、猿の身体にカエルの顔をもつモノ……気持ち悪いのバーゲンセールである。

「ざっと見たところ、3級ばかりみたいですね。俺、行つてもいいですか?」

「結構数いるけど、大丈夫なのかい?」

「まあ見ててくださいいな」

言つて俺は、歩き出す。わけの分からない言葉を漏らしながら呪霊どもがやつて来る中、切つ先を後ろにした刀を腰の横に構えて進み——思い切り振り抜く。

伴つて放たれるのは、ふんだんに呪力が混じつた斬撃だ。太く青黒いその斬撃は、こちらへと駆けていた呪霊たちを呑み込んでいく。呪霊たちは、ジュツと焼けたような音

を奏でて、身体を霧散させた。

斬撃を媒介とした呪力放出。これが俺が2ヶ月の鍛練で得た切り札だ。身に付けるまでには随分と苦勞した。なんせいつぺんに大量の呪力を刀に籠めると、すぐさま刀が折れたり朽ちててしまうのだ。練習で学校の倉庫にあった刀をこつそり使い、20本くらい壊して夜蛾先生にめちやくちや怒られた。怖かったわ……！

それで丁度良かったので、怒られてる最中に原因を聞いてみたところ、曰く、急激な変化に器が耐えられないのだとか。とはいえ急激な呪力変化に対応できるお高い刀なんて、買えるはずもないので、自分なりの試行錯誤を繰り返す。最終的に、刀に呪力を溜めておくのではなく、通り道として扱うことで、現在なんとかものにてきてるといった具合である。つまり俺は天才ということだ。崇める……！

「……おいおいマジかよ、なかなかの出力じゃねえか……墓之瀬オマエ、そんなのできたのか」

「フフフ……やるね、墓之瀬くん。呪力もまだまだ残っているようだし……」
すると、口々に称賛をしてくれる冥さんに日下部さん。おい、照れるんだが……？えへへえへえへえへ……。

ニヤニヤしていると、おかわりよろしく校舎の中から、新たに数体の呪霊が奇声を発して出てくる。

それを見留めた冥さんが、俺に向けて。

「墓之瀬くん、もう1回頼めるかな?」

「もっかいスか?任せろい!」

美人のお願いに意気衝天、再び飛ぶ斬撃を放つ。呪霊たちは、同様にその青黒い奔流に呑み込まれ、霧散した。

「……うん、いいね。雑魚の処理はお手の物といった感じだ」

「いやあ、それほどでも……!えへへえへ……!」

「墓之瀬、さつきからオマエ顔キモいぞ」

「日下部さんさあ……!」

「フフ……それじゃあ本丸——校内に行こうか。前任の術師がやられたのも校内らしいし、気を引き締めよう」

水を差してきた日下部さんにメンチを切っていたところ、冥さんが呼びかけ1人で勝手に進んでいく。迷いの無い足取りだ。

その傍若無人っぷりに、素敵だ……!と思いつながら俺がついていき、嘆息して日下部さんも続く。

そして昇降口を潜り、校内へと足を踏み入れ。

「——ツツ!!」

——強烈な悪寒が背筋を走る。呼吸は乱れ、全身に鳥肌が立ち、身体の端々から熱が失われていく。

なんだ、これは……?……ヤバい。ヤバすぎる。今まで見てきた、戦ってきた呪いは、あまりにもレベルが違う。相對していないのに、感じ取れる気配だけで気圧されてしまう。

「……こ、れ……ヤバくない、スカ……?」

「……おい、冥冥よお……オマエふかしやがったのか?この気配……ほぼ特級だろ」

「……私も予想外だよ。前任の術師の呪力感知がザルだったのか、それともうまく情報が伝わってなかったのか……なににせよ、報酬は倍は出してもらうことは確定だね」
震える声で問えば、兩人ともに呪いの強大さを肯定する発言。というか、特級レベルの1級って……マズくないか……?

「これを使う気はなかったんだけどね……リスクヘッジは必要だ、背に腹は変えられないよ」

しかしこの状況でも依然微笑みを崩さない冥さんが、何やら小難しいことを呟き。

「——おいで、皆」

何処かに呼びかけ数瞬の後、背後から聞こえてくる甲高い鳴き声。振り向けば、昇降口よりはたたく黒いナニかが入ってくる。

鳥だ。それも10羽近くの。

「ああ、墓之瀬くん。警戒する必要はないよ。私が呼んだんだ」

「冥さんが……？」

「そ。私の術式さ。黒鳥操術……鳥を操れるんだ」

「へえー……面白いつスね」

「フフ……さて、皆。行ってきてくれるかな？」

冥さんが集まったその鳥たちに呼びかけると、鳥たちはまた甲高い声を上げて校内を飛んでいく。

「おお……え、何してるんですか？」

「偵察だよ。私は鳥と視界が共有できるからね。それを利用して呪霊を捜しているんだ」

「黒鳥操術すごお……いや、冥さんがすごいのかこれ？冥さんがスーパーウーマンなのか？日下部さん、どう思います？」

「……いやオマエ、さつきまでの緊張感はどうした？」

「緊張するのに飽きたんでどっかやりました」

「緊張感つてそんな簡単にどうこうできるもんだったか??」

できるもんなんだよな……いやまあ、ちよつとはまだ緊張してるといふか、ビビってはいるけど……よく考えたら冥さんも日下部さんもいるから、そこまで心配いらぬ気もする。なんかこの2人つて、実力が未知数すぎるから逆に安心できるんだよ……。

「……ん？鳥が殺られたね……この位置は、3階の丁度真上——ッ！」

「うおッ！」

「ぬぁッ！」

——それは、突然のことだった。

冥さんの言葉を受けて、上階、天井の方を見上げた途端にそこに大きく亀裂が入り、爆音と共に砕ける。その先から鳥とは違う黒いナニかがいくつも飛び出て、次々と襲いかかってくる。

咄嗟に頭上に刀を構えてソレを受け止めようとし、攻撃の鋭さ、重さに耐え切れず床に片膝をつかさされる。

「ぐッ……このッ!!」

腕が悲鳴を上げる中、身体に通す呪力を増させ、なんとか攻撃を押し返すと、黒いナニかはすると物凄い速度で天井の穴へと戻っていく。

「ツ……冥さんツ、日下部さんツ！」

やっとの思いで攻撃を凌いだ俺は、慌てて2人を見やると――。

「危ないところだったね。無事かい？墓之瀬くん」

「不意打ちは心臓に悪いぜ、つたく……」

斧を肩に担いで冥さんは微笑み、刀を鞘に戻して日下部さんは悪態を吐いている。どちらも余裕綽々の様相だ。辺りの床には、先ほどの攻撃を仕掛けてきた黒いナニかが散らばっていたことから、難なく防いだことも分かる。流石にお強いな、おい……。

「……俺は無事っス、頑張つて防ぎました。それより今のつて……」

「おそらく例の遠距離攻撃だろうね。正体は……」

「――髪の毛だな」

冥さんの言葉を引き継いで、日下部さんが言う。視線の先、床に散らばっている黒いナニか。それは彼の言う通りに、異様に長い髪の毛だった。

「うん、多分自身の髪の毛を操る術式といったところだろうね。強度、長さ、伸びる速さ……そこら辺は自由に弄れると見て問題ないだろう。……と、また来るよ」

冥さんが言ったが速いか、再度天井が爆音を立てて碎ける。そして襲い来る幾本もの髪の毛の槍。

「んおツ……散髪的时间だオラアツ!!」

先の自分と同じ轍を踏むまい、少ない動作で受けずに避けて、天井から伸びた髪の毛の槍に刀を振る。僅かな拮抗の後、斬り払うことに成功した。

絶え間なく降り注ぐ髪の毛の槍に、その動きを何回か繰り返していると、同じく髪の毛を斬り飛ばしていた日下部さんから呼びかけられる。

「おい墓之瀬！校舎やる前にやってた呪力のせた斬撃、上に放て！」

「上に!?……なるほど落とすんすね！」

意図を察した俺は、隙を見て飛ぶ青黒の斬撃を放つ。斬撃は既にボロボロだった天井を破壊して尚突き進んでいき——おぞましい悲鳴が上がる。

髪の毛の攻撃は止まり、上階は崩壊、建材が続々と落ちてくる。それに紛れて落ちてくる、黒い影。黒い影は床に衝突する前に身を翻し、着地を果たす。

土煙が立ち込める中、見えるその黒い影の姿は、やはり奇つ怪なものだった。

顔は長い髪の毛に覆われており、合間より覗く目は常軌を逸していて、口は縦についている。女性のような身体も長い髪の毛に包まれており、腕は身体の前で自らの髪の毛に拘束されていた。

「……イタい……！よくもやってくれたな……！コロ、コロす……！ゴミどもがッ……！」

呻き叫ぶ呪霊から、髪の毛の槍がまた放たれる。

対抗して俺も斬撃を飛ばすも、無数の髪の毛の槍に吞まれ霧消、更には槍が襲いかかってくる。

「クツソツ……!!」

避ける、逃げる、躲す、斬る。

必死の思いで槍から身を守るも、ジリ貧なのは目に見えている。なんとか打開案を打とうとするも、荒波のように迫る髪の毛の槍に、やがて太刀打ちできなくなり——髪に、吞まれる。

「ヤバッ……!!」

呪力で身を固め、なるべくダメージを抑えにかかり、同時に刀を振り回し、髪の毛の波からの脱出を試みる。

しかし、四方八方、一面髪に包まれた中では、その抵抗も大して意味をなさず。

ジワジワと、髪に溺れていく。

マズい……!!クソツ、溺れるならお金か女に溺れたいツ! (錯乱) 髪ツ、お金になれツ! 髪ツ、女になれツ! 髪ツ、お金になれツ! 髪ツ、女に——!

「——(ハッ)までだな」

「わっ」

——ひょいっと、視界が開き、身体が持ち上げられる。

首だけ動かして確認すれば、それをなした主は、刀を肩に、タバコをふかした日下部さんだった。

「助かりましたッ、日下部さん！」

「おー、無事か？」

「特に怪我はないっス！」

「ま、オマエの実力ならそりやそうだよな。とりあえず今は、ちよつと休んでろ」

無造作でありながらも目にも留まらぬ速さで刀を振り、髪の槍波を斬り払う日下部さん。

その後ろで俺は小休止、呼吸を整える。

……え、日下部さん、めっちゃ強くないか？さつきも今も、ずつと余裕そうだし……つてか、あれ？冥さんはどうしたんだ？いづこへいづこへ……お、いた。俺たちのいる廊下の向こう、ぶち壊れた壁を越えた教室内で、斧ブンブン振り回してる。あの人も段違いでめっちゃ強いやん。ええ……？

彼らとの差に半ば引き気味で驚いていれば、視線に気付いたのか、冥さんがこちらにウインクを一つ。

その動作に胸を撃ち抜かれていると、彼女は斧を振り回しながら身体をくるりと回し——気付いたら、片腕の中に、鳥が慈しむように抱かれていた。俺も慈しむように抱か
れたい。

欲望を覚えていると、冥さんが、その鳥を宙に放り——黒の軌跡が棚引く。
目にも追えない速さ、次の瞬間には弾けるようなけたたましい音が響く。
早急に軌跡を辿れば、その先には。

「…………ア、ああ…………!？」

どてっ腹に風穴を開けた髪 of 呪霊が、呆然と目を見開き立っていて。

やがて呪霊は、ゆっくりと崩れ落ち、形を失くした。

……………は……………?

「——神風……………自死を強制させる代わりに呪力制限を消した鳥を体当たりさせる……
私の必殺技だよ。驚いたかな? 墓之瀬くん」

「いや……………驚いたっていうか……………」

「……………やんのが遅えんだよ、冥冥」

「フフ……………そうボヤくな、日下部。そもそもの目的は、墓之瀬くんに上級の呪霊との戦

いを経験させることなんだから」

「……まあ、それもそうか……」

ゆつくりとこちらに歩み寄りながら、事もなげに言葉を交わす2人。

その振る舞いに、俺は、畏敬の念を覚える。勝ち目なんてまるで見えなかったあの呪霊に対しての、気にも留めないような態度。どうしようもなく憧れる。俺もいつか、あれほど強くなれるだろうか。もしなれたら、きつと……。

「……きつと、女の子の術師にモテモテになれそうな気がする!!」

「ん? 何の話かな?」

「本当に何の話してんだ?」

「いや、こつちの話です!……それより任務はこれで終わりですか?」

「うん、そうだよ。今、鳥に見回らせたけど、呪霊の気配はなかったからね」

妄言を脇に追いやって尋ねると、上がりの報告。よかった、流石に疲れてたから、これ以上はちよつと遠慮したかったんだよな……。

「——んじゃあとつとと帰るぞ。いつまでもこんな辛気臭いところには居たくねえ」

「そうだね。それに私は報酬のつり上げをしないと。フフ、いくらまでいけるかな?」

「……はい、帰りましょう!」

——胸に、小さな。けど確かな憧憬の火を灯しつつ。
俺はまとまりなく喋る2人と、帰途についた。

第5話 先輩

梅雨が鳴りを潜め、代わりとばかりに、呪術高専一帯にセミの鳴く声が木霊する。

寮から校舎へと続く道を歩きながら、夏を感じさせるその風物詩に、俺は感想を抱いた。

クソうるせえ、死ぬほど不愉快だ。セミ、失せる…!!

——呪術高専の敷地内は、緑が多い、すなわち木が多い。加えて立地も山の中だ。そのため都市部と比べて、異様にセミの数がある。

それにプラスして、俺は耳がいい。どれくらい耳がいいかというと、落ちた小銭の種類を聞き分けられるレベル。この特技で俺はこの前日下部さんに、落とされた小銭の金額を当てられたら貰うという条件で賭けをし、589円をむしり取った実績も持っている。

これらの要素が組み合わさった結果、高専の建物外に出るのが俺には地獄と化してしまっているのだ。もう一度言おう、クソうるせえ。

耳障りなセミの合唱に顔をしかめつつ、足早に校舎へと入る。

校内は壁が分厚いからか、もしくは結界でも張っているのか、遮音性は高くセミの声は聞こえない。

心地好い静けさにほっと一息を吐き、教室に向かう。てくてく廊下を歩きながら考えるのは、今後の予定だ。

昨日の任務終わりに夜蛾先生から聞いたのだが、なんでも彼、今日の午後から出張に出るらしい。けれどそうすると、その間は俺を指導してくれる人がいなくなってしまうので、今日の午前中にでも誰か代わりを連れてくると言っていたのだが……と、着いた。

お馴染みの教室の扉を開け、中へ。広々とした空間にポツリと置かれた机に哀愁を感じつつ近付き、椅子を引いて、長ランの裾をバサリとしながら座り。背もたれに体重を預け、椅子の前足を上げてカターン、カターンとゆらゆらさせながら、思案を続ける。

……しっかし、代わりを連れてくると言っても……どんな人が来るんだろうか？ 既知の人だったら冥さんがいいけど……美人の女教師って男子の夢じゃない？

知らん人を連れてくるんだったら……そうだな、なんでもいいからとにかく態度良さげな人をお願いしたい。仲良くなれる感じの。

バイトしてたとき居たんだよなー、クツソ態度悪いやつ。初めたての頃、その人に仕事の内容の確認をしたら、いちいち舌打ちしてから説明してくんの。で、説明終わって

もそれくらい自分で考えろよ……とかブチブチ言ってるのね。ほんと何？あれ。親類に罵倒やら暴行されても笑っていられる俺の面の皮の厚さがなかったら泣いてたぞ???

……まあでも、贅沢言うならそりや可愛い女の方が嬉しいけどな……そろそろ俺も青春したいし。生きるため、青春するために高専に入ったのに、この数カ月でやったそれらしいことといえば、夜蛾先生と飯行ったり、日下部さんと飯行ったり、夜蛾先生とシヨツピングしたりくらいだ。むさ苦しすぎる。いや、楽しかったけどな？

まだ見ぬ指導者に思いを馳せつつ椅子をカターン、カターンさせてゆらゆらすると、数分。

にわかに廊下が騒がしくなる。どうやらご到着のようだ。

やがてガラリと開く扉、いつも通りの強面が入ってくる夜蛾先生に連れられ入ってきたのは、1人の少女だった。

艶やかな黒の髪をおさげにしており、やや吊り目がちであるものの整った顔立ちをしている。背はそこまで高くなく、すらっとしたその体軀を、高専のものと思われる黒の制服で包んでいた。

そんな彼女と共に教壇に上がった夜蛾先生が、口を開く。

「——すまない墓之瀬、少し遅れた。待たせたか？」

「ううん、今来たところ……なんちゃって、きやつ♡」

「なるほど、つまりオマエも遅刻していたという事でいいな?」

「よくないですよ、冗談よ冗談!ちゃんと早くに来てましたよつ、ちよつと待ちましたよつ!」

「はあ……なら最初からそう言え。……と、それよりもだ」

そこで彼は一旦言葉を切ると、隣に立つ少女を手で示し。

「紹介しよう。彼女が俺の代わりにオマエの指導を務めてくれる……」

「庵歌姫、あなたの2つ上の先輩になるわ。よろしく」

受けて彼女は、にこやかに告げる。本当に可愛い女の人 came ことに、驚きと感動を覚えつつを俺は挨拶を返す。

「はい、よろしくお願ひします、いおりん先輩!俺は墓之瀬聡人です!」

「墓之瀬くんね、うん、分かっ……いおりん先輩??」

「うん、いおりん先輩。あ、馴れ馴れしすぎました?じゃあ分かりました、マライア・キヤリー先輩はどうですか?」

「それマジもんの歌姫じゃないの、やめてちょうだい。普通に歌姫でいいわよ」

「いいんすか?じゃあ……これからよろしくな、歌姫」

「呼び捨てにして良いとは言つてないわよ、先輩を付けなさい先輩を。……ちよつと夜蛾先生、この子何なんですか?」

「問題を起こさない問題児だ。俺も手を焼いている」

疲れた様子を見せる2人。つてか問題を起こさない問題児とかめちやくちや厄介じゃん、可哀想に……と思っていると、夜蛾先生が思い出したように腕時計を見やり。

「……む……しまったな、そろそろ時間だ。すまないが、俺はもう仕事に出向かなければいけない。歌姫、後は頼んだ」

「はあ……とりあえず、なんとかやってみます」

「ああ。それと聡人、オマエは自重するように。あまり歌姫に迷惑はかけるなよ？」

「あー……前向きに検討し、予定を調整していく方向で善処します」

「その回答、次またしたら殴るから、覚えておけ」

「ひゃい……」

俺の返事を聞き届け、こちらに一睨みした夜蛾先生は、足早に教室を後にし。

教室には、教壇に立つ歌姫先輩と、椅子に座る俺だけが残される。

何とも言い難い奇妙な沈黙が教室に流れる中、夜蛾先生を見送っていた歌姫先輩が視線をこちらに戻し、口を開いた。

「……さて。それじゃあ今日から少しの間、私が墓之瀬くんの指導を担当するわけだけど……私も人様に授業できるほど、まだ呪術に精通してるとは言えないのよね。だから私が教えられるのは、呪力を扱う上でのコツとか、そういうちよつとした部分になる

わ

「ほお……いや、むしろ願ったり叶ったりって感じですね。俺、基本戦うときは大雑把なんで……」

「あら、そうなの？ふふっ、なら丁度良かったわ」

俺の言葉に、小さく笑ってみせる歌姫先輩。……え、可愛い……俺、こんなキューティーでハニーな先輩に、これからアレコレ教えてもらえるの？勝ち組じゃん……！

「まずは……そうね、口頭でコツを伝えて……あ、黒板も使っちゃおうかしら？まあ、色々簡単に説明するから、それを大まかに理解してもらった後、グラウンドで練習してもらおうわ。いいかしら？」

「はーいー！」

「いい返事ね。ああそれと、午後は実習するから、そのつもりでいてちょうだい。……じゃあ、説明を始めるわね——」



——密室で2人きり、美人の先輩にみっちりイロイロと仕込まれ（語弊ありまくりんぐ）。

グラウンドに出て、実際に教えられたことを意識しての動きを軽く練習した後。俺は歌姫先輩と共に、補助監督さんの車で、東京の郊外にある小さな町の、空き家が集合している地帯にやって来ていた。

順々に並ぶその空き家たちは、形は崩れ、何とか残っている外壁も蔦で覆われている。また周囲の地面には、窓ガラスの破片や、建材の板木、屋根の瓦が散らばっていた。

「——この辺りね、呪いが出るのは。たしかに特有の気配もしているし……うん、間違いないでしょう。それじゃあ墓之瀬くん、早速帳を……墓之瀬くん？どうかしたの？」
「ん……いや、やっぱり歌姫先輩、巫女服めちやくちや似合ってるなって思つて。イ趣味っスね」

「ちよっ……！だからこれはっ、趣味とかそういうのじゃないって言ってるでしょ!？」
これは戦闘服みたいなもので……!」

改めて漏らした俺の感想に、頬と耳を羞恥で赤くして、猛抗議してくる歌姫先輩。

その彼女が身に纏っているのは、楚々とした紅白の巫女装束だ。清廉な衣装は、彼女の射干玉の美しいおさげ髪と相まって、歌姫先輩の魅力を十二分に引き出していた。

「もおっ、また口聞かないわよ!？」

「すいやせん、それはご勘弁を……!」

腰に手を当てこちらを指差し、お叱りをもたらす彼女に、たまらず白旗を上げる。

既に高専からここに来る前、巫女服に着替えた彼女に褒め言葉やらからかいやらをお見舞いした俺は、車中でお昼をとっている間、口を聞いてもらえていなかったのだ。運転していた補助監督さんは、とても居心地の悪そうな顔をしていた。

「またもそんな事態になられても困るので、俺は彼女を宥めつつ、すぐに実習に取りかかることにする。」

「帳ね、帳下ろせばいいんすよね。任せてください、じゃんじゃか下ろしちゃいます。帳のタイムセールしちゃいます」

「やめなさい、一つで充分よ」

「ういっす。……でも俺、帳下ろすの苦手なんすよね……以前住宅街の廃屋敷でやったときは、その町の1丁目から4丁目まで全部囲っちゃったし」

「むしろそれだけ広範囲に触媒なしで帳を下ろせる呪力量がスゴいわね……。大丈夫よ、午前中に教えたときは、呪力の制御も簡単な結界術も、きちんとできてたもの」

「……まあ、歌姫先輩がそこまで言うなら……」
論されて。

彼女から学んだことを意識しつつ、俺は印を結び、祝詞を誦じる。

「——闇より出でて闇より黒く、その穢れを禊ぎ祓え……」

囲むべき端から端までを確認、帳の規模を頭に描く。流れ出させる呪力はほんの少

し、かつ一定量に設定、広大なものにならないように注意し——訪れる夜。

呪力の供給接続が切られた、すなわち帳が完成したことを理解した俺は、小さく息を漏らしながら辺りを見渡す。

パツと見た感じ、範囲は以前とは比べものにならないほどの小ささだ。帳の縁がしっかりと視認できる。けれども奥に見える廃屋どもまでしつかりと囲まれているし……これは、上手くいったんではないだろうか？

「……どうですかね、歌姫先輩？」

「そうね……うん、綺麗にできてると思うわよ。大きさも広すぎず狭すぎず、ぴったりに。花丸をあげられるわ」

「わーい。でも歌姫先輩にご教授いただいたおかげっすけどね」

「教わったことを実践できてる時点で充分花丸なのよ……つと、お喋りしてる場合じゃないみたいよ、墓之瀬くん」

彼女がぴしつと指を、空き家たちに向ける。辿った先には、蠢く黒い影。

「——呪霊のお出ましね。情報によると、低級の群れらしいから、1匹残らず祓ってちょうだい。ああでも、その最中、廃屋を傷付けたらダメだから」

「え、マジですか？」

「ええ。これから先、狭い場所で戦うこともあるでしょうから、今の内に教えた呪力制

御をしつかり身に付けて、コンパクトに戦えるようにしておきなさい」

「なるほど、りよーかいです」

刀袋から刀を取り出し、腰に差しつつ言葉を返す。

そして俺は、その場に歌姫先輩を残し。

徐々に形をなしていく呪霊たちに向けて、呪力で身体を強化しながら、近付いていった。



——1つの廃屋から伸びる黒い影が、不規則に揺らめく。ゆらゆらと動きながら、その大きさを拡げていく影は、周りにある廃屋の影に交じり——トプ、トプトプと。影が、次々立体に浮き出ていく。

現れた呪霊たちの姿は、皆一様であった。

ソレらは、ネズミのような見た目をしていて、大きめの犬ほどの体躯で、胴の至る所から巨大な眼が覗く。頭部から生える耳は尖っており、眼は胴のものと同じく巨大で、ギョロついていていた。

「シャシン……トロウ……」

「クラい……」

「スシ……タベたい……」

「相変わらず何言ってるか分かんねえな……寿司は俺も食べたい。ウニとか食ってみてえ」

呪霊たちの戯言に反応しつつ、抜刀する。鈍く輝く刀に呪力を纏わせている合間も、ネズミの呪霊たちは数を増やしていき——今では、空き家と空き家の間道を埋め尽くすほどになっていた。呪霊たちの大きさと廃屋の大きさからして、数は100前後といったところだろうか。

止めどなく増殖を続けたネズミの呪霊たちは、やがて道に入り切らなくなり、溢れる。寄声を発しながら駆けてゆく先にいるのは、学帽に長ラン姿のイカした青年、つまり俺だ。

「廃屋は壊しちゃいけないから、出力は抑え気味、でも祓えるくらいに呪力は籠める、か……むずかし」

ひとりごちつ、刀を腰だめに構える。

さながら特急電車のように突っ込んでくるネズミの呪霊の群れ、それに向けて、俺は刀を振るい——飛ぶ青黒の、太き斬撃。

斬撃は、駆ける呪霊たちを、一路に沿って呑み込んで進んでいく。一頻り呪霊を祓つ

たところで、斬撃は姿を散らした。

しかしそれでも、ネズミの呪霊は依然半数ほどが残っており、突進を続けている。2度3度と、俺はまた建物に注意しながら斬撃を飛ばし、ヤツらの数を減らしていく。残りの数が20ほどになった辺りで、呪霊たちは危機感を抱いたのか、家々の狭間、散り散りに脇道へ逃げ込み始める。

それに対し俺は、1匹も取り逃すまいと脚に力を籠め、駆け出し——呪霊たちを飛び越え、その前へと降り立つ。

「はい、おいでおいで——」
期せずして俺に飛び込むことになったネズミの呪霊たちは、慌てて止まろうとするも、勢いは殺せず。

俺の放つ呪力の斬撃に吞まれ、姿を消した。

「これぞ俺式ネズミ取り……って言っても、ただの先回りだけだな。さて、残りは……」

一旦刀を鞘に仕舞い。

高く跳ぶと、崩れかけの廃屋の1つに屋根に、静かに乗る。
風に長ランがはためく中、目視で呪霊の生き残りを探す。

おそらく残るは1匹……呪いの気配を感じる。しかし、その気配が微かすぎて、上手

く辿れないのだ。

呪力で強化した目を皿のようにして、辺りを見渡し——いた、向かいの家の3つ隣の家の影、ネズミが隠れてる。

俺はふわりと軽く跳び、屋根を発つ。

学帽が僅かに浮き、長ランがパタパタと音を立ててなびく。

全身に風を感じながら、俺は潜んでいたネズミの呪霊の背後に着地すると。

呪霊が振り向く前にソレの身体を蹴り飛ばす。

呪霊はその衝撃に耐え切れず、パアーンツと破裂音を上げ肉塊となり舞った。

「たまやー、つてか?」

恒例の台詞を吐きつつ、呪霊の肉塊が消失したのを確認してから、再度気配が残っていないかを探る。

念入りに索敵をし、ようやく残りがいないことを確認した俺は、最初の通りに戻り、待っていた歌姫先輩に手を振る。

「——終わりました、歌姫先輩ーい」

「ええ、見てたわ。お疲れさま」

微笑んで、彼女が労いの言葉をくれる。優しい……実家のような安心感……まあ実家に安心感なんてなかったけどな!

「で、見てた感じどうでした？個人的には割と良くできていたと思うんですけど……」

「私も同意見ね。呪力制御はきちんとできていたし、動きも良かった。また花丸をあげられるわね」

「お、2個目。けどそれもこれも、歌姫先輩のおかげですよ。マンモス感謝」

「おべっかなんて使われても、何も出ないわよ?」

呆れたように笑って、歌姫先輩が言う。本当に感謝はしてるし、本当に歌姫先輩のおかげなんだけどな……まあ面と向かつては恥ずかしいから伝えないが。

そんな風に軽く談笑しながら、帳を上げる。

戻ってくる昼の高い日差しの下、次いで歌姫先輩からアドバイスなんかも貰い、いざ高専へ帰ろうかとなったところで。

P i P i P i P i P i ……と鳴り響く電子音。

なんぞやと思っていると、歌姫先輩が巫女服の袖口から携帯電話を取り出し、こちらに少し待つよう指示してから耳に当てる。

はい、や、ええ、といった相槌を打ちつつ、彼女は通話先の相手と言葉を交わしている——段々と、その表情が固くなる。……悪い報せなのだろうか？

心配している内に、やがて通話を終えた歌姫先輩が、俺を見て。

「……墓之瀬くん、緊急の任務よ。準備して」

「緊急ねえ……内容は？」

「呪霊の巣と思われる場所に訪れた一般人の、生存の確認ないし救出。ただし、派遣されるのは私とあなただけで、想定される任務の等級は……準1級よ」

「シンプルヤバイやつ来たなあ、おい……」

重苦しい声で、歌姫先輩が告げる。

「しっかし準1級相当とは……たまげた。明らかに手に余る任務だ。けれどもこの業界は人手不足が常らしいし、これから先も、似たようなことが起きるのかもしれない。尤も、これから先があるのかという話にもなってくるわけだが……」

「……まあ、せっかく呪術師になつてある程度自由に生きられるようになったというのに、まだろくすつぼ青春じみたことはできてないんだ。こんなところで死ぬなんて、絶対ごめんだ。それによく歌姫先輩という、可愛い先輩にも会えたのだ。必ず任務を生き延びて、もっと仲良くならなければ。」

「……覚悟はいいわね？墓之瀬くん」

「もちのろん……全力を尽くしましょう、歌姫先輩」

「ええ、頑張りましたよう」

——強く、決意を固めて。

俺は歌姫先輩と共に、現場へと急行した。

第6話 死・指・肢・思

任務の現場たる閉鎖されたショッピングセンターの中は、生暖かでジメつとした空気が渦巻いていた。

帳を下ろしていることと、電気が通っていないこと、空間が広くそれぞれの窓やドアが遠いことから、明かりは僅かで全体的に暗い。

その暗がりには広がるのは、タイヤ張りの薄汚れた通路と、その両端に構える錆びたシャッター。天井には、電気や空調の配管が剥き出しになっている。

そしてどこからかは、いつぞやの廃校で感じたのと同程度の、濃密な呪いの気配も漂ってきていた。

——呪いの住処となっていたショッピングセンターを訪れた一般人の、生存確認及び救出。

それが今回の緊急任務の主目的だ。

歌姫先輩が補助監督さんから聞いた話によると、このショッピングセンターは数年前

に閉鎖された施設で、近くには墓地も存在しており、本来なら高専関係者による巡回が必要な場所だった。だが、担当の窓の人の怠慢で、報告がもたらされていなかったのか。

そのため呪いが発生、尚且つ強大化を遂げていたところに、折り悪く昨夜、大学生と思われる一般人4名が、肝試し目的で入り込んでしまい、消息を絶つたらしい。つまりこの4人を、1級相当の呪霊に見つからずに探さなければいけないというわけだ。

「——地上3階に地下2階……歌姫先輩、どっちから探しますか？」

刀を抜き、全身に呪力を流しての臨戦態勢をとつたまま、同じく臨戦態勢で周囲を窺っている歌姫先輩に声をかける。

彼女はやや硬めの声で、俺の問いかけに答えた。

「そうね……地下から、かしら。1階はもちろんのこと、2階、3階からは、頑張れば脱出できないことはないわ。例えば、飛び降りたりしてね。大怪我を負う可能性はあるけど、呪霊に襲われていたら、恐怖に駆られてそれくらいのことをする人もよくいる。でも今回はそんな人はいない……だからもし彼らが生きているのなら、容易に外に出られない地下にいるんじゃないかって思うんだけど……」

「なーるほど……そう聞くと、たしかに地下の方が居そうに感じますね。じゃあ、地下から探しましょう」

「ええ。それじゃあ私が前に出るわ。墓之瀬くんは、後ろに注意してちょうだい」
「了解です」

大まかな方針を定め、ショッピングセンター内を進む。

辺りが静寂な空間であることから、コツ、コツ、と通路を歩く自分達の足音が、際立って聞こえる。濃い呪いの気配と、それがまた余計に緊迫感を煽り、妙にこちらを萎縮させてくる。嫌な雰囲気だった。

折角女の子と歩いているのだから、もうちよつと色気のある雰囲気になってほしいものだと、惜しみつつ、きちんと周囲を警戒して、行く。

最小限の会話を交わしながら、止まったエスカレーターをつたって地下1階へと降り、慎重に見て回り。

「……………酷いわね……………」

ふと足を止めた歌姫先輩が、ポツリと心情を漏らす。その言葉が、目の前にある光景の全てを物語っていた。

いくつも並ぶ、閉じられたシャッターたちの前で。凄惨な姿となって、彼らはその生命を散らしていた。

1人は、まるで空き缶を潰すかのごとく、身体をグシャリとリングゴの芯のように変形させられていた。

1人は、無理矢理にボールのように丸められていた。

1人は、身体にいくつかの穴が空き、蜂の巣のようになっていた。

1人は、頭部のなくなった状態で、力無く床に伏せていた。

脊髓に、氷柱が差し込まれたかのような冷たい感覚が走る。嫌な汗が、背中を微かに湿らす。

死んでいた。疑いようもなく、彼らは全員とも死を迎えていた。

「……墓之瀬くん……大丈夫？」

「……良い気分ではないですね……」

「そう……よね……」

「……まあ、割り切りますよ。それより歌姫先輩、この人たち、どうします？連れてきますか？」

こちらを気遣い言葉を紡ぐ歌姫先輩に、心配要らないことを告げて、尋ねる。

彼女は、それでも少し心配そうな様子を見せながらも、俺に答えを返した。

「……いえ、この人たちには申し訳ないけど……私たちでは、日の元に連れて帰ることはできないわ。できるのは、高専側に結果を伝えて、1級術師を送ってもらうよう取り

計らうくらい」

「……そつスカ……まあ、そうつスよね……おつけー、分かりました。……それじゃあ歌姫先輩、早いところ戻りましょう」

「……そうね」

お互いに、表情に陰を落としつつ。

考えを共有した俺たちは、散らばる遺体を置き去りにして、元来た道に戻る。重たい雰囲気のまま、何度か角を曲がりながら、暗い通路を進んでいき――。

「――ツツツ!!??」

ゾワリと、全身の毛が逆立つ。身体の至る部位が、危機を訴えてくる。曲がり角の先の闇の中。

下半身に比べて上半身が異様に発達した、巨躯の呪霊が、そこに待ち構えていた。人間じみた外見であるものの、顔の目のあるべき場所からは捻り曲がった羊の角が1本ずつ生え、口や耳、髪はない。

特筆すべきは、その圧だ。押し潰されそうな重い空気に、感じる呪力量。間違いなく1級の呪霊だ――。

「——墓之瀬くんツ、逃げるわよッ！」

「ッ、はいッ！」

突然の会敵に固まっていると、歌姫先輩の鋭い声。

それに身体の縛りを解かされ、弾かれたように俺は、呪霊に背を向け逃走を始める。ドシドシと巨体を揺らして呪霊が追いかけてくる中、隣を走っていた歌姫先輩が1歩前へ出て、告げる。

「私が先導するわ！ついてきて！」

「でもッ、エスカレーターに繋がってる通路は呪霊の向こうにしかないっすよ!？」

「いえ、階段があるわ！建物に入る前、外観を見たときに確認したの！」

「マジかッ……！」

有能ッ……！有能すぎるッ……！まだ1日も経ってないのに俺、歌姫先輩のことめちゃくちゃ好きになってくわ……！

頼りになる彼女に続いて、遺体のあつた通路とは別の通路を駆けていく。

ちらと背後を見やれば、依然呪霊は追ってきてはいるものの、一定の距離は保たれたままだった。自らの巨体が、素早い移動を邪魔しているのだろう。

角を曲がり、並ぶシャッターの間を歩き、また角に差し掛かる。

「墓之瀬くんツ、あともう少しでッ——あッ」

——あともう少しで、階段だと。俺を安心させるために、おそらくそう伝えようと振り向いた歌姫先輩が。

角を抜けた先で、2条の黄褐色の光と共に、横合いに吹き飛ばされる。

「歌姫先輩ッ!!」

考えるより先に、床を砕く勢いで蹴った俺は、宙を舞う彼女の身体に追い付き片手で抱え——視界の端から迫る黄褐色の光、咄嗟に逆の手の刀で呪力の斬撃を飛ばし応戦する。

呪力がぶつかり合い、残光が散る。

その残光の向こうに見えたのは、小さな階段の前、2つある頭のそれぞれの口から腕を出した、四つん這いの人間のような容姿の呪霊だった。

2つの口から覗く腕の先、手は指鉄砲の形になっている。呪力の光線の出所はそこだろう。

そして感じるこの庄——おそらくコイツも、1級。

「……冗談じゃねえぞッ……!」

T字路となつている通路、背後から来ていた巨体の呪霊を置き去りに、右側に潜んでいた指鉄砲の呪霊から放たれる光線を避けつつ俺は。

歌姫先輩を抱えて、通路を脱兎の如く走り去る。

腕の中の彼女は、目を閉じて力無く項垂れている。

逃げている方向には、闇が広がっているだけだ。

それでも俺は、その闇に飛び込み駆けていくしかなかった。



掠れた吐息が、周期をもつて口から漏れる。

聞こえるのは、自らが通路を走る音だけ。

巨躯の呪霊と、指鉄砲の呪霊、2体の1級呪霊と会敵した俺は、命からがら逃げ出し、現在も尚、地下1階にて逃走を続けていた。

幸いどちらの呪霊も足は遅いらしく、見える範囲に姿はない。

どうやら撒くことはできたみたいだと安堵した俺は、偶然シャッターの開いていた1つの店内に、歌姫先輩を抱えたまま入る。

店内と称したものの、そもそもショッピングセンターが閉鎖されて久しいために、中に面影は残っていない。ある程度の広さを擁しただけのガラんとした空間が、ただそこにあつた。

店内の奥、壁際までに近付いた俺は、刀を脇に置いて、優しく歌姫先輩を降ろす。だ

が、その間の彼女の身動きは、一切ない。

もしかしたら彼女は……。

不安に駆られた俺は、彼女のほっそりとした白い腕をとって、その温かい手首に自分の指を当て、脈を測り。

………おい、これ……マジかよ……。

「……………脈、分つかんねえ……………」

自分の無知具合に愕然とする。

マジでびっくりした。脈、分からんすぎる。えっ、手首に指当てたらなんか分かるものなんじゃないのか？こう……トクン、トクン………みたいなさ、そんな血の動き。全然感じないんだけど。……いや待て、感じ取れないのは、もしかしたら本当に死んでるから………？

「……………冗談じゃねえぞ……………」

嫌な考えに至った俺は、その考えを否定すべく、手取り早く彼女の心臓の動きを確かめようと、彼女の少し乱れた胸元に手を伸ばし――。

「……………えつ、鼓動確かめようとしたらこれ、おっぱい触っちゃおう?!」

——直前で、止まる。

……いや、バカなことを思ってるのは自分でも分かる。そんな場面じゃないことも分かってる。けど……男子高校生として、思春期の男して、どうしても気になってしまうのだ。それほどまでに、おっぱいが意識を惑わしてくるのだ。

触つて、いいのか……? いやでも俺は、然るべきとき、然るべき場面で、触りたい。愛をもつて、おっぱいを触りたい。こんな、俺が不安を解消するためだけにおっぱいを触るなんて、そんなのはツ……………!

「……………あれ、よく考えたらさつき触った手首、温かったな……………」

思い出した俺は、胸元に伸ばしていた手を戻し、再び彼女の手首を触る。やっぱり脈の有無は分からないけど、温かい。これは……ちゃんと生きているんじゃないだろうか?

手首から手を離し、今度は首筋にも手を当ててみると、やっぱりこちらも温かい。最後に手を彼女の口の前に置いてみると、僅かに吐息も感じられた。

全然生きとるやん。ごりつごりに生きとるやん。焦ったあ……なんだ生きてんのか、良かった良かった……………!

深い安心感に、ほおっ……と、息が溢れる。

あの光線、思い切り直撃していたように見えたけど……咄嗟に呪力で守ったのか？ともあれ、生きててくれて良かった……！

「歌姫先輩、起きてください。ほら、歌姫先輩ーい？」

「……………」

余裕すら感じられるようになってきた俺は、彼女の柔らかな頬を軽く叩き、覚醒を促す。

流石に彼女を抱えてあの2体の呪霊をやり過ぎし逃げるのは厳しいからな。きちんと2人で作戦を立てて、それを共有して逃げねば。

「朝ですよー、歌姫先輩。ほんとに昼だけど。ほら起きて」

「……………」

「歌姫先輩ーい、まだー？早くー」

「……………」

「……………歌姫先輩…………？」

ぺちぺち、ぺちぺち。頬を刺激するも、彼女は微動だにしない。

えっ、ちよっ……この人、しつかり深く気絶してないか???

「——う、歌姫先輩ッ!?起きッ、起きてッ、歌姫先輩ッ！」

「……………」

「起きろッ、歌姫先輩ッ！起きないとおっぱい触るぞッ！揉むぞッ！揉みしだくぞッ！」

「……………」

「……だ、駄目だ……！全っ然反応しない……！余裕ぶっこいてる場合じゃなかった、普通にヤバイ状況だった……！」

「ど、どうする……!?意識のない歌姫先輩を連れての逃走はまず難しいし、かと言ってここで彼女が起きるのを待っているわけにもいかない。」

「何故ならここは、1本通路の最果て。逃げ場はなく、見つかるのは時間の問題で、見つかったら一巻の終わり。俺はまだしも、動けない歌姫先輩は、呪霊たちにとっては格好の的に違いないだろうからだ。そんな彼女を守りながら、1級の呪霊を相手取るなんて所業は、今の俺には不可能だろう。」

「あるいは、彼女を置いて1人で逃げるなんて選択肢もありはするが……その選択は、絶対に採らない。採れない。初めてできた、尊敬できる可愛い先輩なんだ。見捨てるなんて真似、到底許容できない。」

「だとしたらもう、俺が採れる選択は、1つしか残っていない。」

「叩いていた歌姫先輩の頬に、今度は軽く手を当てる。伝わってくる、温かな熱。」

乱れている彼女の髪も、ちよちよいと整えてあげて、勇気を貰った俺は、刀を拾って立ち上がる。

ゆっくり息を吐いて、彼女に教えてもらった方法で、改めて身体に呪力を流して強化していく。

「……等級は、関係ない。呪霊を祓って、ここを出て。もつと色々青春するんだ」

——覚悟を決めて。

店内を出る。

左右に伸びる通路、左側の奥には、行き止まりの壁が立ち塞がる。

右側には、闇が広がる。どこまでも続くように感じる、暗い闇だ。

その闇の中を、俺は1歩1歩、踏み締めて進む。

耳鳴りのするような静寂に、足音が反響する。

とても長かったように思えるし、あつという間だったようにも思える時間を歩いて——
遭う。

床を鳴らしながら向かってくる、上半身の目立つ、巨軀の、羊の角を持つ呪霊。

運がいいのか、見たところ、指鉄砲の呪霊は居なさそうだった。

徒党を組んでいるわけではないのか……う……いや、今はそんなことはどうでもい

い。今はただ——祓うことだけを考える。

「——ジンギスカンにしてやるよ。臭くて食べたもんじゃあねえだろうけど」
振り下ろされる岩のごとき拳と、斬り上げの刀が衝突する。
腹の底に重く甲高い音が響き、籠められた呪力の破片が舞う。
決死の呪い合いの火蓋が、切って落とされた。

第7話 目を覚ます

ゴウツと、風切り音を伴って、右の巨腕が振り下ろされる。

バックステップでそれを躲すと、呪霊の拳が床へと突き刺さり、タイルを砕く。

割れたタイルが浮き上がる中、巨腕の上を駆けて俺は、呪霊の太い首元に迫り——横から来る左の巨腕、跳ぶことでそれをも下に躲す。

しかし滞空する僅かの身動きの取れない時間、見計らったかのように返す巨腕が払われ、構えた刀と共に吹き飛ばされる。

俺は足裏で地面を擦って、その衝撃をいなし、残った衝撃も、最後に宙返りすることで飛ばした。

「——フーツ……力強えなー、おい……ドカベンか？ だったら気は優しくあつてほしいもんだよ、まったく」

愚痴を吐きつつ、彼我の差を推し測る。

この呪霊、呪力量は多いが、目を見張るほどじゃあない。厄介なのは、巨大な上半身から繰り出される攻撃だ。素早く、重い。防御せずに食らうのは、まず危険だろう。

術式は……上半身を巨大化させるといったところだろうか？初めに会って、逃走したときと比べて、肥大化してる気もするし……。もしくは、身体のカタチを弄くる、なんてのも考えられるが……。詳しいことは分かんねえな。もう1体の呪霊は、口から出ている腕の指鉄砲から呪力の光線を飛ばすっていう、分かりやすい術式だったのに……。とにもかくにも、俺がこの呪霊を祓うには、巨腕の攻撃を避けつつヤツの身体を斬り付け、ときたま遠くからも呪力の斬撃を放って、チマチマと削っていく……。それしかないだろう。

指針を立てた俺は、ノシノシと音を立てて近寄ってくる呪霊へと駆け出す。

すると、焼き直しのようにまた風切り音を伴って振り下ろされる呪霊の右の巨腕。

今度はそれに立ち向かう形で刀を斬り上げに振り——暫しの拮抗、押し返すのは厳しいと判断した俺は、無理はせずに攻撃を流す。

いなされた呪霊の腕は地面を叩き、間髪入れず、俺は、その腕に斬りかかる。

1級呪霊だけあっての硬さに最初は弾かれるも、呪力を割り増しで刀に籠めて振るい、やがて肉が裂け、血が舞い出す。

血肉を浴びつつ腕への斬り付けを続けていると、その腕が脈動、猛烈な速さで払われる。

股を開き、身を低く屈めることでそれを避けた俺は、がら空きとなった呪霊の懐に潜

り込んだ。

腿、脇腹、鳩尾、胸、肩、とにかくガムシヤラに刀を振って、呪霊の身体に傷を付けていき、左の巨腕が襲いかかってくる直前で後ろに大きく跳んで離脱、距離を取る。

生と死の綱渡りの攻防に、心臓をバクバクさせつつ息を整え、呪霊の身体を確認する。腕や胴に付けた傷は、呪霊の特性から治ってしまってしまっているものの、その速度は遅めだ。

そして呪霊は、いくら身体を再生できると言っても、再生に用いる呪力は有限だ。いつか必ず限界は来る。

「……なんとかかなりそうだな」

仄かに希望が見えてきた俺は、呪力の斬撃を、呪霊の顔目掛けて飛ばす。

だがその斬撃は、大きな腕によって防がれ、青黒の呪力が霧散し——それを目眩ましに俺は呪霊へと接近、胴体へと斬りかかる。

銀閃が幾つもの軌道を描き、呪霊の身体に次々と線が刻まれていく。

堪えたのか、今までにはないほどの速度、威力で呪霊が放つ拳を、ギリギリで俺は股下を転がり抜けることで逃れ、起きざまに背後から呪力の斬撃をまたお見舞いする。青黒の斬撃は、諸に呪霊の背中に突き刺さった。

「あつぶね……！けど結果オーライだ……！」

冷や汗をかきながら、ひきつった笑いを浮かべる。

視線の先の巨躯の呪霊は、身体の至る部位から血を垂らしつつ、よろめきながらこちらを振り向こうとしていた。

格上とまともに戦ったことはなかったが……案外イケるもんだな。確実に呪霊も消耗しているように見える。長い時間はかかるだろうが、この調子でいけば、きつと――。

「――祓える……!!」

確信を抱く。

希望を見出だす。

来るだろう未来に、高揚感を覚える。

イケる。勝てる。倒せる。祓える。

明るい感情に笑みを濃くして、ゆっくりと歩み寄ってくる巨躯の呪霊に刀を向ける。そして、力強く1歩を踏み出そうとし――。

「……………あ……………」

——脇腹を、熱いナニかが貫く。

少しの間、呆然と焼け焦げた自らの脇腹を見やり、緩慢にその視線を後ろに送る。

そこに居たのは、完全に意識から外れていた、もう1体——2つある頭のそれぞれの口から指鉄砲の腕を覗かせた、四つん這いの人間じみた姿の呪霊で。

「ツ……ハツ……！仲間外れはイヤだってか……!?」

嘲笑めいて漏らした俺の問いに答えるように、呪霊の指鉄砲から黄褐色の光線が放たれる。

俺はそれに呪力の斬撃を飛ばして相殺し——全身を突き抜ける悪寒、咄嗟に刀を上へ構え。

「——んがツツ……!!!」

次の瞬間、身体がバラバラになるような衝撃が俺を襲う。

拳だ。

巨躯の呪霊が、その大きな身体を思い切りに使った上からの拳を放ったのだ。

衝撃が俺を通って地面へと伝わり、床のタイルが網目状にひび割れていく。

あまりの重さに俺は、堪らず片膝をつき——微かに光る視界の端、呪力を全開に捻り出して纏うと同時に、黄褐色の熱線が貫かんと俺の身体を撃ってくる。

「クツソツ、追い打ちやめろやツ……!!」

脳裏をよぎる、死の予感。

ふと思ひ出したのは、夜蛾先生の言葉だった。

呪術師という存在を語る際に、彼からその言葉聞いた。

——呪術師に、悔いのない死などない。

ああ、まったくもってその通りだ。

悔いしかない。悔いしか残っていない。

人として生きるために、人並みの青春を送るために高専に入って呪術師となったのに、それらしいことはまだほとんど何もできていない。

歳の近い友人と、ご飯を食べて、お出かけをして、夏は海でも行って、偶には喧嘩でもして。

そんな夢のような青春を送れないままに、俺は死ぬのか？

折角会えた歌姫先輩と、こんなにすぐに会えなくなってしまうのか？

それで、いいのか？

「——いいわけねえだろうがツッ!!」

強い激情。

呪力が跳ね上がる。

今際のと看、混濁した意識の中で、俺はソレの存在を知覚する。

そして俺は、元から知っていたかのように、ソレを扱う言葉を紡いだ。

「術式解放ツツ——『呪限無』ツツ!!」



「術式解放ツツ——『呪限無』ツツ!!」

叫びに応じて、ゴツソリと呪力が持つていかれる感覚。

それに伴って、俺の足元から黒の霞があたかも洪水のごとく渦巻いて噴出し——巨軀の呪霊と、指鉄砲の呪霊に纏わりついていく。

——そして、顕著な異変が起こる。

表情はなく、されどどちらの呪霊もが戸惑いを見せる。

俺を潰さんと拳を押し付けていた巨軀の呪霊、その力がいたく弱まり、その肥大した上半身が瞬く間に縮んでいく。

俺を撃ち抜かんとしていた指鉄砲の呪霊、その指先から放たれる光線が止み、その身体もバランスを崩して地面へと前腕をつく。

生じた隙、逃すことなく俺は刀に力を込め、一思いに拳を押し返す。巨躯の呪霊もまた、バランスを崩してよろめいた。

その勢いに乗じて、満身創痍の身体を叱咤し、俺は立ち上がると。

「ハハッ、ハハハッ……！形勢逆転、だなあ……！」

左右に鎮座する呪霊を見据え、嗤って言う。

——術式『呪限無』、その効果は、名前の通りだ。

すなわち——対象のあらゆる呪いを制限ないし無効化するというもの。つまりは術式を、結界を、縛りを、呪力を、すべての呪いを妨げることのできる、最悪の過負荷。呪いを扱うモノは、皆一様に阻害を受ける。

それが、生死の境で掴んだ、『呪限無』という術式だった。

「オマエらよくも、散々いたぶってくれたなあッ……！！親戚一同のお歴々を思い出しちまったよッ……！！」

憤りに、恨みに、苦痛に、殺意に、それらを覆い尽くすほどの高揚に、五感が研ぎ澄

まされていく。

満ち溢れる呪力を身体に纏わせた俺は、一足飛びに巨軀の呪霊の懐に潜り込み——見える呪力の防御が薄い部位、膝を目掛けて刀を振るい。

歪む空間、黒い火花が——散る。

突如として訪れた万能感のままに、膝を破壊され体勢を崩した呪霊の脇腹目掛けて、再び返す刀で斬り付け——呪力がまた、赤黒く爆ぜる。

抉られる脇腹、更に前へと倒れ込んでくる呪霊の首元を、最後に薙ぎ払い——赤黒の爆発、跡形もなく羊の角を擁していた頭部が消える。

「お次は……」

存在を臍気にして溶けていく巨軀の呪霊、それから目を離れた俺は、背後に位置する呪霊へと意識を向ける。

四つん這いの姿勢で、腕と足を機敏に動かし逃げようとする呪霊、その真上へ、ボロボロの長ランをはためかせて舞った俺は、身を翻しながら、2つある首にまとめて斬りかかり——一際大きな赤黒の呪力の奔流が走る。

両足でしっかりと着地した俺は、呪霊が祓われたことを確認しようと、辺りを窺い。

「——うッ……！」

ボヤける視界に覚束ない身体の動作、フラリと体勢を崩して壁へと衝突する。

刀が手を離れ、カランと音を立てて床に転がった。

この身体中が酷く怠い感じ……呪力の枯渇か……！たしかに呪限無に呪力がゴツソリ持つていかれている気はしていたが、これほどまでとは……いや、その前の防御のときに全開にしてた所為もあるのか。何はともあれ気持ち悪い……しかも多分これ、疲労とかも一緒にきているな。ヤバイ、気絶しそうだ。

危機感を覚えた俺は、せめて歌姫先輩を置いてきた空き店へと戻ろうと考え——捉える、嫌な気配。

「……勘弁してや……こんなおかわり要らねえっつーの……」

ゆっくりと首を動かせば、まっさらに消えた1級の呪霊たちの向こうの闇から、こちらを見つめる新手の、小さな魚のような呪霊たちの姿が数十あって。

普段なら、3級あるかないか程度の、気にも留めないザコだ。

だが、最早いっぱいいっぱい俺の身体では、まずロクに抵抗もできないだろう。

「……クソが……！」

身を包む諦念。

限界を知らせる脳の悲痛な訴えに、壁に寄りかかっていた身体から力が抜け、仰向け

に俺は後ろへと倒れ――。

――ぼすんと。その身体が、優しく受け止められる。

何が起きたかを把握する間もなく、暗く染まっっていく意識。

最後に俺の耳が捉えたのは、優しくも後悔が滲み、また覚悟の籠った声だった。

「――遅れてごめんなさい、先輩として不甲斐ないわ……！もう大丈夫、あとは私に任せようだい」

その声に、安堵の笑みを漏らして。

俺は、意識を失った。



目が覚める。

視界に入るのは、白い天井に、白い照明。

仰向けになっていた痛む身体を、ゆっくりと起こして、自分の状態を確かめる。

ずり落ちる掛け布団に、纏うは淡い緑のペラペラとした服、内には包帯が巻かれている。

周りはクリーム色のカーテンで仕切られ、外界と遮断されていた。

「んー……病室か……？」

未だはつきりしない頭で、部屋の正体に思い至った俺は、ボソリと呟く。

そして、どうしてこんな所にいるのだろうかと記憶を探り始めて、閉鎖されたショッ
ピングセンターでの任務を受けたことを思い出したあたりで——ジャーつとカーテン
が開く。

見るとそこには、黒い高専の制服に身を包んだ歌姫先輩の姿があり。

「——あ、歌姫先輩じゃん」

「墓之瀬くん……!?!」

呼びかけると彼女は、1度俺の姿に大きく目を見開いてから柔和に細め、へにやりと
眉尻を下げ。

こちらへと駆け寄り、ぺたぺたと俺の身体を触ってくる。

「良かった、起きたのね……!——本当に良かった……!」

「お、おお……おお……？」

心底から安堵したような声音で、歌姫先輩は言葉を紡ぐ。

でもちよつと、反応に困るな……面と向かって心配されたこと、相当に久しぶりだか
ら……なんか、面映ゆい……顔も熱いし……。

「あ、あの、歌姫先輩、ちょっと近いつス……」

「え……ああ、ご、ごめんなさい……!」

掠れた声で嗜めると、彼女は顔を朱に染め手を引つ込め、あたふた。

「ち、違うのよつ、これは変なことしてるんじゃないかと……!」

「い、いや、それは分かってますよ……」

「そ、そう……なら、良いけど……と、とりあえずつ、看護師さん呼んでくるわね!」
慌てて病室を出ていく歌姫先輩。

それを見送った俺は、火照った頬を手で扇いで、冷ましにかかった。

あ……顔、あつつ。というか、心配されて嬉しくなるって俺、なかなかヤバイヤツだな……。



——看護師さんに付き添われての種々の診察、その最中に色々と説明を貰う。

まずここは、高専関係者御用達の総合病院らしい。院内の全員が全員、呪術に関わりがあるというわけではないが、俺のいた病室の区画には、大抵が呪術に関わりのある人が押し込められてるか。

次に、俺の身体について。

なんでも俺は、例の緊急の任務に就いた日から丸2日ほど起きなかつたそうさ。当時の診断によると、呪力の枯渇に、疲労、何より負わされた怪我、これらが悪いこと噛み合つて、意識の回復を遅らせていたらしい。

とはいえ今は、呪力はもう回復したし、疲労も少ない、怪我も……まあ裂傷、火傷、軽度の骨折など、何でもござれ状態ではあるが、すぐ治ると言われたので、問題はないだろう。

続いて、俺が意識を失つた後の一連の処理について。

意識を失つた直後に駆け付けた歌姫先輩によつて、俺は追加の負傷を受けることなくシヨッピングセンターを脱出、この総合病院へと搬送された。ちなみに歌姫先輩も一緒だ。

で、歌姫先輩の方は、やつぱり光線を食らう前に咄嗟に呪力で身体を大幅に強化してたらしく、軽い怪我で済んでいたのだとか。良かった良かった。

また、報告を怠っていた窓の人は嚴重に処罰をされたとも聞いたが、正直そつちにはあまり興味ない。

もつとビッグなニュースがあつたからだ。

……なんと俺、1級術師になれるらしい。うーん、びっくり。危険も報酬もめっちゃ

増えるぜ！

ただこれは、俺が1級術師認定されたというわけではなく、1級呪霊2体を単独で祓ったことを受けての適性アリ判定、今後与えられる任務をこなせば認定されるよつていう話なんだとか。

つまり、1級呪霊2体討伐のご褒美に、1級への昇格チャンスを手に入れたという感じだ。まあどうせご褒美が貰えるならお金とかの方が良かったが……先々のことを考えたらお得だし、そもそも今回の依頼において、その危険度などから破格の報酬を頂いてたりもするので、ありがたく1級昇格のチャンスを頂戴させてもらうことにした。

後は入院期間や、この総合病院での注意事項を拝聴して、診察が終わり。

戻ってきた2人用の病室——使ってるのは俺1人だが——にて。

「——本つ当にごめんなさいっ!!」

何故か俺は、歌姫先輩からガチの謝罪を受けていた。……うん、なんで???

「……え、ちよつ、ホワイホワイ、どうして歌姫先輩謝つてんの?……あ、起き抜けの俺の身体をエツチな手つきでまさぐつてきたことですか?それなら全然気にしてないスよ」

「ち、違うわよ！第一あれはまさぐってたんじゃなくて、本当に生きてるかを確かめただけで……って、今はそんなのどうでもよくて！」

強引に切り換え、一息ついて彼女は続ける。

「私が言ってるのは、この前の任務でのことよ」

「任務での？」

「ええ……あの任務で私は、先輩だつていうのにあなたの足を引つ張ってしまったわ。ロクに活躍もできず、早々に呪霊にやられてしまつて……返す返すも迷惑しかかけていないわ。だから、ごめんなさいっ……!!」

沈痛な面持ちで、彼女は殊勝に、深々と頭を下げる。

ベッドに座つてそれを眺めていた俺は、謝罪の内容をゆっくりと頭で咀嚼し。

理解したタイミングで、はあああ……と、盛大に溜め息を吐く。

まったくこの人は……。

「何意味分かんないこと言ってるんすか、歌姫先輩。たしかに歌姫先輩は速攻でやられたマンモスザコですけど……」

「う……」

「でも、迷惑しかかけていないなんてこと、ないですよ。歌姫先輩の判断のおかげで生存者確認は手早くできたし、歌姫先輩の指導のおかげでなんとか呪霊と渡り合えること

もできた、最後に疲れ果てて倒れた俺を回収してくれたのも歌姫先輩じゃないですか。歌姫先輩の存在は、充分役に立ってますよ」

戸惑い上がる顔、その揺らめく瞳を真摯に見つめて告げる。

それを聞いた彼女は、1度目を伏せてから、おずおずと問いかけてくる。

「……本当、かしら……？」

「本当ですよ。だから謝罪はいらないです。むしろ俺としては、感謝の言葉の方がほしいっすね」

そんな彼女に、あつけらかんと言つてやると。

彼女はむぐむぐと、何か言いたげに口元を動かし、けれども諦め。結局、ふんわりと笑つて。

「……分かったわ。ええ、それじゃあ……墓之瀬くん、助けてくれて、ありがとう」
送られる感謝の言葉。

受け取った俺は、冗談交じりに言葉を返す。

「……ふふつ、はい、もつと感謝してください。なんてたって命の恩人ですからね、俺は」

「む。生意気な口を……」

「後輩は生意気なくらいが可愛いんすよ。つてか、逆に歌姫先輩は気を遣いすぎ。」

もつとラフな感じでいきましようや」

「そうかしら……？なら改めて、よろしく……聡人」

「お。じゃあ……こつちこそよろしくなつ、歌姫！」

「ちよつ、先輩をつけなさいアンタ！調子に乗んなつ！」

病室に、歌姫先輩の声が響く。

軽やかな掛け合い。

そこに彼女との仲が縮まったことを感じて——俺は、くすりと、密かに顔をほころばせた。

第8話 変化

「——呪霊、出てこねえー……暇なんでなんかゲームしましょうよ夜蛾先生！」

「……………」

「そうだなあ……じゃあ、こんな場面に遭遇したら怖いよな選手権やりましょう！先攻は俺ね！」

「……………」

「うーん……あ、旅行先で眼鏡かけた青いベストに赤い蝶ネクタイの子と遭遇する！どうですこれっ、怖いでしょ!？」

「……聡人」

「はい、何ですか!？」

「歯、食い縛れよ」

「殴られるのは確定なんスか!？ちよっ、静かにするんでやめっ、やめて——!!」

——帳の下りた、廃ビル内。

暫しの入院生活を終えた俺は、東京に帰ってきていた夜蛾先生と、テキトーな2級任務に赴いていた。

目的は、入院生活で鈍った感覚を取り戻すことと——術式の効果の確認だ。

ヒリヒリと痛む、大人しく殴られた頭を擦りつつ、ビルの中を捜していく。

どこだー、モルモット……じゃなかった、呪霊どもー。早く色々試させてくれー。

1、2階は既に空振り、3階を捜しても見つかることなく——4階にて、ようやく会敵する。

猪のような見た目で、頭部は獅子かのごとく菊の花に囲われた呪霊が7体、通路に佇んでいた。その奥には、通路の半分ほどを隠す大きさで、桜色の、カマキリを思わせる呪霊も控えている。

おそらくは手前4体が3級、奥のカマキリが2級といったところだろうか。

夜蛾先生に1度目配せをしてから俺は前に出て、正眼に構えた刀に呪力を流す。その時、改めて感じるこれまでとの違い。

歌姫先輩にコツを教えてもらったことで簡単になった呪力操作、それがより簡単になっっている。無駄に外に漏らしてしまっていた呪力も、余すことなく使っていた。

先の任務で至った現象、自らの打撃との誤差ほぼなしに呪力が衝突した際に生じる空

間の歪み、威力を通常の2・5乗へと昇華させ呪力を黒く光らせる絶技——黒閃。

狙って出せるものではなく、極限の集中の中でのみ出せるそれは、副次効果を持つていた。

すなわち呪力の核心を掴ませるといふもの。

それによつて俺は、術師として、これまでとは別次元と言つて良いほどの動きができるようになっていた。

「——はい来い来いちよつ来い、花見で一杯!!」

刀を持った手をパンパン合わせ、場末の居酒屋でのバイトで身に付けたコール術で挑発する。

すると、汚く叫びながら襲いかかつて来る猪の呪霊たち。

その内の、最初に肉薄してきた1体目掛けて、手慣らしに軽く刀を振るう。

瞬間、豆腐を斬ったかのような刃触りで、いとも容易く呪霊は半分に分れる。

「わーお……そかそか、無駄になってた分の呪力も籠められてるから、前と同じくらい
の量でも何倍もの斬れ味になるのか……」

気付きを得ていると、新たに2体、呪霊が迫つて来る。

頭を下げての呪霊の突進を、壁を使つての跳躍で上に避けた俺は、空中で身を捻り、回転しながらの落下斬りを放つ。

位置エネルギーの威力も加わったその斬撃は、突進を終えた2体の呪霊の身体を、まとめて粉砕させた。

「エグう……呪力操作がするするいくから、身体能力もめっちゃ向上してるし……これ、ヤバいな……」

思案などお構い無しに突進してくる呪霊を斬り祓いつつ、ひとりごつ。

自分で言うのも変な話だが、俺、成長具合が本当におかしいな……。グラフにしたらちよー歪になるわ、絶対。

そうして、ザコの処理を完了させた俺は、そこで一旦夜蛾先生へと声をかけた。

「——夜蛾先生！次、術式いきます」

「ああ、分かった。最悪いざというときは助けるから、安心して色々試せ」

「はーいー！」

腕を組んで傍観している彼へ、元気よく返事をし。

視線を最後の呪霊——カマキリの呪霊に戻した俺は、意識を集中させて。

発動の言葉を唱える。

「術式解放——『呪限無』」

呪力がこそぎ取られ、俺の足元から黒い霞が立ち上る。黒い霞は、僅かな揺らめきと共に、察知できぬ速度でカマキリの呪霊に纏わりつき——呪霊は、脚を折り曲げその身

を地面に倒した。

「……呪霊の身体は呪力で構成されている。だから、『呪限無』による妨害を受けると、普通の行動すら困難になる、と……え、『呪限無』強くね??」

6つあるすべての脚をバタバタとさせ、起き上がろうとする呪霊。

その様子を遠巻きに観察しつつ、『呪限無』の能力を確かめていく。

『呪限無』の能力は、簡単に言えば呪いの阻害……呪いのカタマリとも呼べる呪霊とは、相性が抜群みたいだな。

けど、『呪限無』の発動中は際限なく呪力が持つてかれるから、そこがちよつとキツイ。持つてかれる量も量だし……あと、制御も結構難しい。多分慣れることができれば、量の問題とかも解決できるんだろうが……ま、今後に期待ということだ。

一頻り試した俺は、『呪限無』を継続させたまま、もがくカマキリの呪霊に近付く。そして、その首へと刀を振り下ろした。

割れる装甲、飛ぶ頭、飛沫を上げる血。

呪霊が形を消すのを見届けてから、俺は夜蛾先生の元へと戻る。

「——はい、終わりました」

「ああ、ご苦労だったな。術式の調子はどうだった?」

「夜蛾先生に話した通りでしたね。特に変わりはない」

「そうか……」

簡易の報告をすれば、彼は手で口を覆って、少しの間考え込み。

「……ふむ……だとしたら、聡人。やはりオマエの術式は、周りには隠さなければならぬな……スマン」

「なーに謝ってんスカ。こつちのことを考えて言ってくれてるんでしよう？」

——実は、の話なのだが……俺はこの前の案件で術式を開花させたことについて、夜蛾先生以外にはまだ誰にも話していなかったりする。

というのも、ひとえにそれは、自らの術式に不信というか、異様さを覚えたからだ。

だって、そうだろう。呪い関連全部をひっくるめて、制限ないし無効化するなんて能力、明らかにおかしい。異質だ。そんな術式、俺は聞いたことがない。

だから俺は、一先ずは術式の件は周りに隠して、信頼できる夜蛾先生にだけ伝えたのだ。そして、その選択はどうやら正しかったようだった。

「あまり大きい声では言えんが……上の者たちは、呪術が脅かされることをひどく嫌っている。これは観念としてもだし、存在としてもだ。そしてオマエのその術式は、呪術の存在を丸ごと無かったことにできる可能性を秘めている。だからもしオマエの術式のことを上に知られると、マズい事態になることは間違いないだろうな」

「ほおーん……上は権力持ったチキンの集まりってことっスね。なるほど、そりゃバ

レたら大変だ」

呪霊の気配がもうないことを確認しつつ、言葉を交わしながら廃ビルを下っていく。

「ああ。ついでに言っておくと、呪術界は広いようで狭い。むやみやたらと他言するのは、オマエのためにも相手のためにも、なるべく避けるようにしろ」

「はい………つてかこれ、夜蛾先生は知っちゃつてて大丈夫なんスか？もしものときは、夜蛾先生もヤバイですよ？」

「どうとでもするから、オマエは心配するな。むしろオマエは、もしものときがないように気を付けろ」

術式の内容でワンアウト、術式隠蔽でツーアウトの、そんなチェンジの危険がある人間を匿うなんて……と、案じてみたところ、心強いお返事。頼りがい、ありすぎやろつ……！

「……ああ、そういえば、聡人」

「ん？なんスか？」

「オマエ、携帯電話は持っているか？おそらく今のオマエの実力からして、その内色々と緊急の案件を任せられることになるだろうから、何人かの補助監督にはアドレスを伝えておいてほしいのだが……」

「あはは、何言ってるんスか？華の男子高校生が、携帯電話、持ってないとも？」

「そうか。なら今から俺の教えるアドレスを登録しておいてもらえるか？」

「いや、携帯電話持っていないので無理です」

「さっきの前置きはなんだったんだ??？」

携帯電話、持っていないんだよなあ……まずどこで売ってるかも分かんねえだもん。そりゃ買えねえよ。

「……はあ……なら明日にでも、高専の息がかかっている電気屋に行つて来い。簡単に携帯電話が買えるはずだ」

「お……おお!?それつてつまり、俺もついに携帯電話デビューつてことっすか!?ヤバい、俺携帯電話使うの夢だったんですよね……青春っぽくて」

「そうか、よかつたな。ただ、俺は明日も仕事があるからついて行けんが」

「えつ、マジい……うん……あ、じゃあ歌姫先輩でも誘つてみよ。歳の近い友達と買い物するつていう夢も叶えられて、一石二鳥だし」

「それがいいかもしれんな。オマエが妙なことをしようとしても、止めてくれる可能性がある」

「ええー……」

妙なことつて何よ、流石にお店の人相手にふざけたりはしないよ……と、信用のなさ
に悲しみを覚えつつ。

俺は夜蛾先生と、また一段、廃ビルを下った。

第9話 ショッピング&リーピング

東京の、都心——渋谷区。

立ち並ぶビル群結ぶスクランブル交差点、その手前の歩道で。

信号待ちをする人の群れに交ざって、俺は。

「——すげえっ、でっけえ建物がいっぱいっ！ヤバいっ！東京タワーだっ！」

「いや、東京タワーはないわよ……」

田舎者を丸出しに、はしやいでいた。

見るものすべて、とは言い難いものの、大抵が目新しい。

キョロキョロと首を動かして騒ぐ俺を嗜めるのは、付き添いで来てくれた歌姫先輩だ。

いつもと違って黒の髪は下ろされており、服装も異なっている。レースがあしらわれた白のブラウスに、チエーンの付いた青のジーンズ、足元には厚底のサンダル。可愛らしさとカッコよさを共存させた、オシヤレな装いだ。

渋谷に来る前の今朝、高専の寮で初めて見たときに褒めちぎったら、めちやくちや照れて可愛かった。で、それをからかったら、補助監督さんの車に乗せてもらっている間はまた口を聞いてくれなかった。学習しねえなあ、俺……。

「……とここで聡人くん。そろそろ聞いてもいいかしら？」

「え、何をですか？……あ、スリーサイズ？」

「違うわよ、私が聞きたいのはアンタの服装についてよ」

言って彼女は、上から下へと俺の身体に視線を這わせて。

心底わけが分からないという口振りで、尋ねてきた。

「……ここに来るまでの間、ずっと思ってたんだけど……アンタ、なんでパジャマなの

???

「……………？」

——その問いかけに。

俺は、自らが着ている服をつまんで、しげしげと眺める。

上下共に通気性の良いサテン生地、藍色のパジャマ、所々には向日葵の柄があしらわれている、もうすぐ終わりそうな夏の名残を感じさせた。

「……………え、何か問題が……？ダサかったですか……？」

「ダサイとかの問題じゃないのよねえ……。センスはいいと思うけど、パジャ、パジャ

マ……?なんで……?」

「え……?……ああ、安心してください、ちゃんと着替えてますよ」

「そこは心配してねえんだよなあ……?……つてか、着替えてパジャマなのかよ。パジャマ脱いでパジャマ着るって、アンタほんと何してんの??」

「着替え……」

「違う、そうじゃない」

額に手をやり、歌姫先輩は、はあ……と溜め息。半眼になって続ける。

「ほんとアンタは……普通の服とかなかったわけ?」

「いや俺、学ランかワイシャツかパジャマしか持つてなかったんで……でもワイシャツとかはいつも歌姫先輩見慣れてるから、ここは予備のパジャマいっとくかと思って」

「思っちゃったか……ワイシャツで良かったのに……」

え、ワイシャツで良かったのか……くっ、新鮮な俺を見せようと思ったのが仇になるとは……!」

「ほら、周り見てみなさいよ……パジャマなんて着てるから、注目の的よ」

「え?いやいやまさか、皆が見てるのは歌姫先輩つスよ。歌姫先輩可愛いから」

「んっ……!……な、何バカなこと言ってるのよっ、もおっ!……ほらっ、さっさとケータイ……の前に、服、買いに行くわよ!」

「顔赤いっスね、照れてんの？」

「照れてない！」

赤面した歌姫先輩が、一方的に告げて、ずかずかと進んでいく。

土地勘のない場所に置いていかれるわけにはいかないと、慌てて俺も、その後を追った。



—— 煩惱の数にプラス1をした感じの商業ビルで、歌姫先輩に色々と服を見繕ってもらって。

使う趣味などもなく、ただ貯まる一方だったお金を使いに使い、四季分のお洋服や靴、アクセサリーを手に入れた俺は、その内の1つに着替えてから。

服やら小物やらがパンパンに詰まった袋や箱を持ったまま、高専の息がかかっているという電気屋に突入。店内でその荷物をぶちまけるといいうアクシデントはあったものの、ついに携帯電話をも手に入れことに成功していた。

店の外の通りを少し進んだ先の広場で荷物を下ろした俺は、補助監督さんの迎えの車を待つ間。

細長く伸びる雲が茜色に染まる空に、買ったばかりのシルバーのケータイを翳して眩く。

「夕日が眩しいぜ……あつ、ケータイの表面に反射してマジで眩しい……！目があつ……！」

「アホかアンタは……」

オレンジの光に。

目を焼かれた俺は、ケータイを空に掲げてうづくまる。

その俺の手から、呆れながら歌姫先輩は、ケータイを掠め取って、電子音を奏でながら、何やら操作する。

やがて視界が回復した俺の前に差し出される形で、ケータイが返却され。

「……ほら、はい。私のアドレス登録しといたから」

「お……お……!!?アドレス登録ってつまり、あれスカ!?いつでもメールとか電話で繋がれるというあの……!!?」

「まあ、そんな感じ、なのかしら……?」

「イコール俺は、今日から歌姫先輩と、エブリタイム話せる!」

「いやノットイコールよ、エブリタイムはやめてちょうだい」

おいおいマジかよ……エブリタイム拒否られちゃった……でもサムタイムは話せ

るってことだろ？嬉しい……。

受け取ったケータイの画面を開き、アドレス帳をにやにやと眺める。

今は1つしかないが……夜蛾先生に、日下部さん、冥さん辺りなら、多分登録させてくれるよな。あと補助監督さんもだし……。いいね、ケータイ。繋がりを実感させてくれる。流石は文明の利器だ。今度歌姫先輩に鬼電しちやお（自らできた繋がりを絶とうとする行為）。

「……なんかアンタ、妙なことを考えてないでしょうね？」

「え？まさか、そんな……あはは」

「笑って誤魔化すなっ！」

——お叱りもテキストに流している内に。

黒塗りの車がやって来る。

補助監督さんの車だ。

お小言から逃れるように、俺は荷物をいそいそと積み込み、自分も飛び乗った。

……まあ、当然歌姫先輩も一緒に乗ってきたから、結局お小言は帰るまで続いたけどな！



——そうして、夏は過ぎ。

短かった秋もすぐさま去つて。

冬の訪れをしかと実感できる、12月のある日。

月の照る夜、いよいよ俺は、1級への昇格任務に取りかかろうとしていた。

目の前にあるのは、山奥の、封鎖されたトンネルだ。

ポツカリと、山間の木々に、暗い穴が空いている。

そこから感じるのは、肌の粟立つ呪力の圧——間違いなく、1級相当、それも上位クラスだろう。

そのお出迎えに、俺は口の端を吊り上げて。

学帽を被り直し、長ランを靡かせ、トンネル内へと足を踏み入れた。



——数えるほどだけのオレンジの照明が光り、幅広の長い道をまばらに照らす。

本来ならもつと照明はあるはずだが、これは電気の供給不足の所為か、はたまた故障

でもしているのか。

益体もなく、どちらだろうか？なんて考えつつ、歩を進める。

頬を撫でる生温い風、長ランがパタパタと音を立てる。

どれくらい歩いただろうか、暫くして、呪力の圧が濃くなる。

もうすぐだろう。

戦闘の始まる気配を感じ取った俺は、腰の鞘から刀を抜き、呪力を通す。

呪いを学びたての頃にはそこそこ苦労した呪力操作も、今ではお手のものである。

照明の光を受けて淡く煌めく刀、その刃先を地面に向けながら、スピードは変えずに警戒のレベルだけは上げて進み。

「……………わーお。でっけえ虎……………」

現れる、1級呪霊。

呪霊は、まさしく虎のごとき逞しきの、トンネルを埋め尽くさんとする巨体をもつていた。眼光は鋭く、口から覗く牙は厳つい。獣の体躯は暗い緑色で、胸の辺りは何故か大きく引き裂かれ、肋骨が剥き出しになっている。

ゆつくりと、身体を楽に倒していた虎の呪霊は起き上がり、こちらを睥睨して。

「……さるじ」

紡がれる言葉、頭になっている肋骨からゴポリとナニかが次々と地面に零れ落ちていく。

呪霊の中でも、準1級以上のモノのみが使える異能——術式の発動だ。

零れ落ちたナニかは、目の前の大きな虎の呪霊を小さくした呪霊だった。子ども……というよりは、術師でいうところの式神、分身の類だろうか。等級で言えば、2級くらい。それが6体ほど、虎の呪霊によつて生み出されていた。

「いいねいいね、出産おめでとう。ご祝儀をやるよ」

挨拶代わりに、小虎の呪霊を無視して巨虎の呪霊に呪力の斬撃を放つ。

青黒の軌跡が薄暗がりのトンネル内に描かれ、巨虎の呪霊が悲鳴を上げて仰け反る。続けてもう1発放とうとしたところで、邪魔せんと飛びかかって来る2体の小虎。

「親を守ろうとする子どもたちってか？泣けるね、でも残念——」

手早くその呪霊たちの首をはねて、再び呪力の斬撃を放つ。

斬撃は避けようとした巨虎の脇腹に突き刺さり、呪霊を悶えさせた。

「——俺は、はじめてのおつかいを見ても泣かないタイプだ!!」

声高々に宣つて、肉薄してくる小虎の呪霊に対処していく。

ひらりと身を翻して1体の突進を避け、首を斬り落とす。返す刀で斬り上げ、新たに

突進してきた2体の呪霊を裂き、繋げての振り下ろしで最後に突進してきた呪霊を幹竹割りにする。

残るは、親、巨虎の呪霊だけだ。

視線を向けた俺は、消えていく呪霊たちの興す煙を刀を振って払い、駆ける。縮まる距離、阻むように振り下ろされた右の前足を躲し、その上に飛び乗る。

勢いそのままに、前足を駆け上がった俺は、すぐ近くにまで迫った虎の横つ面へ、刀を振り——響く、耳をつんざくような金属音。

トンネルをけたたましい音が巡る中、吹っ飛んだ虎の呪霊はトンネルの内壁に衝突、反響音に石の崩れる音が追加される。

「おっと、呪力足んなかったか……流石に1級、硬いな」

重力に従って地面へと降り、ぼやいていると、立ち込める煙と積まれた瓦礫を掻き分け、虎の呪霊が唸り声と共に出てくる。その右頬には、緩やかな治りを見せる深めの裂傷。

「めんどお……術式使ったらもう終わってるはずなんだけどな……いや、秘匿するからにはね？術式なしで任務をこなせるくらいにはなつとかなないといけないっつーのは分かるけどさあ……」

愚痴を漏らしつつ、咆哮する呪霊を見据える。

改めて向き合ってみれば感じる、随分と大きい体格差。コイツ多分、トラックよりもでかいよな……頭付近を狙いたいのには、凶体のせいでちよつと遠い。

だが、それでもやりようはある。

砲弾のごとく突っ込んでくる虎の呪霊を右に躲し、回り込む形で後ろ足を斬り飛ばす。よろめく呪霊、そのもう一方の後ろ足も斬り飛ばして、完全に体勢を崩させ——背を、駆け上がる。

近付く、呪霊のから空きの首元。

疾走の波に乗り、構えた刀に力を籠め——一閃。

それで、おしまいだ。

ひゆるりと、虎の頭が滑り、ドチャリと地面に落下する。

あたかも、俺を祝福するみたいに。

噴き出す血は、まるで花吹雪のように辺りを舞った。

——高専に入学してから8か月……俺は、1級呪術師へと到ったのだった。

第10話 怖あい新入生たち

——呪術界を牽引する存在、1級術師となつて、5ヶ月ほどが経つ。

年も跨いで17歳、高専の2年生ともなつた俺は、順風満帆、数多くの友達に囲まれての華やかな青春を送っていた。

「おナか……スイた……」

「オどうザんん……」

「ちよウダイ……」

……数多くの友達に囲まれての華やかな青春を送っていたツ!! (白目)

「……なんで……なんでこないなことになつとるんや……おいおいおい……」

手で目を覆つて、およよと泣いて眩く。

夜の廃村、その外れの開けた丘。

傷心の俺の周りで蠢くのは、多種多様の呪霊たちだ。

紺青、茶、ネイビー、カーキ、セピアと色とりどりで、蛇にニワトリ、コオロギ、ナ

マコなど、姿形も選り取り見どり。

じわじわと彼らは、その輪の中央にいる、学帽に長ランといういつもの服装の俺に、意味を持たない言葉を吐きながら、近付いてくる。

地面に刺した刀にもたれかかるように。

やる気なく体重を預けた俺は、はあ……と溜め息を溢しつつ、この5ヶ月を思い出す。1級術師となつてからの日々は、多忙の一言に尽きた。

まずゆとり教育の波もあつて、一般科目は早々にすべて履修判定にされるだろ？ 数列とか漸化式なんかも、当然習うわけなつしんぐ。あと、日下部さんとの稽古も無くなる。それで、空いた時間に任務が入れられるようになるのよ。だいたい週5の割合ね。

しかも1級術師って、母数が少ない呪術師の中のトップ層なわけだから、超絶数がない。つまり、あつちこつちに引つ張りだこ。埼玉に出向いた2日後には青森行つて、1週間後には新潟行つて……と、各地を巡る巡る。

俺の全然帰れていない部屋には、ハロー○テイちゃんのご当地キーホルダーが店を開けるほど集まってしまったよ。もしかしたら、俺の部屋がサ○リオピュールランドなのかもしれない……。

まあ、俺の部屋がテーマパークになつてる（なつてない）ことについては一先ず置いておいてだ。

何が1番辛いつて、知り合いがないし、知り合いをつくつても噛み合わなくて会え

ないし、そもそも知り合いになろうともしてくれない人もいるってことよ。

例えば歌姫先輩とか夜蛾先生とかとは、忙しくて全く会えてない。で、任務先で知り合いをつくつても、俺は各地を巡るし、向こうは向こうで基本そこそこ忙しいので会えない。最後に、仲良くしようとしても、俺がパンピー上がりなのが気に喰わないらしく、敵意剥き出しの人もいるっていうね。もうクソだよ。大グソ。ビッグソ。やってらんねえ……人が、人が恋しい……青春を、させてくれっ……!!

しくしく、しくしく。

泣きべそをかいていると、ブブン……と、翅音が聞こえる。

地に突き刺した刀に寄りかかったまま、首だけ動かして見れば、右の後方。

俺を取り囲む一団の中から、コオロギのような呪霊が先んじて飛び出してきていて。

「——喧しいツ!!今俺泣いてたでしょうがツ!!」

叫びながら、振るわれる刺の前脚をくぐり抜け、その頭部に裏拳を叩き込む。長い触角が巻き込まれる形で、呪霊の頭部はへこんでいき——血と甲殻を撒き散らして、呪霊はバラバラに砕かれた。

「……まったく、人の三文芝居を邪魔するんじやありません!覚えておきなさい?三文芝居と、プ○キュアの変身シーンは、邪魔しちゃいけないです!」

不満を漏らしつつ、地面から刀を引き抜く。

月光を浴びて、妖しく蒼白に染まる刀。

それを俺は、湧き立つ呪霊たちに向け——襲いかかってくる彼らへと、閃かす。

夜闇に蒼白と、青黒の線々が刻まれる。

呪霊の血が、腕が、脚が、次々と俺の横を駆けていく中——P i P i P i P i P i P i ……と、電子音が鳴り響く。

今以て、群がってくる呪霊たちの身体を斬り刻みつつ、はためく長ランの内ポケットから俺は、ケータイを取り出し耳に当て。

「——もしもし、聡人？今、大丈夫？」

「歌姫先輩！全然大丈夫ですよ！」

屍山血河の丘の上、ウキウキ気分で通話を始める。

「…………え、本当に大丈夫なの？なんか、金属音とか聞こえるけど…………アンタもしかして、呪霊と戦いながら電話してたりしないでしょうね？」

「いやいや歌姫先輩、そんなことするわけメエツ、クソ呪霊がツ!!今電話中なんだから邪魔すんなツ!!おらツ、スーパー最強斬りツ!!…………そんなことするわけないじゃないすか！」

「途中の声、全部聞こえてんぞ」

あー…………。

「……はあ……またかけ直すから、今は呪霊に集中しなさい」

「ええー？ いいじゃん話しましょうよおー！」

「聡人」

「はい」

——低い声で、諭され。

その声音に、背筋の冷たくなる感覚を受けた俺は、大人しく通話を一旦終わらせて、呪霊たちの相手に本腰を入れる。

「やってくれたなあ、おい……オマエらの所為で、歌姫先輩に怒られちゃっただろ。許さん（完璧なる八つ当たり）」

宣言すれば、雄叫びを上げて呼応する呪霊たち。

波のごとく、呪霊たちはこちらへ押し寄せ——およそ5分程度で、それらすべてを斬り伏せた俺は、刀を仕舞い、補助監督さんに任務完了の連絡を入れ。

廃村の丘からの帰り道、歌姫先輩がかけ直してくれるのを待つのもあれだったので、こちらから折り返し電話をかけることにした。

数コールほどで繋がる電話、改めて通話を始める。

「——もしもし、歌姫先輩？ 終わりましたー」

「は、早いわね……」

「ええまあ、歌姫先輩と話したかったんで、頑張っちゃいました」

「……そ、そう……私と話したかったから……そう……ふーん……?」

電話口で、何やらぼしよぼしよと繰り返される言葉。どうしたんだろうかと思うも、それよりも気になることがあったので、そちらを尋ねることにする。

「それで、歌姫先輩。突然のお電話頂いたわけですけど、何かご用でした?や、用がなくても全然お電話はウエルカムですが……」

「ああそうだったわ、ちよつと聞いてちようだい聡人!」

すると、水を得た魚というべきか、声のトーンを上げて彼女は喋り出す。

「今日1年生たちに会ったんだけどね!?アイツらほんと最悪なのよ!硝子……女の子はいい娘なんだけど、男2人が酷いの!クズよクズ!」

「お、おお……キレっキレやな……」

「敬語は使わないし、人を舐め腐ったような態度をとるし、弱いか雑魚とか馬鹿にしてくるし、そもそも先輩を敬わないし、ああもう今思い出しただけでも腹が立つっ!!」

「こわっ……ヒスかな……?」

「何か言った?!?」

「言っていないです」

ケータイの向こうで、息を荒げて詰めてくる歌姫先輩。

それに怯えながら、通話を続ける。

「……ま、まあまあ、いつだかも言いましたけど、後輩は生意気なくらいが可愛いじゃないですか。ここは先輩としての度量をね？」

「そういうレベルじゃないのよつ、アイツらはつ!!あれはもうつ……ただの無礼者よつ!!」

「無礼者で……歌姫先輩は、やんごとなきお方だった……??」

「聡人はあんな風になつちやダメよ!!今の段階でもう、ちよつと危ないんだからつ!!」
「俺、今の段階でもう、ちよつと危なかったのか……というか、あんな風について言われても会ったことねえから分かんないんだよなあ……」

その後も。

歌姫先輩はさんざつばらお小言や愚痴を溢し、偶に雑談も交わし。

その夜は、更けていつて。



「——で?ソイツ、誰なの?歌姫の彼氏?」

「は、はあつ!?ち、違うわよつ、私と聡人は別にそんなんじや……!つて、ていうか五

条つ、敬語を使えつ！」

「歌姫慌てすぎでしよ、ウケる」

「ウケんなつ!!」

梅雨入りも間近に迫った頃。

久方ぶりに高専へと戻ってきた俺は、歌姫先輩に連れられるままに、1年生の教室を訪れていた、のだが……。

「こら、悟。あんまりからかつちやいけないよ。歌姫先輩はツンデレなんだから」

「違えよつ、黙ってる夏油!!」

教壇の上、隣に立った歌姫先輩が喚き散らしている対面に居るのは、3人の男女だった。

まず最初に歌姫先輩を煽ったのは、こちら側から見ても一番左の席に座る綺麗な白髪の青年だ。黒のサングラスをかけており、また座っていてもその身長の高さが分かる。

次に彼を嗜める形で歌姫先輩を煽ったのは、隣に座る青年。長い黒の髪を後ろでまとめていて、福耳にえびす顔と、優しい風貌だ。

最後に1番右、のほほんとした事の推移を見守っているのは、肩ほどまでの茶髪の少女だ。目元には泣きぼくろがあり、可愛らしい。

さてもそんな、個性豊かな1年生たちに対して。

俺は、共通して1つの感想を抱いた。

即ち——……え、この子ら怖あ……である。

だつてだつて、もうなんか全員ちよつとおかしいのだ。

白髪の子がかけてるサングラス、あれ有り得んほど黒くて絶対前見えてないだろうし、そもそも室内でサングラスって意味分からんもん。あと態度、ごつつ敵ついやん。

ロン毛の子もロン毛の子で敵つい。優しそうな顔しといて普通に耳にピアス着けるし、前髪も変だし、前髪も変だし、前髪も変なのだ。怖い。

最後の娘は、一見問題なし、ただの可愛い女の子かと思つたら、慣れた手つきでタバコの箱弄くつてたし。なんで？なんでタバコの箱持つてんの？吸つてんの？もしかして吸つちやつてんの？

——とまあ、そういつた感じで。

彼らのあまりの個性の豊かさに慣れていれば、疲弊し切つた歌姫先輩からご紹介に預かる。

その流れに乗つて、俺も自らで自己紹介をすることにした。ところで自らで自己紹介つてなんか日本語変じゃね？

「——はいども、墓之瀬聡人です！みんなの1つ上の学年で、趣味はご飯食べることと無駄遣いすること、特技は三文芝居！みんなと仲良くしていけたらいいなと思つてます！……ここまでで何か質問ある人、いるー？」

「はいー！」

「はい、そのグラサン野郎！」

「今グラサン野郎つて言つたか???:……聡人は歌姫と付き合つてんのー？」

「はっはっはー、ナイスジョーク!!」

「ちよつと聡人、アンタそれどういう意味よ!？」

手を挙げてくれたグラサン野郎くんの質問に答えると、何故だか勢いよく食つてかかつてくる歌姫先輩。それをテキストにあしらいつつ、他に誰かいるかしらん?と問いかけ——ゆつたりと挙がる白い手。タバコの箱を弄くつていた茶髪の少女だ。

「はい、そのタバコ子さん！」

「アンパ○マンの替えの顔持つて来る人みたいに呼ぶのやめてもらえますか??:……趣味、無駄遣いって言つてましたけど、聡人先輩つてお金持ちなんですかー？」

「うーむ……小金持ちつてどこかな?これまで趣味という趣味も無かつたから、お金だけが貯まっていっちゃつてるんだよな……だからその金使つてご当地ハロー○ティちゃんのキーホルダーと、最近は三角ペナントも集め出したわ」

「前半のとはともかく後半のはガチで無駄遣いじゃん……そんだけ金あるんだったら、今度何か買ってくださいよ」

「イーよイーよ、何が欲しい!」

「シヤネルのバッグ」

「コイツ、遠慮知らずだな……無敵か??」

タバ子さんの傍若無人っぷりに驚きつつ、簡単な口約束を交わす。今度の任務の帰りにも買ってきてあげようと決意しながらも、俺は最後の福耳ロン毛くんを見る。

「その変な前髪の君は、何か聞きたいことあるー?」

「「ぶっ」」

「……その呼び方はやめてください、聡人先輩。夏油傑です。ちなみに隣で笑ってるグラサン野郎は五条悟、反対で笑ってるタバ子さんは家人硝子です」

「うい、りよーかい。傑に悟に硝子ちゃんね。で、傑は聞きたいことある?」

「そうですね……何でもいいんですか?」

「うん、イーよー」

「何でも答えてくれるんですか?」

「うーん……うん!」

あつけらかんと返せば、彼は、「では」と前置きして。

にここに、穏やかな表情のまま、細められた眼光だけは鋭く、尋ねてきた。

「聡人先輩の扱う術式は、何なんでしょうか？」

「……………え？」

「聡人先輩の扱う術式は何なんでしょうか？」

「……………えーつとお……………」

繰り返される傑の質問。答えに詰まっている俺に、期待や好奇、猜疑の視線が浴びせられる。

「それ、俺も気になってたんだよね。モヤがかかっているみたいで、俺の目にもよく見えなかったから」

「……………え？ いやいや、ちよつと待ちなさいよアンタたち。聡人は術式は持っていないはずで……………え、聡人、そうよね？」

「……………いやあ……………あのお……………」

しどろもどろに、目を泳がせまくりながら愛想笑いをする。

え、こ、これ、どうすればいいんだ……………？ 術式持つてるの、バレてんのか？ なんて？ 俺と夜蛾先生しか、それは知らないはずなのに……………え、ふつつーにマズいんだが???

困りに困った俺は、教卓と机越しに、あるいは隣から直に詰め寄ってくる彼らに、はあ……………と諦念の溜め息を漏らし。

おもむろに学ランの内ポケットから、ケータイを取り出して。

「——もしもしえっ何ですって緊急の任務が入ったって了解です今すぐいきますっ！……じゃ、そういうことだから、みんな、アディオス！」

さも連絡が来た風に早口で捲し立て、ダツと教壇を離れドアへ向かう。

「——いやちよつと待てっ、そんな雑な誤魔化し方あるかあ!!」

「逃げんなテメエっ!!」

「やっぱり術式持ちだったのか……」

「あはは」

思い思いに放たれる言葉を背に、ガララララつと勢いよくドアを開け。

俺は、逃走を始めた。

第11話 強おい新入生たち

一目散に高専の長い廊下を走り、外を指す。夜蛾先生に見つかつたら、廊下は走るなど頭に拳を貰つちやいそうだが、今は緊急時なので大目に見てほしい。

「待ちなさい聡人！説明しなさいっ!!」

「無理です緊急任務ですっ!!」

「嘘吐くんじゃねえ！」

叫びつつ首を僅かに後ろに向ければ、追いかけてくる4つの人影。

先頭にいるのは、ぷんぷんと怒る歌姫先輩だ。綺麗な黒の髪を振り乱しながら走つてる姿はちよつと怖い。

その隣を、ポケットに手をつ突つ込みながら軽やかに駆けてくるのは悟だ。口元には弧を描いており、楽しんでる様子が伝わってくる。

更に後ろから続くのは、穏やかに微笑む傑に、アクビを噛み殺している硝子ちゃんだ。エイのような式神……いや、呪霊だろうか？異形の化物に腰かけながら、優雅に追いかけてきている。ズルい。何なんそれ？どつちかの術式のヤツだよな？

うーむ……そこら辺の話、任務三昧で高専に来てなかったから、俺知らないんだよな……夜蛾先生とも多忙で会えてないから、全然情報を得られてないし……唯一電話で情報をくれる歌姫先輩からは、悟と傑の態度性格への愚痴か、硝子ちゃんの良い子具合しか教えてもらえなかったし。

……しかし本当にどうしたものか……このまま逃げてても、どうせいつかは必ず捕まっちゃうし……いつそ正直に術式のことを話すか？や、けど、万が一があつたら夜蛾先生に迷惑かけることになっちゃうしなあ……。

と、思索に耽っていたときだった。

「鬼ごっこの中で最中に考え事なんて、随分余裕じゃん——術式順転『蒼』」

「おわっ」

——声と共に。

ズズズ……!!と、後ろに強く身体を引っ張られる感覚。これは……術式か？

振り返り、咄嗟に『呪限無』を発動、おそらくこの現象を引き起こしたと見られる悟を阻害する。

「ツ!?んだ今の、操作が乱された……?」

眉をひそめて、微かに驚愕の色を見せる悟。想定通りに、引っ張る力も止む。

その隙に俺は、再び逃走を図ろうとし——ポコつ、ポコポコつと、辺りに湧いた通路

いっぱいのお大ききの呪霊たちに取り囲まれる。

「わーお……これって、硝子ちゃん……いや、傑の術式？」

「ええ。呪霊操術……降伏した呪霊を取り込み、自在に操ることができるんです」

「めっちゃ便利じゃん……」

教えられた傑の術式の有能さに感心しつつ、さてどうしようかと少し悩み込む。

この呪霊たちって、式神とかと違って、多分倒したらそこでおしまいなヤツだよな？ 祓除ってことになっちゃう感じの。だとしたら、呪霊たちと戦うのはやめといった方が良さげか……？ もしこの呪霊たちが、傑が頑張って集めた精鋭さんとかだったら、祓っちゃうのは問題っぽいし……。

……というか、ほんとにもうコレ、どうやって收拾したものだろうか？ ハロー○ティのご当地キーホルダーあげたら、俺の術式のこと忘れてくんないかな？

「ふ、ふふふ……よくやったわ夏油。それじゃあ聡人、観念なさい……？」

「ええ……？ ハロー○ティのご当地キーホルダーあげるんで、許してくれませんか？」

「いらねえよ」

「いらぬ、だと……？ 今歌姫先輩、サ○リオに喧嘩売ったか……？」 (敏感肌兼過激

派)

呪霊たちの向こうでのたまう歌姫先輩の正気を疑っていると、その隣に並び立つ悟が

口を開く。

「何、鬼ごっこは終わりなわけ？」

「うん、まあ……よく考えたら鬼ごっこは、逃げる側って勝ちとかないし、単調だから。別のゲームに変えてほしいところではあるよ。シンプルに呪い合いとかな」

「……んん？それってさ……呪い合いなら俺に勝てるって言うてる？」

「そーだけど？」

「へえ……？」

口端を曲げて答えてやると、悟もまた口端を曲げ。

彼は真つ黒なサングラスを取り——露わになる、宝石がごとく綺麗な蒼の瞳、それが爛々と輝く。

「良いね、上等じゃん。叩き潰してやるよ。俺が勝ったら術式、教えろよ？」

「お、生意気いー……でも後輩感がスゴくするから嫌いじゃない。良いよ、俺が負けたら術式、教えてあげる。逆に俺が勝ったら、皆に今日のことは忘れてもらおうよ？」

「良いぜ？……傑、呪霊引っ込めろ」

悟が視線を傑に向けて言う。傑は少し逡巡してから、嘆息して呪霊を消す。

「ちよつと五条！アンタ何勝手に約束してんのよ！」

「別に勝つのは俺なんだから良いじゃん。俺、歌姫と違って強いんだし」

「ぬぐぐぐぐつ……!!ちよつと聡人!!コイツのこと、ぶつ飛ばしなさい!!ムカつく!!」
「そしたら俺の勝ちになつちやうけど、良いんスか?」

「うっ、そうだったわ……じゃあもうどっちもぶつ飛ばされる!!」

「歌姫先輩、すんごいこと言うな……憧れちやう……」

吠える歌姫先輩に、ある種の感動すら覚えつつ、学帽を一旦外し。

被り直して、気合いを入れる。

呪力を身体に満たしていきながら、指や首の骨を鳴らし、闘いに備える。

「——準備できた?聡人」

「ばつちぐー。いつでも良いよ」

「そ。じゃあ先手は譲ってやるから……来いよ」

「……生意気いー……」

脚を前に開き、脇を締め、顎の近くで拳を構える。ボクシングのファイティングポーズのような体勢。

対する悟は、何か策でもあるのか、両手を広げて身をさらけ出している。

段々と、張り詰めた空気が長い廊下を埋め尽くしていく。

離れた位置で、歌姫先輩たちが固唾を飲んで見守る中——俺は動く。

はためく長ラン、手始めに放つのは、頬を狙った右の殴打。

俺の拳は、余裕綽々の笑みを浮かべている悟の頬へと迫っていく——直前で『呪限無』を発動、呪術系の防御を取っ払ってから振り抜く。

「は——？」

呆然と。

間拔けな声を漏らした悟は、そのまま思い切りにぶっ飛び、廊下の上を滑るようにして転がり——途中で跳ね起き、ようやく彼も戦闘体勢をとる。

「……テメエ、何を……まさか今のが、オマエの術式か？」

「……さあ？何の話？」

「ハッ、おもしれ——意地でも口割らせてやるから、覚悟しろよ。——術式順転
『蒼』」

軽く上げられた手、次の瞬間、廊下の両壁が押し寄せてくる。

床を踏み砕く勢いで蹴り、俺は後退、壁が押し寄せる一帯を離脱する。

目の前に広がることとなったのは、途中から床や壁、天井が歪み、外が見えるようになってしまった廊下の光景。

中々見ることでできない光景に暫し見惚れていると、高速でその廊下を越えて、悟が迫ってくる。

放たれる右の拳、頭を傾けることでそれを避け、『呪限無』を発動しながら胸部へと右

の廻脚を放つ。

だが悟は、流れるように左の手で蹴りをいなし、右腕を戻す動作で肘鉄を叩き込もうとしてくる。

「危ねっ」

咄嗟に身体を横に回転させることで俺は、その肘鉄から逃れ——間髪入れず見舞われる蹴り、なんとか交差した腕で受けるも、吹き飛ばされて床を転がる。コレ、さつきと入れ替わりだな……。

「……威力つっよ……ほんとに1年生か？」

「ハッ……年齢で物事を測ろうとすんのは良くねーってことだな。——『蒼』」

「なるほどおっしやる通りだな……!」

再び押し寄せる両壁、避けるのも面倒なので、左右の裏拳を同時に叩き込みそれらを破壊する。

辺りを木片や塗料がパラパラと舞い、煙が立ち込める。

……いや、1年生が相手だからつてちよつと舐めてたな。しくつたしくつた。額面で人を判断するなんて、しちやあいけないことでしょうに……反省だな。

ともあれ、どうしたものか。

「——少し、楽しくなってきたな……!」

「同感だよ……………」

賛同と共に。

揺らめく白いモヤの向こう、蒼の眼光がこちらを射竦める。

お互いに、口元に半月を描き。

今まさに駆け出さんと、呪力を昂らせて――。

「――おい、オマエら……………いったい、何をしている……………」

――冷や水を掛けられたかのように。

呪力が萎んでいく。

背後より響く、重く低い声。

ギギつ、ギギギつと、錆び付いた人形じみた動きで、俺はゆつくりと振り向き。

「……………や、夜蛾先生……………ひ、久しぶりですね……………」

「……………ああ、そうだな、聡人。……………全員、来い」

そこに立っていた夜蛾先生に、白目を剥きかけながら、竦然と挨拶をする。

俺の後ろから。

やべつて顔をしながら悟が、どうしようと焦った表情の歌姫先輩が、あーあと呆れ顔

の傑と硝子ちゃんも現れ。

「……まず、正座しろ」

剣呑な目付きで吐き出された言葉に、無言で応じ、皆でその場に正座する。ヒリヒリと、先とは違う緊張感が漂う中、夜蛾先生が口を開く。

「この中に、校舎の廊下を、ここまでめちやくちやにしたヤツがいるな。……名乗り出ろ」

その言葉に。

俺は一瞬、隣に座す悟と目を合わせ——2人揃って手を挙げ、返答した。

「先生!! 犯人探しはやめませんか!?!」

「聡人に悟だな」

指導の拳を頭に食らった。

とても痛かった、とだけ言っておこう。

とにもかくにも——今日、新たに。

俺に、3人の後輩ができたのだった。

第12話 夏の思ひ出

「——海だあああああああああああううおおおおおつっつ!!!」

「うわうっさ……」

万感の思いを込めて、叫ぶ。

白い砂浜、紺青の海、抜けるような青空。

梅雨も明け、蝉がやる気を出すようになってしまった夏真っ盛り。

俺は、静岡にある海水浴場にやって来ていた。

「何、聡人、オマエもしかして海来んの初めてなの?」

「実はそうなんだよなあ……任務の移動のときとかでも、なんでかいつも海のある方面を通つてはくれなかったから……ほんとなんでだろう……多分前々から、海を見かけたら何があろうとも絶対飛び込みに行きたいと思つてる、車や電車に乗つても下車して飛び込むって補助監督さんたちに宣言してたこととは、関係ないと思うんだけど……」

「どう考えてもそれが原因でしょうね。というか、その冗談みたいな宣言が本気だと思われてるっていうのも中々にスゴいことですよ」

ビーチチェアとパラソルが並ぶその間。

横に立つ、俺と同じく海パンにシャツ姿の悟と傑と言葉を交わす。

悟は上下ともに黒ずくめ、傑は藍色のシャツに黒の海パンを履いていた。ちなみに俺は、えんじ色のペイズリー柄のシャツに、グレーの海パンだ。なお、ペイズリー柄がダサいって言ったヤツは海に沈めるので、そこんとこヨロシクうっ!!

「しっかし日差しが強い……早く海入ろうや。暑い……焦げちやうよ」

「そーだな。傑、ビーチボールは持ったか？」

「待ってくれ、今膨らませる」

「——いやちよつと待ちなさいよアンタたちっ!!」

いざ海へ飛び込まんとしていると、こちらを押し止める吠え声が入る。

揃って後ろを見れば、そこには海水浴場に不釣り合いな、巫女装束の歌姫先輩が居て。

「歌姫先輩……え、なんで水着じゃないんですか？ 聡人くん、悲しい……流れる涙でもう1個海作れちやいそう」

「作れてたまるかっ！ むしろなんでアンタたちこそ水着着てんのよっ、任務でしょ!?! 1級の！ 珍しく着替えるとか言うから、今日はやる気かと思つたら……遊びに来てるん

じゃないのよ!」

「そうガミガミすんなよ歌姫。大丈夫、俺たち歌姫と違って強いから、呪霊の相手なんて遊びの片手間で充分なの」

「コラ、悟。もっと優しく言つてあげないと……: 事實は時に、人を酷く傷付けるんだよ?」

「五条に夏油つ、アンタらは2人まとめて溺れ死ぬっ!!」

額に青筋を浮かべて歌姫先輩はぶちギレる。

いかにも彼女の言う通り、今回俺たちが海水浴場にやって来たのは、任務のためである。

なんでも昨年頻発した海難事故と、近くにある自殺の名所、同じく近くにある墓地のトリプルインパクトで、この海水浴場に呪霊が発生してしまつたらしく、それが高専に回つてきて。丁度良い機会なので、5人仲良く皆でやって来たのだった。そのため、海水浴場には他のお客さんは居なかつたり。

まあ、そんなわけなので、歌姫先輩のお怒りはごもつとなのだが……: そのお説教も、彼女が水着を着ていない悲しみが邪魔して、つい聞き流してしまう。

どうして……: どうして歌姫先輩、水着、着ていないんだ……: 女の子の水着、見させてくださいよ……: 目を潤わせて……: このままじゃ、涙で潤っちゃう……:

「ちよつと聡人つ、聞いてんの!?! アンタももう先輩になつたんだから、もつと落ち着きを持ってねえ……!?!」

「見て傑、落ち着きない先輩がなんか言つてる」

「ふふつ、ブーメランつて言葉を教えてあげたいね」

「黙つてる生意気1年共つ!!」

ムキヤ一つと悟たちに威嚇する歌姫先輩。2人はケラケラ笑いながら、大人しくビーチボールを膨らまし始める。

その舐め腐つた様子に、彼女はギリギリと歯ぎしりをして——叩かれる肩。慌てて振り返る彼女の後ろには、制服姿の硝子ちゃんが、缶ジュースを2本持つて立っており。

「硝子!?!」

「大丈夫ですかー、歌姫先輩。ちよつと自販機探してたら遠くて……クズ共になんかされてませんか?」

「馬鹿にされたわ!! もう最悪……!?! アンタだけが私の癒やしよ……!?!」

「おー、よしよし……」

歌姫先輩は硝子ちゃんに抱き付いてメソメソし始め、彼女は缶ジュースを持った手で器用はその頭を撫でる。どっちが先輩か分かんねえなコレ……まあ和むからいいけど。

「——つてか、アレ? 歌姫先輩、俺は? 俺は癒やしじゃないんすか?」

「アンタのどこに癒やしを感じさせる要素があんのよ……」

「あはは、たしかに、聡人先輩には癒やし要素、微塵もないですね。なんならいやらしい」

「は？いやらしくないが？」

「本当ですか？じゃあ私が今水着じゃなくて制服着てんのをどう思ってます？」

「制服姿は制服姿で可愛いけど、やっぱり水着姿も見てみたいから、海水ぶっかけるなりなんなりして、歌姫先輩と共に水着姿にさせたいなって思ってる」

「めちやくちやスゴいこと思ってるじゃんウケる」

「ウケないわよつ、聡人アンタそんなことしたら許さないからね!!」

「ジーザス……!!生来の正直者気質で答えたら、警戒されてしまった……!!こんな自分が憎らしい……!!灯台はもと暗しい……!!」

「いや聡人、別に歌姫とか硝子の水着姿見ても、どうにもなんないでしょ。むしろ目、腐るんじゃないかね？」

「ばっかオマエ、そんなわけあるか!!素晴らしすぎて、目に毒通り越して目に薬だわつ、目薬だわつ!!」

「人の水着姿を点眼液扱いしないでもらえますー？」

膨らまし終わったビーチボールを抱えてアホなことを抜かす悟に力説する。オマエ、

何にも分かってねえなあ……!!

だが、彼にはイマイチ届いていないようだ。

「絶対他のヤツの水着姿見た方が良いと思うけどな。安田美沙子とか、井上和香とか」
「……?や、ろくすっぽ中身の知らないグラドルさんのより、よく知ってる2人の水着姿のが価値はあるでしょ。頭、使え?」

「……お、おお……そうか……」

的外れなことを言ってくる悟に、首を傾げて告げる。すると彼は、気圧されたかのようになり、サングラス越しに目を逸らした。どうしたんだろう……?」

不思議に思いながら辺りを見れば、傑は小さく目を見開き、歌姫先輩は顔を赤らめ、硝子ちゃんはおお……と感心顔をしていた。ほんとにどうしたんだろう……?」

「……聡人先輩って、結構人たらしですよね」

「分かるわー、夏油に同感……聡人先輩、気分が良いんで私の分の缶ジュースあげますよ」

「いや、人たらしとか意味分からんが……?どこら辺がだよ……。あと硝子ちゃん、缶ジュースは自分で飲みなよ。熱中症とか怖いし」

「……そーゆーところですね」

「え、何が……?」

わけが分からず。

戸惑いつつも俺は、軽く準備体操をした後、呪力でふんだんに強化した身体で勢いよく飛び込もうとして、我に返った歌姫先輩に首根っこを掴まれ止められる。

「ぐえっ……!!」

「アンタは馬鹿か……!!?呪霊居るつつつてんでしようが……!武器もなしに飛び込むんじゃねえ……!」

「す、すいやせん……」

叱られた俺は、謝りながらチェアに置いていた荷物より木刀を取り出して、再度飛び込もうとし——また、歌姫先輩に首根っこを掴まれ止められる。

「ぐえっ……!!な、何スカ、歌姫先輩、俺、猫じゃないんですけど……!」

「何スカじゃねえよっ、なんで木刀なんだよっ!刀は!」

「今日俺、木刀しか持ってないっス」

「はあっ!?!なんでよ!」

「いや、スイカ割りに刀は使えないんで……」

「任務でスイカ割りするつもりなのが驚きだし任務よりスイカ割りを優先して木刀を選ばなっ!!」

「ちなみにお手軽花火セットも持ってきてます。線香にねずみ、打ち上げ、何でもござ

れ」

「夏の思い出、作る気満々かつ!!」

満々です、はい。

けれども歌姫先輩は簡単には許容できないようで、さてどうやって説得したものかと考えていると——海より響く、轟音。

見れば、いつの間にか抜け駆けして海に飛び込んでいた悟と傑が、今回の任務の目的と思われる呪霊たちを、祓いに祓っついていて。

「あ、ラッキー、手間省けた」

「言ってる場合かつ!!ちよつ、まだ帳も下ろしてないのに、何やってんのよアイツら……!!」

慌てて帳を張り、鬼の形相で海へと向かう歌姫先輩。

巫女服で海ん中つて入れなくね?と思いつつ、丁度帳で空が暗くなったので、お手軽花火セツトの準備を始める。

「硝子ちゃん、ライター持つてるでしょ?貸してー」

「いいっすよ。でも花火つて、普通は海入り終わってからするもんだと思いますけど……」

「いや、海は青空の下でこそ輝くからなー。帳が上がったら飛び込むわ」

「そーゆーもんなんですかね……？あ、私も線香花火やっていいですか？」

「いいよ、一緒にやろう」

カチャカチャと。

ライターで2つの線香花火に火を点け、1つを硝子ちゃんに渡す。

ジリジリ、ジリジリ、暗闇の砂浜で、仄かな明かりの玉が震える。

その光に照らされて見える硝子ちゃんの横顔は、ゾツとするほど美しい。

暫しそれに見惚れつつも、視線を海の方へと動かせば、波打ち際。

呪霊たちを祓い終わった悟と傑が、ニコニコ顔のまま歌姫先輩に追いかけてい
る。

さてもまた1つ、刺激的な思い出ができたことに喜びを覚えながら、俺は。

線香花火が勢いよく燃え散る様に、再び目を落とした。

……そして、戻ってきた歌姫先輩に「何のんびりしてんのよアンタつつ!! 任務をし
ろつつ!!」と頭を叩かれた。

第13話 『破』 破れたり

カラリとした、秋の曇り空の下。

新宿のビジネス街に並ぶ、1つのビルの屋上で。

駅前のマ○ドナルドで買ってきた、ホカホカのハンバーガーをかじりながら、俺は、遠くに見える、他のと比べてやや薄汚れたビルを眺めていた。

「……あれが呪詛師集団『破』^{やぶり}のアジトと……ふーむ……てりやきチキンファイレオうつま……これ、期間限定ってマジ……？ 買い占めないと……」

「アホなこと言ってる場合じゃねえよ、これからあそこを攻めるんだぞ？ もつと気張れ、怪我でもされたら俺が面倒なことになる。……ポテトちよつと貰っていい？」

「日下部さんは真面目やなあ……あ、いいっすよ、Lサイズだから」

「おっしや」

パクパク、パクパク。

隣の日下部さんと、マ○ドナルドの素晴らしき商品たちに舌鼓を打ちつつ、今回の任務内容を頭の中で確認していく。

今回の任務は、呪詛師集団『破』の殲滅だ。

呪詛師——呪いを自らの欲望のままに扱い、社会の理を乱す、呪術界の犯罪者。それが、呪詛師という存在だ。

その中で、一般社会において法の裁きを受けることのない呪殺を商売として用いることで、金を荒稼ぎしているのが、呪詛師集団『破』だった。

構成員は、71人。呪言師や、式神使い、降霊術師など、層は厚めらしい。

そんな悪いイヤツらを捕まえるために、俺は、日曜日だというのに新宿まで出張ることとなっていた。クソがつ。

ちなみにだが、この殲滅戦には、結構な人数が参加していたりもする。

俺と日下部さんの他に、知り合いで言えば、悟に傑、冥さんなどだ。あと補助監督さんたちも。……いやこの人たち、いつも居るな……休み、あんなかな……？可哀想……。

「お、墓之瀬。連絡来たぞ。もうすぐ作戦の本段階を始めるみてえだ」

「マジか」

補助監督さんたちに憐憫の念を抱いていると、日下部さんから作戦がいよいよ大詰めに入ったことを通達される。同時に下ろされる帳。

まあ一口に作戦とは言っても、冥さん他数名が索敵してる間に、補助監督さんたちが周りの建物から一般人を避難させ、それが完了したら俺と悟と傑他数名がビルに突っ込

み、日下部さん他数名が取り逃しを片付けるっていう、バカ簡単なものだけだな。でも、無いよりは当然マシ。

「あとどんくらいで始まりそうスカ？」

「あー……や、もう始まってらしいな。各々勝手に突入して良いって、メールに書いてある」

「投げやりすぎんか??？」

尋ねると、耳を疑うような答えが返ってくる。たしかに今さつき、無いよりはマシって言ったけどさあ……ガバすぎやろ……。

「おら、じゃあとつとで行って来い。ポテトは俺が片付けといてやるから」

「ええ……? まあ良いっすけど……じゃあ俺のゴミもちゃんと捨てといてくださいかね？」

「おー」

食べ終わったハンバーガーの包装紙とドリンク、手を拭いたペーパーをぶち込んだ紙袋を、ポテトを掴まんでる日下部さんに渡し、後処理を任せる。不法投棄、ダメ、ゼツタイ。

「んじゃー、行くかー……ってうわっ、ビルの入り口爆発してる……絶対あれ、悟と傑の仕業だろ」

ひとりごちつ、視線をアジトだというビルに向けながら、身体に呪力を通していき—
—地を蹴る。

屋上の柵を越え、宙を飛び、次の建物の屋上へ。

駆ける、駆ける、駆ける。

ぐんぐんと、遠かったビルとの距離が縮まっていく。

風圧に長ランがはためく中、俺は鞘から刀を抜き、左の腰だめに構えて振り抜く。

青黒の、大砲のような斬撃が空間を裂き—響く轟音、セメントの外壁が放射状に砕け、窓ガラスがキラキラと舞い散った。

かくして4、5階辺りに大きく開いたその穴に、俺は勢いのままに飛び込む。

移り変わる視界、ビルの内装は普通のオフィスのオフィスと相違なかった。

パソコンの置かれたデスクと回転チェアが規則正しく配列され、遠くには観葉植物まで見える。

……え、俺、突入する場所間違えてないよな???

不安がっていると、身構えていた黒服の男たちが、次々と声を上げる。

「な、何じゃワレエツ!!」

「誰だテメエコラアツ!!」

「さっつきから何じゃい!!」

「ブツ殺すぞ!!」

「うわ、ガラわつる……絶対『破』の人で合ってるわ……少なくとも、カタギではないことは確実……」

敵つさにちよつと引きつつ、やりすぎになつちやうので抜き身だった刀を戻し。自然体になつて、『破』の呪詛師たちに答えてあげる。

「……で、俺が誰かだっけ? この服見て分かんない?」

「……そのボタン……テメエ高専のガキかツ!!」

「いえーす、墓之瀬聡人と言います。あ、覚えなくていいよ? どーせアンタらはお縄につくから、もう会わなくなるだろうし」

「抜かせツ、ガキがツ!! 会わなくなんのはテメエが死ぬからだツ!!」
顔中に血管を浮き上がらせて。

呪詛師たちが襲いかかってくる。

最初に肉薄してきたのは禿頭の男だった。

筋骨隆々の身体から、大きく振りかぶられた左の拳が放たれる。

それが届く前に俺は、宙を跳びながら旋回、後ろ廻し蹴りを顔面に叩き込む。

禿頭の男は、もんどり打って、並ぶデスクを巻き込んで地面を転がり、やがて動かなくなった。

間を置かずに。

新しく2人の呪詛師が接近してくる。

今度は片や短刀、片やサバイバルナイフと、得物持ちだ。呪力も籠められている。つて言っても、呪具の類なわけじゃねえみたいだし……呪具だとしても、使い手が使い手だしな。怖くはない。

「くたばれガキがッ！」

「死ねッ！」

「嫌っスー」

突き出された短刀、それを持つ腕に手を添え逸らす。ほぼ同じタイミングで振られたサバイバルナイフは、軽く上体を反らすことで躲した。

斬り付ける対象を失ったことで、得物の主たちはそれぞれバランスを崩す。

がら空きになった2人の胴に、殴打を1発ずつ入れて——彼らは地面へと沈んだ。

……ふーむ……この感じ、1人0。2歌姫先輩（単位）といったところか。そこそこやね。ちなみに悟とか傑は300歌姫先輩くらい。うーん……え、300の歌姫先輩に囲まれてみたい……何そこ楽園じゃん……でもやらかしたときのお叱り、めっちゃくちゃヤバそう。

「くッ……！ 囲め囲めッ！ 一斉にかかるぞッ！」

「相手はガキ一入ツ、数じゃこつちのが有利だツ！」

楽園を妄想していると、ゾロゾロと黒服の呪詛師たちが、周りを取り囲んでくる。ざつと10人くらいだろうか。もつとも——。

「——雑兵だな」

口端を吊り上げ、呟く。

瞬間、押し寄せてくる呪詛師たち。

その拳を払って顎を打ち、刀を折ってわき腹を蹴り、短剣を避けて胴を殴り、迫る手を捻って投げ飛ばし——。

「——ふう……」

僅かして。

死屍累々の光景が辺りに広がる。

折り重なって、積まれる呪詛師たち。

それをバツクに、取り出したケータイで自撮りをしようとして——気配。

「ありや、取りこぼしてたか……」

首だけ振り向いて、気配の方を確認すれば、そこには、数珠を握り怯える黒服の男の姿。

「……あれ？その顔……もしかして、アンタ、降霊術の人？」

「く、来るんじやねえッ！殺すぞッ！」

「……………ん……………ねえ、アンタ。俺、降霊術見たことないからさ、見せてよ」

「は、はあッ!!」

戸惑いの表情を浮かべる男。

俺は積まれた呪詛師たちの上に、足を組んで腰かけ、その彼に再度笑顔で頼む。

「ほら、やって見せてよ。大丈夫、アンタが降霊術やつてる間は待つててあげるから」

「な、何言つて……………」

「——早くしろ」

「ッ……………!!クソがッ!!」

冷たく催促すると、彼は吐き捨て、数珠を手に文言を唱え始める。

いやあ、楽しみだなあ……………ワクワクする。霊、降ろせるつて、スゴすぎでしょ。織田信長の霊降ろしてほしいわ……………本能寺の変の真相を知りたい。あ、でも坂本龍馬もありだなあ……………誰に暗殺されたんやろ。ヤバい、楽しみすぎる……………このウキウキは、もうコールで発散するしかないな!

「——兄ちゃんのおつ、ちよつと良いところ見てみたあいつ!ほつら、降霊つ、降霊つ!信長降霊つ!降霊つ、降霊つ!龍馬も降霊つ!」

「……………ッ!クソガキがあッ……………!舐め腐りよつてッ……………!」

手拍子に乗せてコールしていると、顔をひきつらせた男が、そんな言葉を絞り出し。内ポケットから取り出したナニかを飲み込む。

「……えつ、ナニかって何……???もしやドラッグですか……???ダ、ダメだぞお前、それは条例違反だぞ……?……あ、よく考えたらそもそも俺が銃刀法違反だったわ。

うっかりうっかりと、額を叩いていると——跳ね上がる、男の呪力。

顔つきもドロドロと変化していき、見知らぬ者の……まるで、戦乱の世の武将のような顔つきになる。

「わーお……いいね、カッコよくなつたな」

「……死ねッ!」

男は数珠を投げ捨てて、床に落ちていた刀を取り迫つて来る。合わせて俺も、呪詛師たちの山を発ち、刀を抜いて迎え撃つ。

鋼と鋼のぶつかる、甲高く硬質な音。

橙の鉄の火花と、青黒の呪力の火花が、宙空に散りばめられる。

「やるじゃん……5。3歌姫先輩くらいはありそう」

「何だそれはあッ……!」

鏑迫り合い。

膠着状態の中、感想を漏らすと、問いかけが返される。

「何だそれはって……単位だよ単位。1歌姫先輩∥歌姫先輩と同じ実力ってことを表してる。だから1. 1歌姫先輩あれば、歌姫先輩には勝てるって感じだな。でも俺は歌姫先輩と戦うことになったら不戦敗を選ぶ」

「意味分かんねえこと言ってるじゃねえぞッ!!」

叫びと共に。

押し込まれてくる刀、俺は抵抗せず、脇へと逸らすようにその力を受け流し。伴って前へと出てくる男の頭部、そのこめかみに左の掌底を打つ。

揺れる男の目は、やがて裏返り、意識を失う。

刀は手から滑り、床へと落ちて。

顔つきは、元のモノへと戻っていった。

「——よし、終わりだな……記念写真でも撮つとこー!」

その男の身体を乱雑に掴むと、呪詛師の山へと放る。

それを背景に、今度こそ俺は、取り出したケータイを構え——シャツターを切る。

ポーズは顎の前での裏ピース。小顔になっちゃうぜ。

撮れた写真を、呪詛師の山にまた腰かけながら、冥さんと日下部さんに送る。

すぐさま来る返信、冥さんは、「制圧完了ということかな? 流石だね、墓之瀬くん」と、

こちらを賞賛するような内容。オトナのお姉さんの対応だ……!!

日下部さんは、「オマエ、何やってんの？観光でもしてんのか？」と来ていたので、「マ○ドナルドのゴミはちゃんと捨てましたか？」と、文脈ガン無視で新しく送つといた。不法投棄、ダメ、ゼツタイ。

他にも歌姫先輩や硝子ちゃんに写真を送っていたところ、入り口の方のドアが、デスクや観葉植物を纏つて吹っ飛んでくる。

何事かと視線を送れば。

「——あ、聡人じゃん」

「なんだ、ここももう制圧済みだったんですか」

生意気後輩コンビ、悟と傑が居て。

「おー、2人ともお疲れー！ほら、ここ！隣座りな、隣！」

「居酒屋に遅れて来たヤツを呼ぶノリで、呪詛師たちの山に座らせようとすんなや。座るけど」

「いや、悟、座るなよ……」

誘いに応じて、悟が横に腰かける。傑は呆れ顔で寄つて来るも、座りはせず、立つたままだ。

「で、2人とも、どうだった？苦戦とかした？」

「ゼーんぜん。ザコばっかだよ。相手になんねえ」

「正直、戦力過多だった気もしますよ。これなら私1人でも充分だった」

「お、言うなあ……」

「実際聡人も退屈だっただろ？」

「いや、降霊術見れたから、別にそこまで退屈じゃなかったよ」

「ああ、幹部の。強かったですか？」

「5. 3 歌姫先輩くらい」

「「なんだ、弱いのか」」

おい、今、歌姫先輩のこと、バカにしたか……???

(新手的誘導尋問)

「ちなみにソイツには術式使った？」

「いや？腕が鈍るから、基本使わないようにしてるの」

「……腕が鈍る、ねえ……マジで聡人の術式って、何なの？」

「出会ってからもう4ヶ月ほどが過ぎてるんです。そろそろ教えてもらっても良いと思っ
うんですけどね」

「ええー……？」

悟は、サングラスのツルから覗かせた、蒼の瞳を向けて。

また僕は、微笑を浮かべながらも笑っていない瞳を向けて。

尋ねてくる。

……しかしどうしたものか……。あんまり人に教えたくねえんだよなあ……。2人の人柄は問題なさそうだけど、イロイロと危険だし。いくら2人が強くても、呪術界の上層部の権力には逆らえな……。逆らえ……。逆らえそうだなコイツら……。ウチの1年生、全員傍若無人の極みだし。それにいい加減、毎度毎度こうやって尋問されんのもメンドいからな……。うん、もう言っちゃうか。

「……秘密だぞ？ 誰にも言うなよ？ 俺と夜蛾先生しか、俺の術式の存在は知らないんだから」

「……ああ、もちろん。もし俺が口を滑らせたなら、傑が責任を取るから安心しろ」
「どうして私が??! ……はあ……。じゃあ、もし私が口を滑らせたなら、悟が責任を取るといふことで」

ええ……。コイツら、責任を擦り付け合ってるう……。安心できる要素が、1個も無い……。
2人の様子に俺は、不安を覚えて溜め息を1つ吐き。
人差し指を立てて、口を開いた。

「——俺の術式は、『呪限無』。呪いを制限ないし無力化する。ちなみにこの呪いってのは、呪霊も指すし、呪力も指すし、術式も指すし……。ま、大体の呪いに関するモノは阻害できるんだ」

「……それ、マジ？そんな術式、聞いたこと無いんだけど……」

「にわかには信じ難い話ですね……だってそれは、あまりにも……」

「ねー。俺も、我ながら面妖な能力だとは思ってるよ。……でも、事実だ」

告げると2人は、眉をひそめて訝しむ。それでもなお言い募って、嘘ではないことを伝えれば、彼らはなんとか納得の顔を見せた。

「……ま、こんな場面で俺らを騙す意味も無えか……」

「だね。……しかし、ふむ……呪限無、面白い術式ですね。使い道も、幅広い」

「だけど、使い過ぎると戦いが楽になっちゃうからね。多用はできないんだ」

「ほーん……」

「なるほど……」

「あと——と、よく考えたら、今任務中だったな……もしかして、雑談してる場合じゃない？」

ある程度話したところで、ふと我に返る。一応15人くらいは倒してるから、怒られはしないだろうが……。

「大丈夫じゃない？俺たちで、もう40人くらいは倒して来たし」

「こうしている間も、私は呪霊を放ったままですからね。最悪取り逃しても、冥さんたちもいますし」

「あー、ね、たしかに。なら大丈夫か。じゃ、呪詛師共の見張りがてら、もちよつと喋つてるか」

手を頭の後ろで組み、足をぷらぷらと放り出して、そう提案する。

2人はそれに、笑んで承諾し——雑談は、回収班たる補助監督さんたちが来るまで続いた。



「——お疲れ、墓之瀬くん、五条くん、夏油くん。素晴らしい働きだったよ。大人顔負けだ」

「ほんとですかっ!?! えへっ、えへへえへえへへ」

「うわ聴人、キツモ……」

「呪霊かと思つて、危うく取り込むところだった……」

「よし、喧嘩がお望みというわけだな? まとめてかかつてこいや1年ども、ボコボコにしてやるよ」

事が終わって、夕時、アジトだったビルのエントランスで。

美人なお姉さんの冥さんに褒められて有頂天になっていたところに冷や水を浴びせ

られた俺は、悟と傑に対して臨戦態勢を取っていた。

オマエほんま、キモいは駄目やろ……!! 傑は傑で、めっちゃめちなこと言ってるやがるしよお……!! 表に出ろっ!!

「おらっ、やめろガキども。ビルが壊れるだろうが、仕事を増やそうとすんな」

「いてっ」

コツンと。

そんな俺の頭を、背後から現れた日下部さんが、刀の柄で打ってくる。

「日下部さん……でもアイツら、俺が冥さんにデレデレしてたら、キモいとか言ってきたんですよ!」

「そりやデレデレしてるオマエ、キモいからな……仕方ねえよ」

「なー」

「日下部さんは分かってますね」

「よし、3人まとめてかかってこい」

敵しか居ないことを認識した俺は、再び臨戦態勢を取る。

まだまだ元気いっぱいの身体に呪力をみなぎらせ、3人に向けてファイティングポーズを取り――。

「――ダメだよ、墓之瀬くん」

そつと、その腕に、冥さんの手が置かれる。

振り向こうとすれば、頬をくすぐる髪に、仄かな熱。

くつついてしまいそうな距離にまで顔を寄せてきた冥さんは、俺の耳元に囁く。

「彼らはまだ子どもなんだ……君がオトナにならないと。ね、墓之瀬くん」

「オ、オトナ……?」

「そう、オトナだよ。一緒に私と……オトナになろうか」

「なりません。超なりません」

柔らかく諭された俺は、構えを解く。

ヤバい、色香で頭がクラクラする……オト、オトナ……オトナか……。そうか、オト

ナか……。オトナ、すごい……。

「フフツ、良い子だね」

「ねえあれ、あそこで顔赤くしてポーっとしてるのが俺たちの先輩ってマジ?」

「信じたくないね……」

「オマエらも可哀想に……」

ぺちやくちや、ぺちやくちや。

男衆が好き勝手言う中、暫し意識をオトナという言葉にやられてた俺は、やがて我に

返る。

「……ハッ、危ない危ない、ボーっとしてた……と、それより冥さん！この後時間あったら、みんなでご飯に行きませんか!？」

「ん、ご飯に？そうだね……ちなみに誰が来る予定なのかな？」

誘うと、首を傾けて疑問を示す冥さん。動きに合わせて、淡い水色の髪も揺れる。

「とりあえず、俺と悟と傑は決定してますね。あ、日下部さんも来ます？」

「タダ飯なら行くぜ」

「学生にタカるって、正気か??いやまあ全然奢りますけど」

「ふむ……その面子だったら、うん、是非とも行かせてもらおうかな」

「本当ですか!？」

質問に答えていけば、嬉しい答えが返ってくる。

やったぜ、冥さんとご飯に行くの、何気に初めてだ……!

「ちなみに場所は、もう決まっていたりするのかな？まだなら、適当なお店を紹介するけど」

「あ、オナシヤス！」

「うん、良いよ。了解だ」

冥さんは頷いて、頼みを受けてくれる。

そして、彼女の案内のもと。

俺たちは、新宿の街を、美食を求めて行くのだった。

……余談だが、冥さんが紹介してくれて、最終的に俺が全員分奢ることとなったお店……めっちゃお値段高くて、終始彼女はホクホク顔をしてただけど……なんか、お店と癒着してたりとか……してないよな???

第14話 冬の思ひ出

「——ぬおおおお貴様ツ、悟ツ、ミドリ甲羅やめろおおツ!!」

「あひやひやひやひやつ、吹っ飛ばえツ!!」

「ぐあああツ!!」

年の瀬の、冬の昼。

特に任務のなかった、俺は。

高専寮の、暖房の入った悟の部屋で、1年ズ3人と、楽しくマ○カーをしていた。

「ふふつ、悟。君は余所見してる場合なのかな?」

「あ? 何言つて……待て傑オマツ、アカ甲羅は待てツ、ほんと待てツ——ぐあああツ!!」

「うーん、良い悲鳴……ちよつと待とうか硝子、そのトゲゾー甲羅はどういうつもりで——ぐあああツ!!」

「うーん、良い悲鳴。ほい、おつかれ。私が1位ね」

画面にて。

硝子ちゃんのピ○チが勝ちどきを上げ、俺のヨ○シーと悟のマ○オ、傑のルイ○ジが、敗北に咽び泣く。

「くそっ、さつきから1度も勝てないんだけどっ！ずっと1年ズが1位をぐるぐるしてる！何が楽しくだ、全然楽しくねえっ！」

「いや、それは聡人が弱すぎるからでしょ」

「正直今回のレースだって、悟がミドリ甲羅を当てなくても、どうせ聡人先輩は最下位だったと思いますし」

「ぬぐぐぐっ……そ、そんなことねえし……っ、強いし……！」

コントローラーを放り投げて、俺はわめく。

それに対して、厳しい言葉を投げかけてくる悟と傑。

若干涙眼になりながら、救いを求めるように硝子ちゃんを見ると、彼女はにこりと笑って。

「安心してください。聡人先輩は、マ○カー、めちやめちや下手ですよ」

「くおおおっ、硝子ちゃんまでっ……!!ちくしょうこんな所に居られるかつ、俺は出てくぞっ！」

「あらっ！」

信じていた硝子ちゃんにぶった切られた俺は、脱兎のごとく部屋から廊下へと飛び出

す。

瞬間、感じる肌寒さ。

立ち止まり廊下の窓から外を見れば、朝とは違う光景が広がる。

しんしんと。

灰色の空から雪が降り注ぎ、高専の敷地を白く染め上げていた。

「わーお……」

「お、雪じゃん」

「道理で今日は寒いわけだ」

「そーいや天気予報でも、降るかもって言ってたっけ」

暫しその銀世界に目を奪われていると、そろそろと続いてやって来た悟たちも、窓の外を見て感想を漏らす。

しかし雪、雪か……何気に俺、雪を見たの初めてかもしれない。元々俺の住んだ地域では、雪が降ることは全くなかったし、高専に来た去年も降らなかつたからな……。

「……ヤバっ、なんかテンション上がってきた！俺ちよつと外行つて雪遊びしてくるわ！オマエらも来いっ！」

「雪見てテンション上がるって、犬じゃん。いやまあ行くけども」

「ちよつと待つて、聡人先輩に悟。風邪をひくかもしれないし、防寒してから行きま

しよう」

「うわ夏油ママじゃんウケる」

「うるさいよ硝子」

「分かったよ、ママ!!」

「聡人先輩に悟も、うるさい」

硝子ちゃんの台詞に便乗して煽つてみたところ、頬を引きつらせる傑。

キレられても嫌なので、皆でそくさと足早に自室へと退散、それぞれで防寒具を着込んでからグラウンドへと向かう。

なお、俺と悟は高専の制服に手袋を着けただけだが、傑はマフラーをしていたし、硝子ちゃんはネックウォーマーに耳当てまでしていた。モコモコで可愛い。傑はザコ、寒さにビビるとか恥ずかしくないのか？

さてもそんなわけで、外。

歩く度、ザクザクと音を立てる積もった雪。

吐く息は白く浮かぶ。

「雪、ええなあ……！よっしゃ、雪だるま、雪だるま作ろう！」

「どーせなら、ドでかいやつ作ろうぜ！」

「良いねっ、どんくらいでかいやつにする!？」

「硝子の態度くらい!」

「そりやでつけえ!」

「あつはつはつはつは!!」

「死ね」

「わぷっ」

悟と笑い合っていると、ぽすぽすと飛んでくる雪玉。

癩に触ってしまったらしい硝子ちゃんが、こちらに投げつけて来ているのだ。

「バカだなあ、聡人先輩に悟。たしかに硝子は器は小さいくせに態度はでかいけど、そういうことは思っても口にしては駄目だろうに……」

「夏油も死ね」

「わぷっ」

弾幕じみてくる雪玉。

男3人で大人しくそれを食らっていたところ——足音に、気配。

ぶつかってくる雪玉の破片と、空より降ってくる雪と、積もっている雪とで、最早9割方雪に支配されている視界、そこにダウンを着込んだ黒髪美人さんが映る。

あれは……。

「もしやぷっ、歌ぷっ姫先輩ではってそろそろ雪玉やめて硝子ちゃん!!ごめんなデリ

カシーなかつたね!!大丈夫つ、尊大なところも硝子ちゃんの魅力だから!!ちよつと子供っぽくて可愛いというか!!」

「……………」

「わぶつ、ちよつ、無言で!せめてなんか言おう!」

「気にすんな、聡人、あれはそういうんじやなくわぶつ」

「多分今の硝子は、どっちかと言うと照れわぶつ」

うっそでしよ、喋ってる2人の口に雪玉投げ込むって、どんな狙いの良さしてんの……??おかげで何言ってたのか、全然分からなかつたんだけど……もう雪合戦界の那須与一じゃん。扇のわぶつ。

雪玉の牽制を受けて、意思疏通を阻まれまくっていると、いつの間にか先の人影との距離がぐんと縮まっていることに気付く。

こちらへと向かってくる彼女は、やはり俺の予想通りで。

「——もうほんとこれどういう状況??とりあえず私も五条と夏油に雪玉当てていいかしら」

現れるや否や、場を理解をするよりも先に私怨に走ろうとする歌姫先輩。落ち着け?

また、流石の硝子ちゃんも、彼女の登場には手を止めて。

「あれ、歌姫先輩。今日は任務じゃなかつたですっけ?」

「早くに終わらせられたのよ。今はその報告に行くところ」

「へー」

談笑する2人、その隙に俺たちは、髪や顔にかかった雪を払う。

ヤバイヤバイ、至る所に雪がくっついてるわ……塗りたくられてるレベル、もう顔面真っ白よ。これぞ本当の雪化粧、ってやかましいわ。

と、脳内で1人小ボケをかましていれば、雪を払い終えた悟が、早速歌姫先輩を煽り始める。

「歌姫が早くに終わらせられる任務って、どんだけチョロかったんだよ。もしかして、相手、全部蠅頭だったの?」

「そんなわけねえでしょうがっ!!ちゃんと準2級とか居たわっ!!」

「いや準2級って……プツ、ザコじゃん」

「ふんぎぎぎぎっ……!!」

歯軋りと共に、歌姫先輩は悟を睨めつける。正直、女の子がして良い表情じゃないっスね。

そして歌姫先輩は、流れるような動作で硝子ちゃんから雪玉を受け取り、投げつけ――悟は、ひよいと、それを簡単に躲す。

「ちよつとつ、避けんじやないわよっ!!」

「当てられない歌姫が悪いんじゃない」

「このっ……!! 聡人っ、加勢しなさいっ!!」

いや俺かい。

マジかあととは思いつつ、歌姫先輩の言うことには逆らえないので、地面の雪を固めて玉を作り、構える。

「恨みはないが、悟、大人しく当たってくれ……おらッ、マ○カーでミドリ甲羅を当てられまくった恨みッ!!」

「恨みありまくりじゃねえかッ!! おい傑っ、加勢しろっ!!」

悟は投げた雪玉をすんでのところで躲し、傑に呼びかける。

傑は困ったような笑みで、「しょうがないな……」と呟き、雪玉を持って悟と並ぶ。できる、悟&傑VS俺&歌姫先輩&硝子ちゃんの構図。

緊迫した空気の中、5人全員が同時に動き出す。

硝子ちゃんと歌姫先輩が雪玉を悟へ投げ、それを躲してお返しとばかりに振りかぶる彼の顔面に俺は雪玉をぶつけ、すぐさま悟と傑に雪玉をぶつけ返される。

やがて雪合戦は、ドンドンと白熱していき、悟は『無下限呪術』を使って辺りの雪を丸ごと浮かし、傑は『呪霊操術』を使って出した呪霊たちに雪玉を持たせる。

俺は硝子ちゃんと歌姫先輩が作ってくれていた巨大雪玉を、呪力で強化した身体で持

ち上げ——想定以上の重さに、よろめき、巨大雪玉を後ろに放り投げてしまい。

「——歌姫の報告が遅いと思つて来てみたら、オマエら、一体何をわぷつ」
「「「「あ」」」」

いつぞやのように、重く低い声が背後から聞こえたと思つたら、秒で消え。
嫌—な予感を覚えながらも、ゆつくりと振り返れば、そこには。

巨大雪玉を頭から被つた、推定夜蛾先生と思われる人物が居て。

「……俺は悪くねえよな……?」

「……私も、今は何もしてなかったね……」

「わ、私だつて、巨大雪玉を作つただけだもの……!」

「……雪玉を投げたのは、聡人先輩ですもんね」

「えつ、ちよつ、裏切る気かつ?!嘘でしょ?!悟?!傑?!歌姫先輩?!硝子ちゃん!」

即座に術式を解いたり、身体をはいたりして、自分たちが雪を弄つてた証拠を隠滅、
挙げ句には自己弁護をし始める悟たち。

慌てて呼びかけるも、返ってくる反応は、目逸らしだけ。

そうこうしている内に、巨大雪玉を自分で吹き飛ばした夜蛾先生、剣呑な目つきでこ

ちらを睥睨してきて――。

「――ああああああギブギブっ、ギブっ!!ギブですってっ、もうほんとすみませんでしたあああっ!!」

――結局、悟たちは、上手いこと難を逃れて。

俺だが、雪原というリングの上で。

拳骨にコブラツイスト、卍固めといった、プロフェッショナルレスリング式指導を食らうことになったのだった。

か、身体がっ、身体がとても痛いっっ!!!

第15話 良い子な新入生たち

開け放たれた窓の外で、薄桃の桜の花弁が、青空を舞う。実に美しい光景だ。

春に色づく筵山、その麓に位置する高専校舎の一室。

時の流れも早く、高専の3年生となった俺は、そこで、新たな1年生たちと対面していた。

教卓の向こうの席に座るのは、形式ばったように学ランを着る金髪くんと、崩した短ランを着る黒髪くんの2人。

金髪くんは、高校1年生だと言うのにすれた目をしているし、黒髪くんは、高校1年生だと言うのに子供のようにキラキラとした目をしている。

だが、彼らは教壇に立つ俺と硝子ちゃんを見つめるだけで何も言わない。つまりは大人数しくこちらが口を開くのを待っているということだ。それに俺は、大きな驚きを抱く。

……えっ、後輩なのに全然怖くなさそうだしっ、生意気でもなさそうっ!! 煽ってもこ

ないし、前髪も変じやないし、タバコの箱を弄つてもないし!! 良い子だ!! この2人、良い子だ!!

……い、いや、でも待てよ? まだ猫を被つてる可能性もあるな……うん、とりあえず自己紹介でもして、簡単に喋ってみるか。

「——えー、どーも、初めまして! 硝子ちゃんの先輩の、墓之瀬聡人です! 趣味はご飯食べることにゲームすること!」

「ゲーム、めちゃくちゃ弱いですけどね」

「うるさいぞ硝子ちゃん。……あと、特技は三文芝居ね! よろしく新年ズー!」

「はいっ、よろしくお願ひします墓之瀬さん! 自分は灰原雄です! 趣味は大食い、特技も大食いです!」

「おおっ、良い趣味&特技だな! 今度ご飯一緒に行こう!」

「はいっ、是非っ!」

喜び勇んで自己紹介を返してくれる黒髪くん——雄。さてはコイツ、裏表のない良い子だな? と思いつつ、俺は視線を金髪くんの方へと向ける。

「そっちの君は、どなた?」

「……七海建人です。趣味は……特にありませんね。強いて言えば読書くらいでしょう。よろしくお願ひします」

「読書！良いね、俺も好きだよ！今度おすすめの本貸して！」

「……………ええ、まあ、はい」

「え、めちやくちや嫌がつてない？」

「いえ別に、そういうわけではなく……………ただその……………思つてたよりまともだな、と」

金髪くん——建人に頼み込むと、何か引つ掛かるような反応、ちよつと追及してみたところ、そんな言葉が紡がれて。

「思つてたよりつて……………もしかしてあれか、悟とか傑の上位互換が来ると思つてたの？」

「……………あの2人の先輩とのことでしたので」

「あはは、そしたら歌姫先輩……………卒業しちゃったから歌姫さんか。うん、その歌姫さんとか化け物になつちやうじやん。大丈夫、俺はまともだよ」

「まともつて言つても、あのクズどもと比べて、ですけどね」

「さつきから硝子ちゃん、うるさくない??」

こりや多分、この子も常識的な良い子だなと思ひながら建人とお喋りしていれば、硝子ちゃんが茶々を入れてきて。

ジト目で見やれば、彼女はピューっと、素知らぬ顔で窓際へ逃げていく。

まったく硝子ちゃんは……………。

「……まあ、気を取り直すとして……じゃ、交流を深める続きといこう！2人はハロキ〇イって好きかな？俺の部屋にご当地版のヤツめちやくちや棲息してるから、欲しいのあったら持つてつて良いよ！」

「本当ですか!?!自分、妹が居るので、貰えたら多分アイツ喜ぶと思うんですけど……！」

「よっしゃ雄、いくらでも持つてけいっ!!……建人はどう!?要る!?!」

「要りません……というか、どうしてそんなに沢山あるんですか?」

「いや、任務で各地を回るからさ……つい記念に買ったちゃってたら、いつの間にかサオリオピューロランドになった (なつてない) 」

「普通はならないと思うんですが……はあ、この人もやはりあの人たちの先輩か……」
諸手を挙げてわーいと無邪気に喜ぶ雄に、額を押さえて呆れの溜め息を吐く建人。
雄、ええ子やな……!それに比べて建人と来たら、感想、失礼すぎんか???別にご当地限定のハロキティに、数百万を使ってるだけだろうに……。あ、三角ペナントに使ってるのは50万くらいね。だから大丈夫、俺はまともだ。

うんうん頷き自分の正常さ具合を再確認していると——ふと漂ってくるヤニの匂いが、鼻をつく。

どこからか、白くくゆる煙が、風に乗って俺の元へと流れてきていた。

顔をしかめながら風上、窓の方へと目を向ければ、ガラスに寄りかかりぼーっと外を眺めて、タバコを嗜む硝子ちゃん、学校の姿があつて。

「……ちよつと硝子ちゃん、学校でタバコは駄目だつて……！いや、外でも駄目だけどさあ……！」

「フー……まあまあ、最近吸えてなかつたんですよ」

未成年でしょ？と注意するも、彼女は気にも留めず、辞める素振りすら見せない。

「まあまあじゃないよ、歌姫さんと夜蛾先生に言い付けるぞ？」

「……………チツ……………はーい」

「おい、今舌打ちしただろ」

「してないです」

「いやしたでしょ、俺の聴覚舐めるなよ？落ちた小銭の種類を聞き分けられるんだからな？」

「こ○亀の両さんかな??」

「違えよ。……いや、たしかに日下部さんに同じようなことを言われたことはあるけど。」

「はあ………本当に舌打ちなんてしてませんよ………さっきのはあれです、そう………投げキッス」

「んなわけあるかい。こちとらビビって、一瞬息、止まってんだぞ?」

「投げキッスが魅力的だったからですか?」

「後輩が急に舌打ちしてきたからだよ、バカ。ほら、タバコ寄越しなさい」

無理のありすぎる誤魔化しを展開する硝子ちゃんを咎めると、彼女は口を尖らせて、吸いかけのタバコを差し出してくる。

俺は自ら窓際まで赴き、火の点いたままになつてそれを受け取つて。

………これ、茶色のフィルター部分、さつきまで硝子ちゃんがくわえてたんだよな
……。

「………どうしたんですか?タバコ、じつと見ちゃつて」

「えっ?い、いや別に、何も?」

「そうですか?私はてつきり、投げキッスの代わりに間接キッスでも狙つてるのかと
……。」

「は、はあつ?!そんなわけあるかつ、変なこと言うなつ!」

「ぶつ、顔赤くなつてますよ?ウケる」

「うっさいわっ!!」

妙な言いがかりを付けてきた彼女から顔を背け、タバコの先端、火の点いた部分を握り潰す。

ちくしようつ、やっぱりこつちの方の後輩は生意気だなっ！でもちよつと落ち着く！
後輩は生意気じゃないと！

奇異な安心感を覚えつつ、俺はタバコだったものを硝子ちゃんへと返却。彼女は常備しているらしい空き箱にそれをしまう。

その動きの最中、ちらりと新1年ズの雄と建人の様子を窺えば、2人は2人で何やら楽しく雑談を繰り広げているようだ。

これならちよつとの間は放っておいても大丈夫だなと考えた俺は、気になっていたことを硝子ちゃんに尋ねる。

「ところで硝子ちゃん。悟と傑は今、どっか行ってるの？」

「はい。たしか、山梨の方に任務で」

「マジかー……折角2週間ぶりくらいに帰ってこれたから、会いたかったのに。タイミングわりー」

「どんまいです。でも多分、あと2、3日くらいでアイツらも帰ってくると思いますよっ」

「あーダメ、そのときには俺もう任務で東北行ってる」

「ええ……」

ね、ええ……だよな。俺もええ……だもん。近頃、出張任務、多すぎなんだよな……

死にそう……。昨日まで俺、新潟に居たんだよ……。一昨日は和歌山。意味分からんわ、他の術師は何してんねん。青春させろ。いや、あらかたもう、したかった青春っぽいことはできてるんだけども。

「……でも、東北か……。じゃあ聡人先輩、にんにくせんべい買ってきてください。あと牛タンとか、フカヒレの姿煮とか」

「なんかちよつと前から硝子ちゃん、俺を宅配業者だと思ってない??? いやまあ、買ってきてはあげるけど」

「お、やったー」

しよがないなあと、我が儘な彼女のご注文を呑んで。

どうせなら新一年ズの方も買ってきてあげようかと、彼らの話に交ざって注文を取り、ついでにメアドとかも交換しちやつて——いざいざ東北、秋田のある寂れた樹海。

季節は春ではあるものの、長ランを突く肌寒さはまだ残っているその地にて、俺は、早速の任務に取りかかろうとしていた。

帳の裡、さざめく木々の中。

俺の周りを囲むように構えるのは、牛頭や馬頭の鬼、6本脚の狼、身体中に目のあるニワトリといった呪霊たちの群れ。

くるくると指先で回していた学帽を、頭に被り直して。

俺は、その群れに向けて、刀を片手に飛び込んだ。

第16話 出遅れ、手遅れ

——蒼穹の下、青森の湖畔。

ザフツと、空気の漏れ出るような音をあげて、眼前の呪霊たちが姿を塵に変えていく。斜めに振り下ろした刀はそのままに、残心。

呪霊を全て祓い終えたことを確認してから、俺は、刀を鞘に収める。

パチンと腰元で音が鳴るのと同時に、上がる帳。

ふうーと一息を吐きつつ、少し汚れてしまっていた長ランの裾辺りを軽く叩きながら、俺は、内胸ポケットからケータイを取り出し。

補助監督さんへと、任務完了の電話をかける。

「——もしもし、補助監督さんですか？ 任務、終わりましたよー」

「は、墓之瀬さん！ もう、ですか!？」

「うん、まあ。早く高専に戻りたいんでね。後はどこ行けば良いですか?」

「ああいえ、今回の遠征で祓除してもらいたかったポイントは、そこで終わりです!

ほ、本当にありがとうございました！」

「いーえー」

電話越しからでも分かるほどに、補助監督さんは喜色を見せる。

——今回の遠征……その内容は、東北の祓除未了呪霊ブツ殺ツアードだった。

秋田の寂れた樹海を始めとして、岩手の海岸、福島の間窟、山形の雪山、宮城の廃神社、青森の湖畔などといった、負の感情渦巻く各地を10日間で巡り巡る。

俺の呪術師人生で、1番に過酷な遠征だったことは、間違いなかった。だって多分、この10日間で俺が祓った呪霊、合計300体くらいいつてるし。その内1級呪霊は20体くらい。エグくない？普通に大変だったんだけど。絶対これ、10日で終わらせるもんじゃないかったわ。いやまあ10日で終わらせろって言われてたわけじゃないが。

「——墓之瀬さんの所まで、すぐに車を回しますね。すみませんが、暫しお待ちください。ちなみに怪我などは……」

「無いつス」

「さ、流石ですね……」

「えへへ、どもども」

そして俺は、お褒めに与りとっても嬉しいとニヤニヤしながら、その後も二言三言を交わして、通話を切る。

アドレス帳に戻る画面、そこから今度はメールのものに画面を移し、開くは from 傑。

綴られている文言は、彼らが現在取り組んでいるらしい任務についてだった。

曰くは、星漿体の少女の護衛と抹消。

1年生のときに夜蛾先生に教えてもらった知識によれば、ここで言う星漿体とは、天元様の適合者のことを指している。

天元様は、高専や呪術界の重要拠点やらに張られている結界の強度を底上げしてくれている凄いな。

非常に永き時を生きているらしく、そしてそれは、彼の術式によるもの。不死の力で、彼は古来よりこれまで呪術師を支援してくれていたそう。

ただ、不死の力は、万能ではなく。

一定以上の老化を迎えると、その術式は肉体を、高次の存在へと創り変えてしまう。伴って、天元様の意思すらも創り変えられてしまうそうで、最悪は彼が人類の敵になっちゃう可能性まである。

それ故に500年に1度、天元様は自らと適合する人間——星漿体と同化し、肉体の情報を術式に先んじて書き換えているのだとか。

当時教えられたときは、ふーんと思っていなかったが……なんでもその星漿体の

居所が、悪いヤツらにバレてしまっているようで、悟と傑はその人物を護るために、現在動いているらしかった。

で、任務を早めに終わらせられてたら、その手伝いをしに戻ってきてちよつていうのがメールの主な内容だったのだが……まあ、無理でしたね。メール送るの遅すぎ。観光しながらゆつくりやってたんだから、突然そんなこと言われても間に合うわけねえだろ、どう足掻いても1日足らんかったわ。

と、ちよいちよい不貞腐れてながら昨日メールを送ったところ、所詮オマエはその程度だったのか……的な煽りと共に、こちらも1日ずらすことになったので、一応来れたら高専来といてくださいとの返信。

絶対煽りいらなかったよな???と思いつながらも一念発起、昨日と今日とで超絶頑張つて、現在12時43分、任務完了及び東北祓除遠征終了。

ようやく来た車に乗って、俺は、空港に向かう。

「……あ、ところで補助監督さん。なんか良い感じのお酒、買ってきてもらえてます? 日下部さん……知り合いのお土産にしたかったんですけど」

「はい、とても良いものを。ここらでしか買えない逸品ですよ」

「おお……え、それあの人にやるのなんか嫌だな……あの人、安酒で充分だろうに……」

「ええ……う？」

その道中、頼んでいたお土産の件について色々とお話する。

えーと、夜蛾先生には秋田でいぶりがっこを買ってあるでしょ？ 冥さんには福島で桃のパンケーキ、歌姫さんには山形で玉こんにやくを……そーいやこの2人、この前連絡つかなかったことあったけど、大丈夫だったのかな？ 一緒に任務してたらしいけど、2人とも聞いても教えてくれないんだよね……冥さんはシンプルに守秘義務云々が理由だから分かるけど、歌姫さんは慌てながらはぐらかしてくるからな……なんだろう、任務で失敗しかけて悟たちに助けてもらったとか？

……まあいいや、続き続き。

悟と傑には喜久福の和菓子で、硝子ちゃんにはんにくせんべいと牛タンとフカヒレの姿煮と……いや硝子ちゃんだけよくよく考えなくても注文しすぎだな……。

あと、雄と建人には、なまはげまんじゅうあげて……うん、完璧だ。

で、これらにプラスして木彫りの熊とこけしをお付けすりゃ、もうみんな大喜びでしょ。よし、パーフェクトだ。パーフェクトお土産プランだ。

……あ、でもどーしよ、木彫りの熊とこけしって、買ってあるのは良いけど、持つて帰るにはちよつとかさばるよな……。

「……ねね、補助監督さん。お土産ちよつと多くて持ち帰れなそうなんですけど、どう

すれば良いと思います?」

「え? えーと……普通に配送してもらえば良いんじゃないですか? なんてしたら、私が東京まで運びますが……」

「良いんですか?」

「勿論です。墓之瀬さんのおかげで、目の上のたんこぶが取れましたからね……いい加減、上がうるさかったんですよ……本当に、本当に、ありがとうございます……!!」

「あ、はい……」

く、苦勞してたんだな……。お疲れさまです……。

——それから、お土産を運んでもらえることへの感謝を伝えたり、逆に愚痴を聞いてあげたりして、空港。刀と刀袋、ケータイ、財布、チケットだけを持って、10日を過ぎた補助監督さんと別れを告げ、中へ。

呪術界は様々な交通機関の人とも繋がっているの、刀を持ってても刀袋に入れていれば、保安検査場で止められることもなく通過でき、軽やかな足取りで俺は自席へ向かう。ちなみにビジネスクラスね。椅子ふつかふつかで嬉しい限り。更には昼食まで付いてくる。

さて席に着くと、気になってくるのは離陸までの空いた時間。

とりあえず僕に連絡をしておこうかと考えるも、そこでつい悪戯心が芽生える。

多分、というかほぼ確実に、悟と傑の2人なら、星漿体とのお付きの人は、難なく護り切れる。それほどの実力があの2人にはあるからだ。

けど、そのまま任務を問題なく完了させるということは、最終的に星漿体の少女が同化されるのを——すなわち、抹消されるのを容認するということになる。

はたして、どんだけ星漿体本人の娘が覚悟を決めているのかは分からないが……聞いたところによれば、彼女はそこいらにいる普通の中学生と、大差ない娘だとか。だつたらきつと、あんな愉快な2人と一緒に居たら、そんな覚悟は簡単に揺らいでしまうだろう。

そうなったとき、悟と傑は任務なんか無視して、彼女の未来を護ろうとすると、俺はそう確信している。

つまりは星漿体の娘にとって今夜は、同化の時ではなくなり、人生の歩みを続けられるようになるめでたい夜になるということ……だとしたら、さ。

パーティー、するしかなくね???

……えつ、するしかないよな!? だつてめでたい夜だもん!! そんな夜はパーティーしない!! でも、悟と傑は気遣いのできない間抜けどもだからな!! 絶対そんな用意はしてな

いはず!!ならばその先輩たる俺が、こつそり気を利かせてやらねばっ!!

というわけで、傑への連絡は控え、代わりに歌姫さんや夜蛾先生、冥さん、日下部さんといった知り合いにメールを送る。

内容は高専で今夜パーティーするのでみんな来てね!!って感じのやつ。夜にはおそらく上手いことタイミングが合って、補助監督さんが運んでくれているお土産も届くはず。こりや大盛り上がり、間違いなしでしょ!!

楽しみな夜に思いを馳せていると、流れる離陸のアナウンス。

ケータイをポケットに仕舞い、通りかかったCAさんに機内食も頼んで——14時27分、東京に到着。

現在東京で勤務中の補助監督さん、その大半は繁忙してらしく、わざわざ車を出してもらうのも忍びないので、色々な路線の電車を乗り継ぎ、筵山の近くの街へ。

曇りがかっている空の下、一般人に気付かれないエリアまで進んだ俺は、呪力で身体を強化し、高専に向かって駆け出す。

だつてパーティーの準備、しないといけないからな。急がないと。

ぐんぐん、ぐんぐん、周りが後ろへと流れていく。道からは街を感じさせる物は消え失せ、自然を感じさせる木々や草花が姿を見せ出し。

次第に姿を現す、寺社仏閣。

もう、高専の敷地だ。

やがて脇に出てきた、山合いに立ち並ぶ朱塗りの鳥居の列。それらの間を、刀を肩にかけ、俺は走り抜けて――。

――無数の蠅頭が居た。

ブブブブ……と、酷く耳障りな羽音を立てて、ソイツらは石畳の上を浮遊する。

その向こうには、崩れた鳥居に、半壊した和の建物。

中央部の舗装された地面は、ドーナツ状に抉られている。

そして。

そこに、アイツは、白髪の生意気な後輩は、悟は、血塗れで、倒れていた。

「……………は……………？」

惨憺たる光景に、呆けた声を漏らして、足を止める。

理解ができなかった。

何も分らない。

視界が眩み、喉がひりつく。

蠅頭たちの羽音が耳を突き、頬を汗がったう。
心臓が、嫌に鼓動する。

額に穴の空いた悟の顔、何も映さなくなつた虚ろな蒼の瞳が、こちらを見つめていて
。

「——ああ？……なんだ、高専のガキか。たしか東北に行つてゐるはずの。……チツ、面倒臭えなあ……」

声。

蒼から視線を外し、映る黒。

伏せた悟の、すぐ近くで。

身体に赤子のような呪霊を巻き付けた黒髪の男が、血を滴らせた呪具とナイフを手に
佇んでいる。

囁くように。

俺は、ソイツに、問いかける。

「……これをやつたのは……オマエか……？」

「これ?……ああ、コイツのことか」

受けた黒い男は、端正な顔を、悪辣に歪め。

「そうさ、五条悟は俺が殺した」

その言葉を耳が捉えた瞬間、無意識に術式が発動し、蜘蛛の巣のごとく、世界にヒビが入る。

高専の結界だろうか。それともコイツのだろうか。いや、今はそんなのどうでも良い。黒い感情が湧いて仕方がない。止められない、止まらない、止めない。とにかく、今はただ、ひたすらに、純粹に――。

「――オマエを殺す」

溢れる黒いモヤ、世界が、粉々に割れた。

第17話 異分子2人

結界の破片が、降り注ぐ。

入り交じるように、近くの辺り一帯に散らばっていた蠅頭たちも、姿を黒い塵に変え——また、黒い男の身体に巻き付いていた赤子の呪霊も、俺の術式に耐え切れずに姿を散らせる。

それに応じて、突如宙空に幾つかの呪具が出現、地面へと落ちていく。

「……マジか」

僅かに目を見開く、黒い男。その足元に、甲高い音をあげて、鎖や刀、三節棍といった呪具たちが転がる。

……コイツの術式……いや違う、そもそもコイツからは呪力を感じない。あの赤子の呪霊の特殊能力……収納か？それが祓われたことで切れて、仕舞われてた呪具が出てきたってところか。

突き抜けた怒りで冷えた頭。冷静に考えていると、黒い男が話しかけてくる。

「やってくれたな……オマエ、術式持ちか。情報にはなかつたはずだが……上にも嘘吐いてたのか？」

「上のヤツらは色々と信用できねえからな」

「ハツ、そりやもつともだ。……しかし妙だ、どうにも身体が動かし辛く感じる……天与呪縛で呪力のない俺の、しかも特別性の肉体にも影響を与えるなんて、随分と面白え術式を持つてるみたいだな」

「『呪限無』だ。あらゆる呪いを弱体化させる。呪力を籠めれば下級の呪霊なんかは祓えるし、阻害については当然——天与呪縛も例外じゃない」

「なるほどな……だが困った。オマエがさつき祓った呪霊……アイツは物を格納できる上に、サイズも変えられるヤツでな。ソイツを腹の中にしまうことで、今までは天与呪縛で呪力のない透明人間のまま、呪具を所持して結界を素通りできてた。それが、これじゃあ、全部パーだ。また新しいヤツを見つけて躡けないといけねえ」

「知るか、クソが。大道芸人よろしくテメエで呪具を飲み込んで死ねばいいだろ。……お喋りはもう終わりだ」

刀袋と鞘を放り捨て、抜き身の刀は顔の横、刃は天に、峰は地面に並行にさせて、切っ先を黒い男へと向け構える。

お互いに、情報の開示による能力の底上げは済んだ。

向こうはこちらがデバフ能力を持っていることを認識しているし、こちらも向こうの能力を大まかながらに把握できている。

おそらくは、天与呪縛のフィジカルギフトッド……一切の呪力を捨て去ることで、強靱な肉体と類稀なる身体能力を得たというところだろう。今は『呪限無』で阻害しているから、普段の7割程度しか能力は振るえないはずだが……それでも、厄介なもんは厄介だ。——全力で殺そう。

心を定めた俺は、呪力の満ち満ちた身体で、地面を踏み砕いて、黒い男に肉薄する。左から右への薙ぎ払い、黒い男は右の手の、毛皮を鐔代わりにした刀でそれを防ぎ——散る火花を縫い、左で逆手に持った鐔で、こちらの脇腹を穿とうとしてくる。

すかさず距離を取ると同時に呪力の斬撃を飛ばし、牽制。体勢を立て直してから、再び攻めかかる。

心臓目掛けての刺突、独特な形状の鐔でそれを挟み取り、右の刀で袈裟上げを狙ってくる黒い男。

俺は刀を手放し上体を大きく反らすことで躲し——できる僅かな隙、身体を廻して胸部を思い切り蹴飛ばす。

勢いよく吹き飛ぶ黒い男、宙に舞った自分の刀を掴んで俺は、追撃をかけようと迫る。その時、視界に走る銀光。

咄嗟に刀を眼前に構えて、次の瞬間には、微かな手の痺れと共に金属音が響く。黒い男が吹き飛ぶと同時に、数個の暗器を放っていたのだ。

「チツ……」

出鼻を挫かれた俺は、黒い男が体勢を正すのを大人しく見届ける。

動きからして、そこまでダメージはない、か……頑丈だな……。

「……ああクソ、面倒臭えなあ……とつとつと星漿体を殺してトンズラこきてえつてのに、とんだ邪魔が入ったもんだ。……いや、俺がナマってんのか」

顔をしかめて、黒い男はそんなことを宣う。

どちらからともなく。

引かれ合うように、俺と黒い男は駆け出し、3度目の激突。

振り下ろされる刀を躲し、首を狙ってくる銚を弾く。空いた黒い男の胸元に、流れのまま斬りかかろうとし、頭を襲う足刀。脊髄反射で腕を構えて——トラックでもぶつかって来たかのような重い衝撃、横合いに身体が吹き飛ぶ。

「ぐッ……!!」

やがて伝わる新たな衝撃、背で木板が割れる。高専にまばらに配置されている寺、その上階の壁に突っ込んだのだ。

だが、痛みには呻いている猶予はない。

すぐさま身体を起こし——風切り音、即座に後ろへ飛び退り、僅かに遅れて、飛び込んできた黒い男がそこに刀を突き刺す。割れ砕ける木の床板。

黒い男が追撃をかけてくるより先に、背後の襖を開いて更に後退、襖を閉じ——突き破ってくる黒い男、合わせてその横つ面に蹴りを入れる。

「ンツ……！」

黒い男は宙を舞い、俺はそれを追いかけて、その身体に刀を振るう。刀は、交差して構えられた刀と鈍にぶつかり——けれども振り抜けば、黒い男を弾き飛ばすことに成功する。

舞う木片、寺の壁をブチ破って、黒い男は空を浮かぶ。

続いて空に舞い出た俺は、その首をはねようと刀を振り上げ——絡む視線、気付いた時には剣閃が刻まれていた。

「うツ……！」

頭を掠めて、黒い男の刀が空気を撫でる。学帽が剥ぎ飛ばされ、額に熱が走り、血が漏れる。

その傷に気を取られていれば、落下中の宙空で身を旋回させた黒い男が、今度は後ろ廻脚を放ってくる。身体を襲う衝撃、ただでやられてなるものかと、こちらも黒い男の頬を斬り付け——墜落、石畳が窪れ、土煙が上がる。

「痛えな、クツソ……!」

恨み言を溢しつつ、跳ね起きる。

腕を振って土煙を払い、対面。

首を鳴らし、頬から血を流した黒い男は、不敵に笑んで佇む。

「……力量差は分かっただろ? 学ラン野郎。今諦めて大人しく去れば、追わないどいてやるぜ?」

「は? まだ半分くらいしか本気出してねえのに、力量差もクソもねえだろうが」

「ああ? まだ俺は半分も本気出してねえんだから、どう考えても俺のが上だろ」

「はあ? いや、さっきのは盛っただけで、俺はまだ3割しか本気出してねえし」

「ああ? 俺もテキトー言っただけで、まだ1割も本気出してねえよ」

「……………」

「……………」

「…………死ねツ、ガキがツ!!」

示し合わせたかのように。

俺と黒い男は、動き始める。

鋼と鋼がぶつかり合い、硬質な音を響かせる。刀と鈍の鈍い光が無数の線を描き、腕

と脚の、黒と白の軌跡もまた刻まれる。

至近距離での肉弾戦。

振り下ろし、前蹴り、袈裟懸け、後ろ廻脚、横薙ぎ、縦拳、足刀、肘鉄、刺突、裏拳、飛び膝、斬り上げ――。

皮を斬り斬られ、肉を打ち打たれ、骨を折り折られる。

挟れていく地面に、ピシヤリと血が飛び散る。

どれほどやり合っただろうか、最後にお互いに首を薄皮一枚斬ってから、俺たちは距離を取る。

「ッ…………息、乱れてんぞ」

「はあッ…………はあッ…………そっちこそ、絶え絶えだろ」

「ああ？ッ…………言ってる意味が分かんねえな、学ラン野郎」

「ッ…………ふうッ…………嘘吐け、やせ我慢ゴリラマン」

「…………リズムカルに言うんじゃねえよ」

「…………うるせえ」

呼吸を整えながら、軽口を交わす。

脂汗がこめかみに浮かぶのを感じつつ、俺は身体の状態を確かめる。

頭は何回か殴られてるが、ふらついてはない。首も、掠り傷だけだ。上半身は随分と

やられて、あばら骨も持つてかれてる気もするが…………それは向こうも同じだな。むしろ

アツチのがちよい重傷か?……下半身は、傷ついているが、騒ぐほどじゃない。

……しかし、呪力の防御をこうも易々と破られるとはな……ここまで傷を負うのは、シヨツピングセンター以来か? 痛えなクソ……息もし辛え。

苦悶に顔を歪めつ、黒い男を見やれば、顔やら服やらを血に染めながらも、表情はやはり不敵な笑みだ。

そんな彼に、俺は、疑問を投げかける。

「……おい、オマエ、ゴリラマン」

「……なんだ、学ラン野郎」

「テメエ、なんでこんなことした?」

「ああ?……金のためだよ。星漿体を殺したら、大金がたんまり入ってくる。単純だろ?」

「……その実力なら、裏のことなんざやんなくても、稼げるはずだ」

「……ハツ……呪力のない異分子な俺が、呪術界に受け容れられるわけねえだろうが」

「……そうか……じゃあ、とりあえず死ね」

「脈絡も何もあつたもんじゃねえな……オマエが死ね」

返ってきた答え、異分子という部分に少し感じ入るものを覚えつつ、止まらない殺意のままに暴言を吐く。

コイツにも色々あったんだろうが……悟を殺している時点で、和解の道は、もう無い。絶対に、コイツは殺す。

弛んでいた空気が再び張り詰めていく。

傷だらけの身体で、得物を構え合い。

1歩を踏み出そうとして――。

「――ツツ!!」

――ぶわりと、全身の毛が逆立つ。

押し潰されるような圧倒的な存在感。

黒い男と揃って首を動かし、土煙の向こう。

揺らめく影が見える。

やがて土煙が晴れる頃、そこに居たのは――。

「……………さと……………る……………」

蒼い眼光。白の髪。達観したような笑み。

纏うは血みどろの服、だが、彼は、悟は、しかと両足で立っでいて。

「……どうえツ、ぶおツ、さとツ、悟ツ!!?!生きてるツ!!?!生きてるツ!!?!えつ、生きツ、生きてるのツ!!?!生きててくれてたのツ!!?!」

それを見た俺は、わたわたと慌て出す。感情が迷子だ。

だって、あのとときの悟は、額にも喉にも穴が空いていた。まず間違ひなく致命傷だったはずだ。それが、どうやって……。

「……………反転術式か」

心中で浮かんだ疑問、それに丁度答えるかのように、対面の黒い男が言葉を漏らす。

反転術式……!?!そうか、反転術式か!?!負のエネルギーである呪力をかけ合わせて正のエネルギーにし、傷を癒やす、高度な呪術……!?!唯一できる硝子ちゃんのお教えがクソすぎて、今までは誰も習得できてなかったはずだけど……!?!アイツは、ここで習得してみせたのか……!?!

込み上げる感動。遅れて、安堵が、喜びが、込み上げる。

満面の笑みを浮かべて、俺は黒い男に喋りかける。

「ちよつ、あのおツ、すみませえーんツ!!?!ウチの後輩ツ、優秀なんでえツ!!?!生きてましたあツ!!?!ヨツユで生きてましたあツ!!?!あいむそおーりいー、ゴリラマアツ!!?!なんでしたっけツ、五条悟は俺が殺した、でしたっけ!!?!殺せてねえつうーのツ、ザコがあツ

!!一昨日来やがれツ!!」

「ペラペラと……コイツ、後輩が生きてた安堵で、ハイになってる……うぜえな……オ
マエも殺されたって思ってたクセに……ほんと、なんなんだ、コイツ……??」

勝ち誇った顔で、黒い男を煽り倒す。

ちよつ、生きてた……!悟、生きてたんだけど……!んだよもうツ、焦らせんなよツ

……!

……だが、生存が分かった今、もう裡に黒い感情はない。

口端を曲げて。

俺は、少し離れた悟に向かって手を掲げ、呼びかけた。

「——おっしゃッ、悟ッ、よく生きてたツ!!今夜はパーティーな!!じゃ、2人でこのゴ
リラマンやるぞツ!!」

それに答えるみたく。

悟もまた、手を掲げ——ゆっくりと、その位置が、下がっていく。

顔の前、手の甲をこちらに向けて立てた人指し指に、集う赫い光。

その赫は、視界を灼くほどに、明滅し——。

次の瞬間、赫い衝撃が、黒い男の身と共に——俺の身をも包み込んだ。

…
…
…
なツ、
なん
でえ
ツツ
ツ

——
!!!!????

第18話 イレギュラー・イレギュラー・イレギュラー

押し寄せる赫の波動。

咄嗟に身体の前で腕を交差させ、呪力での防御を全開にするも——身体がバラバラになつてしまいそうなほどの衝撃に見舞われる。

「——ッ!!!」

耐えることなどできずに、俺はその赫に大きく弾き飛ばされていく。

点在する幾多の寺社、その壁を背でブチ破りにブチ破り、やがて一際大きな和建築の建物の屋根に身体を打ち付けて、俺は止まる。

木片や瓦と共に、墜ちる身体。

ぐらつく意識の中、なんとか着地だけは成功させて、地面に片膝をつく。

「……痛つてえなあ……何、アレ?……無限の発散、か……?」

放たれた赫い波動の存在に当たりをつけつつ、涌き起こる煙を刀で払って、俺は立つ。

……あんな力は、俺は今まで見たことがない……とくれば、これまでの『無下限』の力に反転術式を応用した、と考えるのが普通だよ……。オリジナルの順転は、引き寄せる力だし、反転は弾く力つてのが妥当なところか？……いやつ、つてかそもそも俺、なんで吹っ飛ばされたの???

思案している——右に気配。

刀を構えれば、そこには俺と同じく吹っ飛ばされたと見られる黒い男が居て。

「待てよ、学ラン野郎。そんなに焦んな」

「いや焦るだろ、今俺めちやくちやパニックだもん。なんで俺、オマエとまとめて攻撃食らわせられてんの？俺、悟に何かした？」

「知るかボケ、元々嫌われてたんじゃねえか？」

「は？俺と悟、根っからのマブなんで、そんなわけないんだが？」

「あ？じゃあ嫌われるようなことを最近したんだろ。根っからのもんを崩壊させるよ
うな」

「はあ？いやオマエ、そんなことするわけ……ない、よ……？」

「疑問形じゃねえか、心当たりあんだろ」

「いや、心当たりは……な、無きにしも非ずつて程度だし……。……え、あの悪戯がバレたのか……？それともアッチ……？あるいは、まさかアレか……？」

刀を下ろし、顎に手を当て心当たりを探ってみるも、ちよつと判別がつかない。とりあえず土下座しとけば何とかなるか……?と思つていたところに、殺気。

慌てて飛び退いだ場所の空を斬るのは、黒い男の刀で。

「——オマツ、ちよつ、何してんねんッ!危ないだろうがッ!」

「ハツ……殺し合いの最中に気を抜いてんのが悪いんだろ、マヌケ」

「よし、殺します。絶対に殺します。オマエ、マジ、あれだからな?これから悟がこつち来たら、俺はとりま土下座して謝るから、それで2対1、数の差でボッコボコやからな?」

「黙れアホが、土下座して後輩のガキに協力を請うとか恥ずかしくねえのか?」

「いや、全然?」

「なんて純粹な目してんだ、コイツ……キモ……」

コイツ、なんで一々人を煽ってくるの?うつざあ……何、人の神経を逆撫でしないと死ぬ星に生まれた感じなの?じゃあ死ぬよ(止めどない殺意)。

睨み合つていれば——再び感じる圧倒的な存在感。

曇天に、戴くように。

悟は宙に立ち、高みからこちらを睥睨する。

黒い男は舌打ちをし、俺は悦楽に顔を歪めて叫ぶ。

「はい悟来ましたあーッ!! 2対1、勝ち確定ッ!! 謝るなら今の内だぞッ、ゴリラマン!!
おらッ、頭を垂れて蹲えッ!! 平伏しろッ!!」

「チッ……勝手に言ってる、学ラン野郎」

「お、それがオマエのファイナルアンサーだな!? 後悔すんなよ!? ……おい悟ッ!!」
威勢よく黒い男に確認を取った俺は、空の悟に向き直り、その場に頭を垂れて蹲う。

「なんでキレてんのかよく分かんないけどごめんさいッ!! この黒いゴリラマンむか
つくから、一緒にボコろう!?!」

「コイツ、後輩のガキに平伏してやがる……」

後頭部に視線が突き刺さるのを感じながら、俺は土下座を続けて悟の返答を待つ。

静かに待つこと数瞬——身体を撫でる、圧。

バツと顔を上げれば、その答えは、2度目の赫の奔流を以て返されていて。

「なッ、ちょッ——!!」

混乱の境地で、獣さながらに。

地面につけていた四肢を全力で動かし、前へと飛び出して——背後で、轟音。

爆風に身体を押され。

パラパラと落ちてくる礫を浴びながら、地面を転がる。擦れる頬、血が滲む。

下手したら、即死級の攻撃だった。

頬を拭いながら跳ね起き、いったい何してくれてんだと悟に文句をつけようと空を見上げ——俺を射抜く、蒼い目。

そこに、いつもとは異なつて。

何の感情が籠つていないことに気付いて、俺は、背筋が寒くなる感覚を覚える。

アイツは……本当に、悟か……？容姿は瓜二つだし、この圧倒的な存在感も、元々の無下限呪術と六眼に加え、死の淵で反転術式が使えるようになったことによる覚醒のよ
うなものと考えられていたが……目が、そこにあるはずの意志が、今の悟には見えない。
今の悟にあるのは、こちらを排除しようという無機質な使命感だけ……何が……いった
い何が起きている……？

「——ククツ……どうした？ご自慢の後輩は、オマエを殺したいみたいだぜ」
嘲る声。

赫の攻撃に、あのままならば巻き込まれる位置に居た黒い男は、それを逃れ、音もな
く俺の隣に立っており。

「……様子がおかしい……オマエ……まさかアイツに、悟に何かしてたりしねえよ
なあ……!?!」

薄く血の流れている黒い男の首もとに、刀を突き付け質す。

その詰問に、黒い男はせせら笑つて答えた。

「ハッ……さて、どうだろうな。強いて言やあ、喉をブチ抜いて、頭をブツ刺して殺したくらいだが……」

「ああ？……じゃあどうして、アイツは人形みたいになってんだよ……」

「人形だあ……う……ああ、なるほどな。たしかに今のアイツからは、殺す前にはあつた、意志みてえなもんは感じられねえ……もつとも、殺意だけはふんだんにあるみたいだけどな」

黒い男が、視線を空に送って言う。

その先で浮遊する悟の指先には、またしても赫い光が集つていて。

「クツソ……」

視界を紅に染めて、放たれる赫い波動。

俺は黒い男と揃って、地を蹴り場を離れる。

僅かに遅れて着弾、耳をつんざく音と共に、先程まで後ろに構えていた和建築を粉々に破砕した。

粉塵が立ち、木片瓦礫が崩れ落ちる中……俺は黒い男と言葉を交わす。

「……おい、ゴリラマン。オマエ、悟が人形みたくなってるのに、本当に心当たりは無いのか？」

「ああ、無えな」

「チツ……」

顔をしかめて睨めば、片眉を上げ愉快そうに目を細める黒い男。

俺は、空の悟と黒い男の動向に注視しながらも、高速で思案する。

——悟の身に起きてる可能性として……一番ありそうなのは、操られている、乗っ取られているというものだ。そうだったとすれば、悟自体の意志が無く、殺意だけがあるのにも理由はつく。だが、悟がそんな簡単に誰かに良いようにされるかと思うと、疑問も浮かぶ。余程の術師でもできない芸当だろう。100年、1000年でも生きて、呪術への造詣を深めたのなら、あるいはといった感じだが……天元様じゃあるまいし、そんな長寿な人間は居ないはずだ。

けれど、だとしたら、今のこの悟はいったい何だという話になってしまう。黒い男が言うには、少し前まではいつものアイツだったとのことだが……短時間で何があったんだ？反転術式の副作用か？そんなのは聞いたことがないが……いや待てよ？

反転術式は、頭で回すと言う。だが、細かく考えて行使しているわけではないはずだ。おそらくは無意識と意識の狭間に、反転術式はある。

そして悟は額を、脳を貫かれていた。深く物事を考える余裕などは、まず無かつたらう。故にアイツが行使した反転術式では、無意識が多くの割合を占めていたと考えられる。

その無意識が、悟の治癒、生存を何よりも最優先事項に置いていたとしたら。

反転術式の行使直後に、そのすぐ周りで暴れる危険人物。

それを悟の治癒、生存の脅威と捉えて、まだ意識は眠らせたままに、覚醒した身体で以て排除しようとして動いている……？

……いやいや、流石にそれは飛躍しすぎか……それなら俺が襲われる理由が分からないし。黒い男は悟に致命傷を与えた人物、無意識が敵と断じて動くのは分かるけど、俺はむしろ、全力でソイツを殺そうとしてたわけで……ん？

「……………あ」

……………俺、序盤でさ。ぶちギレて、術式を暴走させてたけど……あのとき、もし近くで伏せていた悟の反転術式も阻害しちやつてたとしたら……さ……俺も悟の治癒、生存の脅威じゃね……???

「……………おい、どうした？学ラン野郎。そんな、やつちまった、みたいな顔をして。面白えぞ」

「うるさい黙れ、ゴリラマン。……1つ、聞きたいことがある」

「……………なんだ？」

「……………反転術式による無意識下の暴走って現象……あると思うか？」

今までとは違う、別の意味で嫌な汗を垂らしながら、俺は黒い男に問う。

彼は、少しの間、考えるように顎を撫で。

「……普通はそんなもん、あるわけねえだろって笑い飛ばすが……六眼持ちのヤツだからな。それに周りには、イレギュラーが集まってやがる。無いとは言えねえ。ただ」

「ただ？」

黒い男は、一旦言葉を切り——見上げる悟の指の、小さな赫い輝きを眺め、言った。

「——だとしたら、今のアイツは……感情など無く、本能のままに邪魔者を排除しようと動く、殺戮人形と化してることになるな」

「なるほど……え、ヤバくない??？」

「ああ、ヤベえな」

あっけらかんと黒い男が言ったのけた次の瞬間——またまたしても、赫が放たれた。

アカン（白目）。

第19話 ∞と0とX

さて困ったことになった……。

赫の波動を逃れた俺は、近くの寺社の屋根に飛び乗って、頭を抱える。

灰の空に立つ悟。

彼は今、眠ったような状態で、自らの身を脅かす存在を、本能的に襲おうとしている。そして、悟をそんな人形じみた有り様にしたのは、俺が術式を暴走させてしまった所為だった。

『呪限無』による、不本意な反転術式の阻害。悟の無意識は、それを敵対行為と見たらしく、その牙は、黒い男だけではなく俺にまで剥かれることとなってしまっていたのだ。反転術式、六眼、天与呪縛、呪限無、幾多ものイレギュラーが重なることで起きた、最悪の事態。

反転術式が使えるようになった今、悟は六眼と無下限呪術をフル活用できるようになっている。おそらくは並みの攻撃は通じない。もう悟は、最強と呼ぶに相応しい

存在に至っているのだ。それ故アイツの呪力が尽きることは、まず期待できない。失神させる、もしくは呪力切れを待ち、無力化させる……そういうことが狙えないのだ。

つまり俺は、悟が正気に戻るまで、アイツが襲って来るのを凌ぎ続けたいといけなわけなのだが……はたしてその先で、彼が正気に戻ってくれるのかも分からない。

まあ、俺と黒い男が死ねば、確実に戻って来てはくれるんだろうけど……。

額を押さえるように当てた手、その隙間から悟の姿を見やる。

ガラス玉のような蒼い瞳で、無機質に微笑む悟。

感情は窺えない。

「……本当にどうすつかなー……」

悩んでいると、屋根に飛び乗ってくる影。

黒い男だ。

大棟を挟んだ対角に立つ黒い男は、小馬鹿にしたような口調で問いかけてくる。

「——で？どうすんだ？学ラン野郎。めでたくオマエも、あの化け物から狙われてるみてえだが」

「……………戦る……………しか、ねえだろうな……………多分逃げようにも、無下限呪術で引き寄せられるか、追いつかれるし」

「そうか。じゃあ……………——三つ巴の殺し合いつてわけだな」

ニヤリと、口端を吊り上げて。

黒い男は、刀と逆鉾を構える。

呼応するように、俺も刀を腰だめに置き、悟も腕を軽く上げる。

描かれるは三角形。

一瞬、分厚く暗い雲が途切れ、夕陽が差し込み——頂点に位置するそれぞれは、動き出した。



——電光石火、肉薄してくる黒い男の刀を受け止める。

一合、二合と斬り結び、散る呪力、火花。

たちまち足元の屋根瓦は余波で吹き飛び、それを目眩ましに俺はその場を離れ宙空へ。

地面と平行に天を仰ぎ、俺は、悟に術式を発動する。

無下限が阻害されたことで、白の髪を逆立て悟は落ちるも——意識が戻ってくることはなく、無感情のままだ。

……『呪限無』を使えば、もしかしたら戻ってくるかもと思ったんだが……クソ、そ

ここまで甘くはなかったか。

臍を噛みながら地面に降りていると、その悟へ、黒い男が飛びかかる。

逆突きに裏拳、後ろ廻脚に胴薙ぎ、袈裟懸け。

だが悟は、それら全てを危なげなく躲し——無造作に繰り出した蹴りで黒い男を遠く離れた和建築に叩き付け、自らはその反作用で近場の和建築に着地してみせる。

その動きの俊敏さに戦慄していれば、交錯する視線。

蒼い眼が、見てる——寒気、刀を枝垂に構えた直後に、気付けば数多の衝撃を経て、身体が竹垣にめり込んでいた。

「ガハッ……!!」

口をつくは血反吐。

刀が手を滑り落ち、カランと音を立て地を転がる。

酸素を求めて上げた顔、視界にはブチ抜いてきたがために崩れかけている寺社の壁の穴が映った。

ヤバい、意識が飛ぶ……！身体が……痛いなんてもんじゃねえ……！呪力で防御していたのに、また骨がイッた……！クソッ、どうする、今の悟は想像の倍は強い……まさか肉弾戦でもここまでやれるとは……呪限無に使う呪力を増やすか……？そうすれば、術式だけじゃなく、アイツの動きにも多少の影響が出るはず……。だが、もう呪力の残

りは6割近い……黒い男と悟、2人にかけて続けるとなると、これ以上は……。

脂汗を浮かべながら、打つべき手を模索していると、轟く倒壊音。

錐揉み状に吹っ飛んでくる影。

黒い男は、俺と同じく神社をブチ抜いて、横に連なる竹垣にぶつかる。

「……よお、ようこそゴリラマン。気分はどうだ?」

「ロクなもんじゃねえな。……おい、学ラン野郎。俺にかけてる術式を解いた方が良
いんじゃねえか?アレにもかけて、コツチにもなんて、呪力が厳しいだろ」

「動き辛くて焦ってるのか?残念、解かねえよ。オマエを自由にさせたら、どうなるか
分かんねえからな」

「チツ……じゃあまず先にオマエを殺してやるよ」

「ハッ、やってみる……」

悲鳴を上げる身体を叱咤し。

立ち上がった俺は、刀を中段に構え——吹く一陣の風。

睨み合っていた黒い男との間には、悟が居て。

「——ッ?!?!」

生存本能に突き動かされるまま、俺は峰に返した刀を、黒い男は刀と逆鉾を振るう。

描くは、網の目のごとき無数の剣線。

奇しくも黒い男と連携じみた攻撃になるも、全てが躲されまた捌かれ、付けられるのは掠り傷のみ。それも反転術式ですぐに治される。

水でも斬つてた方が、まだ手応えはあるぞ……!

暖簾に腕押ししの状況。

焦慮の汗が、目に流れ込み——頭に、激痛。呪限無の使いすぎで、脳がオーバーヒートを起こしているのだ。

堪らず俺は、攻撃の手を休め、自らの術式の制御もまた、乱れてしまう。

解き放たれる無下限の術式、至近距離で赫が爆ぜる。

「づッ——!!」

固めた呪力と肉体が軋む。

いとも容易く俺の身体は、そして黒い男の身体もまた宙を舞つて、遙かにあつたはずの寺社へと激突した。

「ツ……テメエ学ラン野郎ッ、いきなり術式解きやがって……! どういうつもりだ……!?!」

「術式の使いすぎで疲れちゃったんだよッ! それにこちとら東北で呪霊ブツ殺ツアアした帰りでもあつて、まだ疲労も溜まってんのッ! 労れッ!」

「知るか、テメエの所為でタイミングがずれて、要らねえダメージ負っちゃっただろう

が……！死ね……！」

「黙れッ、オマエが死ね……！」

寺の屋根を支える木柱が並ぶ舞台。

お互いに血塗れ、かつボロボロになった身体で醜い言い争いを繰り広げていると——
微かな足音。

欄干。曇天と地平線、和建築を背景に、悟が立っている。

目の前のクソバカよりも、悟の相手をせねばと、俺たちは揃って身体をそちらに向け、
得物を構え——肌が、粟立つ。

悟が動き出すのが、まるでスローモーションに見えた。

揺れる白髪、感情を映さない蒼の眼。

前に伸ばされた腕、小指と薬指は開かれ、人指し指と中指は、親指によって畳まれて
いる。

その2本の指が何かを押し出すように、開かれ。

小さく、蒼と赫の稲妻が迸り——視界いっぱい、の爆光が広がった。



ゴポリ、ゴポゴポ。

挟れた脇腹から、音を立てて、血が流れ落ちる。

左腕は肘辺りより焼け爛れ、肉と骨が覗いていた。

霞む視界。

大きくよろめいて、俺は、残っていた寺閣の屋根を支える柱にぶつかり背を預ける。

ぼんやりと後ろへ首を回せば、☒の波動の痕跡、深淵が見えた。

その破壊跡を対称に、向かいの支柱前。

黒い男もまた脇腹の挟れた身体で、仁王立ちしているのが目に入る。

左に握った刀はポロポロに朽ちており、その手から散る。

右に握った鉾は健在だが、その手はピクピクと痙攣していた。

「……まったく、嫌になるぜ……」

不規則な呼吸を縫って、嘆息してみせる。

——悟が☒の穿波を放とうとした時、ギリギリのタイミングで俺は『呪限無』を再発動し、それを掻き消そうとした。

だが、その目論見は遅きに失し、六眼の緻密な呪力操作の前に失敗、威力を落とすだけの結果になる。

そして、それでもなお☒の威力は凶暴かつ無比で。

俺が本気の呪力で固めた身体も、黒い男の持つ強靱な身体も、一緒に拮抗などできず呑み込まれたのだった。

「……………ぐツ……………」

ゆらりゆらゆら。

身体が揺れ、意識も揺れる。

……………返す返すも失敗した。悟が死んでるなんて早とちりして、ブチギれて。その悟に勘違いで殺されるとか、笑い話にもならねえよ。……………いや、硝子ちゃん辺りは案外笑うかもしれないわな……………どうだろうか……………まあ、ほんと、絶体絶命だ。ここからアイツに勝つなんて、1人じゃもう確実に不可能だろうな。

——けれど、だ。

「……………おい、ゴリラマンツ……………生きてるか……………?」

「……………なんとか、な……………むしろ、オマエが生きてる方が……………コツチとしちやあ、驚きだ」
「先輩に……………そう易々と負けられねえんだよ……………先輩は……………」

「ハツ……………難儀なもんだな……………」

瞳は、欄干の悟に戻して。

俺は、黒い男と言葉を交わす。

「……………なあおい、ゴリラマン……………」

「……………なんだ？」

「15秒……………手を貸してくれ」

悟が、欄干を発つ。

木の床に降り立ち、ギシリと踏みしめる。

「……………メリットは？」

「……………オマエの命と……………あとは……………最強に勝ったっていう、称号……………？」

「……………それへの興味は、もう捨てた……………はずだったんだけどな……………」

死神が近付いてくる。

「……………学ラン野郎……………俺は何をすればいい？」

「ステゴロ……………得意だろ？」

「……………正気か？」

「安心しろ……………リングは造ってやる」

雲の切れ間、夕陽が差す。

死神の影が、伸び……………。

「……………領域展開……………『有限呪園』……………!!!」

——紡ぐ言の葉、溢れ出た黒い渦は、球を象って、それを飲み込んだ。

第20話 俱に天を戴かん

焼け腫らした左手と、引きつる右手で印を組む。

呪術戦の頂点。これまででできたことは、なかった。

けれど今は何故か、漠然と、できるといふ予感があった。

「——領域展開……『有限呪園』……!!!」
ゆうげんじゆえん

文言を紡いだ瞬間、残っていた呪力がごっそりと抜け落ち——黒が辺りに渦巻いて、俺と悟、黒い男を飲み込み、球を象る。

包まれる、暗闇。

——ポツリと。

足元に、花が咲く。

フクジュソウ。エリカ。アロエ。プリムラ。

タンポポ。スマレ。カキツバタ。ブライダルベール。クロツカス。ツルニチニチソ

ウ。

赤、青、黄、緑、紺、紫、白桃、紅、山吹……花々は、暗闇の中を、埋め尽くすように、咲き誇つていく。

カスミソウ。ペチュニア。ブルースター。クチナシ。ペンタス。

百花繚乱。どんどん、どんどんと、広がる。

カラコエ。バルディア。マネツチア。アゲラタム。イヌサフラン。エーデルワイス。

千紫万紅。鮮やかに闇は染まり、創られるは——花園。

その咲き乱れる花々を踏みしめて。

こちらへ迫ろうとする悟、それを止めるべく、重い身体で黒い男が前に立つ。

「……足止め頼んだぞ、ゴリラマン」

「ハッ……誰に物言つてんだ、学ラン野郎」

風が吹く——衝突、呪術最強の男と、物理最強の男がぶつかる。

舞い散る、色とりどりの花卉。

15秒。

痛む頭、霞む視界、崩れそうになる身体で、俺は、領域にて底上げされた術式を発動する。

『有限呪園』内における『呪限無』、その変貌した効果は——領域内の、あらゆる呪いの掌握。

ここでは、俺は、あらゆる呪いの内容を、無理のない範囲で改竄できる。

「いくぞツ……!!」

14秒。

手始めに、『無下限呪術』を15秒間使用不可にし——花に塗れた地から伸びた不可視の蔓が、悟に絡み、馴染む——丸裸にする。代わりにその後15秒、『無下限呪術』の対象範囲を拡大できるようになる。

13秒。

至近距離、悟と黒い男は肉弾戦を繰り広げる。

左の横拳、捌いて肘を入れようとし、押さえられ、腹に膝。矢継ぎ早の殴打、全てを躲して足刀に廻脚、弾いて頭突き——。

12秒。

自らの脇腹から血が、命が零れる感覚を受け、膝を地に着きながらも——俺は、眼を瞑らせる。

11秒。

悟の身体を流れる膨大な呪力、それを10秒間制限——花に塗れた地から伸びた不可

視の蔓が、悟に絡み、馴染む——代わりに10秒経過後は暫く呪力量をその分増加できるようにする。

10秒。

「ぐッ……ゲホッ……」

咳き込み、口から血を吐く。

血は、下に咲いていた白桃のペゴニアを、赤く染めた。

9秒。

薄く笑って。

俺は、戦り合う2人を見上げる。

目にも止まらぬ速度で動く彼ら、その周りを花卉と黒い男の血が舞う。

8秒。

黒い男の呪い、天与呪縛を書き換え——花に塗れた地から伸びた不可視の蔓が、黒い男に絡み、馴染む——5秒間のみ身体の硬度を引き上げる。代わりにその後5秒は、弱体化する。

7秒。

「……化物がッ……!!」

撃ち合う2人、黒い男が苦々しく漏らす。

ジリジリと。

黒い男は押され、こちらに悟が近付いていた。

多分、負った手酷い傷が響いているのもあるだろうが……それを加味しても、悟が――強すぎるのだ。基礎的な呪力操作と体術でこのレベル……末恐ろしいどころの話じゃない。

6秒。

感じるようになる、戦闘の風圧。

髪が浮き、ポロポロの長ランがはためく。

顔の横を、幾多もの花弁が流れていった。

5秒。

「……………ハアツ……………」

時間が、異様に長く思える。

自らの荒れた息遣いが、いやに耳に入った。

4秒。

ガンガンと頭が痛む。割れそうだ。

元々『呪限無』は脳への負担が大きい術式だ。

それを長時間行使したこと、そしてこれまでずっと、休みなく戦い続けていること

……身体が、脳が、もう限界だった。

3秒。

「……ッ!!」

遂に、黒い男が吹き飛ばされた。

俺の頭上を舞って、黒い男は花畑を転がり、動かなくなる。

その頃には、もう悟は、俺の前に立っただけ。

2秒。

感情のない蒼の眼が、こちらを貫く。

交わる視線。

ゆっくりと、その腕は、俺へと伸ばされ——。

1秒。

「——ここだッ……!!」

練っていた呪力の全てを以て、術式を発動——花に塗れた地から伸びた不可視の蔓が、悟に絡み、馴染む——強制的に、悟の反転術式を終わらせる。

俺の眼前で、止まる手。

悟の身体を制御していた無意識は、抵抗しようとするも、制限された呪力では太刀打ちできず、されるがまま反転術式を解かれ——花に塗れた地から伸びた不可視の蔓が、

悟に絡み、馴染む——そこで俺は、強制的に反転術式を再発動させる。

すべての原因は、瀕死の悟が行使していた反転術式を俺が妨げ、その後も辺りで暴れてしまったこと。そして、その行動を、悟の防衛本能——無意識が、敵対行為と捉えてしまった。

まさしくは、イレギュラーによる誤作動。

ならば、それをリセットし、イレギュラーのない状態で再発動させれば——瞬間、あたかも糸が切れたように、悟は眼を閉じ、崩れ落ちる。

0秒。

定刻、領域が——崩壊する。

黒々とした結界の破片が散る中、俺は余力を振り絞って、結界の座標をズラす。穏やかな表情で倒れ込む悟だけは、直前まで居た寺院の舞台の上に戻して。

俺と黒い男は、そこから遠く離れた、築地が左右に並ぶ小路へと移動させ——。



「……………うッ……………」

抉られるような痛みが、脳を刺激し。

膝立ちの状態で、俺は意識を取り戻す。

か細い呼吸、全身に浮かぶ脂汗、額や脇腹から溢れる血液、ひりつく左腕……かつてないほどの最悪なコンディションでの目覚めだった。というか、よく目覚められたなっていう感じですらあった。下手したら永眠コースの重傷だろコレ。

早いところ硝子ちゃんに治療してもらわないかと思っていると——物音。

重い頭を向ければ、すぐ傍の石畳に転がる俺の刀、その向こうで、立て膝をついて築地にもたれる黒い男が居て。

「……なんだ。生きてたのか、学ラン野郎」

「……そっちこそな、ゴリラマン」

「相変わらず生意気言いやがる……なあおい」

「何？」

「……五条悟には、勝てたのか？」

「……まあ、向こうを戦闘不能に追いやったわけだし……俺らの勝ちじゃね？」

答えると、黒い男は、不服そうに口を曲げる。

「……イマイチ釈然としねえ……コレ、本当に勝ちって言えんのか……？」

「俺からしたら、悟も誰も死んでねえから勝ちだけど」

「ふざけんな、コッチは損しかしてねえぞ。……ムカつくし、今からでもコイツを殺つ

とくか?」

「おい」

物騒なことを呟く黒い男。わりとマジで勘弁してほしい……今こうやって喋ってんだって、限界ギリギリだし。

「……クソ……ぶちまけた蠅頭どもは、まだわんさか暴れてくれてんだろうが……星漿体は流石にもう、天元のところに辿り着いちまつてるだろうし……」

「……ドーンマイっ☆」

「死ぬ。……チツ、骨折り損のタダ働きかよ……」

溜め息と共に、黒い男は空を見上げる。

曇天、分厚い雲は依然広がっており、晴れ間は覗かない。どころか、夜の帳も近付いていた。

「……コレ、多分星漿体の娘は同化しないよーとか言ったら絶対マズいよな。つてか、あれ?」

「……ちよい待てゴリラマン、オマエ傑に手エ出したりとかはしてねえよな?」

「傑? 誰だソイツ」

「あー……福耳で、前髪が変で、ピアス空けてて、前髪が変な高専のヤツ。悟とか星漿体の娘とかと一緒に居なかった?」

「ああ、アイツ。星漿体のガキと逃げやがったよ」

あ、そーなの。良かった……じゃあコレ、ほんとハッピーエンドでは？俺は死にかけだけど。

「……よしつ、じゃあゴリラマン！お帰り願うわ、さつさと去ねっ！タクシー呼んでやるからー！」

「舐めんな、こっからタクシーまでどんだけ歩くと思ってたよ。俺に退いてほしいんだったら、大金と足代わりのヘリでも持ってこい」

「大金……いくら？」

「あー……5億。後、呪具の回収もしてこい」

「オマエこそ舐めんな」

なんでコイツ、死にかけなのにこんな傍若無人なんだよ。硝子ちゃんの親戚か???可愛くないヤツが横暴やっても、うざいだけだぞ???

——のんべんだらり。

熾烈な戦いを終えた余韻に浸りながら、そんな風に語らっていたときだった。

「——おめでとう。まさか五条悟に勝ってしまうとはね。君たちは……本当に予想外の存在だよ」

パチパチ、パチパチ。

横合いから讚えるように鳴らされる手の音に、粘りついてくるようなくぐもった声。重い頭をまた振って、そちらを見れば、続く小路を歩いてくる人物が目に入った。

不気味な能の女面を顔につけており、表情は窺えない。ワインレットのスカーフを首元に巻き、纏うは黒のハットに黒のトレンチコート。背はそこまで高くはないが……性別不詳だ。

訝しむ俺たちに、女面は語りかけ続ける。

「やはりだ。人間の可能性は底知れない。君たちは身を以てそれを証明してくれた。感謝しかないよ」

くつくつと笑って、女面は言う。隠れて俺は、黒い男とコソコソ言葉を交わす。

「何だアイツ、意味の分からんことをペらペらと……」

「こわー……不審者じゃん。通報しといた方が良くない?」

それを気にする素振りもなく、女面は。

「——そんな君たちに対して、非常に申し訳ないんだがね……私の思い描く未来には、どうにも邪魔みたいなんだ。だから——ここで死んでもらおうか」

トレンチコートの内から取り出される、黒く光るナニか。

極度の疲労、死闘の余韻、削れ切った身体、抜けていた気——あらゆる要因が絡み合っ

て、反応は遅れ。

気付いた頃には、鳴り響く4発の発砲音。

身体に焼け付く痛みが奔り——時分は、春宵に至ろうとしていた。

第21話 クラッカーは鳴らされた

「——うん、いいね。呪霊ではなく生身の人間、それも弱つてるときだ。通常兵器は当然、良く効くだろうね」

何かを確かめるように、淡々と女面の人物は言葉を紡ぐ。

辺りには、春先の生暖かい宵の気が漂っていた。

「……クツ……ソがツ……!!」

地面に両膝と片手をついた状態で、俺は呻く。

ポタ、ポタポタ。

元より抉られてた脇腹、そして撃たれた右肩と左の腿から血が溢れ、石畳を赤黒く染めた。

「いやはやしかし、なんと言うか……棚からぼた餅とは、まさにこのことを指すんだろ
うね」

高らかに、歌うように。

女面は、口を回す。

「本当はね、君、墓之瀬聡人くん。私は今日、君を殺す予定は無かったんだよ。時期尚早だと考えていたからね。けど、どうしたことだろうか、こうもお詠えの状況を用意されてしまったら……利用しない手はないだろう？」

その台詞に俺は、強い疑念を抱く。

……コイツ……… いったい何者だ？この口ぶり………どこかで状況を把握していたのか？どうやって？クソ、得体が知れねえな………いや、というかだ、そもそもコイツはなんで………。

「………ツなんでオマエ………俺を狙ってるツ………？」

「なんでって………そりやあ君、そんな異様な術式を持つていたら、狙われないわけがないじゃないか」

「………ツ！どうしてそれをツ………！」

「偶然だよ。半年くらい前かな。君、呪詛師たちと戦り合つてるときに、後輩たちに自分の術式を明かしてただろ？駄目じゃないか、どこに耳があるか分からないのに、そんな迂闊なことしちゃ」

「………盗み聞きしてんじゃねえよツ、キメエな………！趣味悪いぞツ………！」

激痛に苛まれながら睨み付けるも、女面は肩を竦めてどこ吹く風だ。女面は更には、

築地にもたれて浅い息の黒い男に話を振る。

「——まあでも……彼をここまで追い詰められたのは、禪院甚爾、君が暴れ回ってくれたおかげだよ。ありがたい限りだ」

「……ツ漁夫の利狙いのクソ野郎の感謝なんて要らねえよ……地べたに這いつくばって懇願してくるんだったら、貰ってやっても良いけどな……」

「手厳しいね」

ぼやける視界、取りつく島もない黒い男に、女面はくつくつと笑う。

終わりの気配が近付いてきていた。

血が流れ過ぎていて。身体も頭も、疲労の色が濃い。何より、長時間の術式行使に領域展開で、呪力がもう、底を突いていた。

得物の刀は、すぐ手に取れる位置にはあるが……ほぼ生身の状態で、あの女面に太刀打ちできるかどうか……まあ多分、無理だろうな。……詰みか。

諦観が身を包む中、手にある黒いハンドガンを弄んで、女面は1人愉しげに喋る。

「けれど、うん……フッフ、これも運命というヤツなのかな？こんなにもよく似た2人が、揃って私の前で死にかけているなんて」

「似ている……？ツ誰と、誰がだよ……」

「君と、禪院甚爾が、さ」

告げられて。

俺と黒い男は、重い身体を動かし、顔を見合わせる。ふむふむ……。

「「こんなアホ面と、どこが似てんだよ。殺すぞ?……あア!? 真似すんなッ!」」

「あつはつは、息ピツタリ、そつくりじゃないか。……もつとも、私が似ていると言ったのは、そこじゃないさ。——君たちの境遇にだよ」

引き金の周り——トリガーガードに指を入れて、女面はハンドガンをくるくる回す。

「例えばそう……非術師と御三家、カタチは異なるが——その家からすれば異質な力、受け容れ難い力を持って生まれ、血の繋がる実の親族から虐待されながら育ったところとかね」

嘲笑めいて述べられた言葉に。

俺は、自らの心臓が、ドクンと大きく跳び跳ねたのを感じた。



物心つく前から、俺にはバケモノの……呪霊の姿が見えていた。

ベビーカーに乗せられて行った、商店街の路地裏に。

遊びに連れて行ってもらった公園の、古びた遊具の上に。

通うこととなった幼稚園の、片隅に。

訪れた、親戚の家の、使われなくなった物置小屋に。

どこにでも、ソイツらは居て。

幼かった俺は、無邪気にその存在を、何も居ないはずの場所を指差して、みんなに伝える。

ねーねー、アレは何だろう？と。

そんな俺を、商店の人は、小さかった友だちは、幼稚園の先生は、親戚は、不気味がった。

——意味の分かんねえこと言ってるじゃねえ

——オマエ、おかしいよ

——……変なこと言わないでちょうだい

——気持ち悪い……不吉だ

次第にみんなから避けられるようになった俺を、それでも両親は、お父さんとお母さんは、変わらず愛して続けてくれた。

——なんて、夢みたいなことはなかった。

お父さんは、俺がバケモノが見えることに怯え、何かあれば殴ってきた。

お母さんは、俺の歪さに耐え切れず、無視するようになった。

今なら分かる。当然だ。見えてはいけなないモノが見える不気味な存在が、自分の子どもだなんて、嫌に決まってる。何が起るのか分かったものじゃないんだ。そりゃあ気持ち悪いだろう。そんなヤツを、赤子のときと変わらずに愛せるわけがない。

——喋るな、不愉快だ

——どうしてオマエなんかを産んでしまったのか

——出来損いめ

——消えろ

かけられるのは、暴言の数々。

でも俺は、幼くて、頭の回らないガキで。

何が悪いのかなんて、まったく分かっていなかった。

きつとその内、優しかったお父さんとお母さんに戻ってくれるだろうと思っていた。

だから、にこにここと、笑顔でお父さんに、海に行ってみたいと言って——殴られた。

だから、にこにここと、笑顔でお母さんに、幼稚園で頑張って描いた似顔絵を見せて——

——破られた。

だから、にこにここと、笑顔でお父さんに、サッカーをしてみたいと言って——殴られ

た。

だから、にこにここと、笑顔でお母さんに、誕生日だからと公園で集めた花を渡して——捨てられた。

だから、にこにここと、笑顔でお父さんに運動会に来てほしいと言って——殴られた。だから、にこにここと、笑顔でお母さんに、見に来てほしいと授業参観の紙を渡して——ぐしゃぐしゃに丸められ、投げつけられた。

だから、だから、だから……だから？

何をして、両親の態度は変わってくれなかった。戻ってきてはくれなかった。むしろ、いつも笑顔だった俺がより気持ち悪かったんだろう、苛烈にすらなった。

ただ、両親がまだ優しくかった頃に、聴人の笑った顔は可愛いねって……そう言ってくれたから、ずっと笑っていただけなのに。

そして、小学生になって暫くしたある冬の日。

俺を置いて、2人で旅行に出かけていた両親は、交通事故に巻き込まれて死んだ。即死だったらしい。

わけが分からないままに、気付けば、葬式が執り行われることになって……それでも俺は、こんなときに、どんな顔をすれば良いのか分からなくて、笑っていた。

泣きながら、俺は笑顔を浮かべていた。

親戚は、そんな俺を痛罵して、暴力を振るった。

——オマエが殺したのか

——何を笑っているんだ、このクソガキが

——どうして産まれてきてしまったんだ

——なんておぞましい

——気色が悪い、失せろ

お経を読んでいた住職たちが、慌てて暴力を振るう親戚を止め、動く中……ポロポロの身体で、覗いた棺。

お父さんとお母さんの声が聞こえた気がした。

——オマエの所為だ

——オマエが死ねば良かった

怨嗟の呻き。

ぐるぐる、頭の中で、責め立てる声が、忌々しそうに蔑む声が、回る。自分が何をしているのかすら分からなくなつて、俺は、その場に倒れ——目を覚ましたときには、叔父に引き取られることになつていた。

——わざわざオマエみたいな気持ち悪いガキを引き取つてやったんだ。迷惑かけたら殴るからな

叔父は、そう言つて、俺をテキトーな中学校に叩き込んだ。

目まぐるしく変わる環境。

叔父は、最低限しか生活の保障をしてくれなかったから、中学生ながらに俺は働かなければならなかった。

身分証明をしないで働けるところはそう多くなく、場末の居酒屋や、工事現場、パチンコ屋といった仕事を、死にものぐるいで掛け持ち働く。

無駄に耳が良かったこともあって、バイト中は、常にその騒音由来の頭痛に悩まされた。

学校では、バイトの疲れからいつも寝てしまっていたので、ロクに友だちもできなかった。その内バイトを優先して学校を休むようになったし、修学旅行なんかも、当然費用は準備できなくて、行けなかった。

どこまでも続く暗い日々。

未来なんて見えなかった。

けれど、どうか、どうか。

こんな、価値のない俺でも。

せめて、少しの間でも良いから。

人並みの幸せを、生きる楽しさを味わってみたいかった。



「——他にも……そうだね、宿っていたその力は、生家では認められることはなかった、けれども生家以外にとっては無視できぬほどの能を持っていた……こういつた部分も似ているね」

我に返る。

汗水血潮を垂らしつつ、上体を持ち上げ、膝立ちの姿勢。

俺は、ご高説を続ける女面を見据える。

「あとは、大切な人と出会えても、すぐ別れることになるという部分も……うん、一緒だね」

くるくる、くるくる。

相も変わらず、女面は、ハンドガンを回していた。

「しかし運命、運命か……運命とは、最も相応しい場所へ、人を運ぶと言う。家族に甚振られ育ち、折角会えた大切な人ともすぐに分かれたるなんて実に不幸で可哀想な人生を送って、最後には私の前で虫のように転がる羽目になるとは……君たちは、随分な評価を運命から受けているみたいだ」

嘲りの滲んだ声音で、女面の人物は言を放つ。

見下ろしてくる能面もまた、あたかも頬をつり上げ嗤っているかのようだ。
痙攣する手。

石畳に転がる刀を掴み。

喘鳴を漏らしながら、俺は、よろよると立ち上がって。

女面に、意を唱える。

「……………シエイクスピアか……………？文豪の台詞を借りても、オマエのバカさが隠せてねえぞ……………頭ん中に、脳みその代わりにクソでも入れてるのかと思つたわ……………」

「……………？どういう意味かな？」

「まんまの意味だよ……………オマエは知らねえのかもしれないが、良いか、クソ詰まつた頭でよく聞け……………大切な人に……………大切だと、大好きだと思える人に会えて、思い出を紡げた時点で……………その人生は、もう幸せなんだよ……………訳知り顔で語つてんじゃねえ、バーカ……………」

痛みで引きつる顔を——笑みに歪め、告げる。

「……………」

呆気にと取られたのか、女面は、ハンドガンを回す手を止めた。

カタリと、指奥に落ちたハンドガンは僅かに音を立てる。

「……………クッククック……………お面野郎が、面食らつてやがる……………傑作だな、おい……………」

フラフラと。

築地を寄る辺に、口端を曲げて、黒い男も立ち上がる。

沈黙を保っていた女面は、ハンドガンを懐に仕舞い、ハットをつばを微かに下げる。能面のにやけた目元に影が落ち……女面は口を開く。

「……なるほど。そういう考えもあるんだね。興味深い意見をどうも、墓之瀬聡人くん」

「どういたしましたして、愚かな知恵者……利口なバカを目指して……ここでくたばれ……」

ゆつくりと、刀を構える。

幾度となく繰り返し、身体に覚え込ませた動作。

並び立つ黒い男も、淀みなく無手の腕を構える。

女面は、こちらを誘うかのごとく、両の腕を大きく広げ——俺と黒い男は、同時に駆け出した。

第22話 サプライズパーティー

右の脚で地面を踏み込み、左の脚で地面を蹴る。

檻樓と化した長ランをはためかせて、俺は女面へと肉薄する。

「——無理するなよ。疲れてるだろ」

「まさか、元気いっぱいだよ……！」

腰だめに構えた刀を頭部に振るい——ハットを押さえながらそれを易々と躲す女面、その背後に回り込んだ黒い男が右廻脚を仕掛け——それもまた、いとも容易く捌かれる。

「片や残りカスの呪力で動く術式の焼き切れた術師に、片や百孔千瘡のフィジカルギフテッド……そんな相手に、私が後れを取るわけないだろう？」

「ぐッ……！」

「チッ……！」

トレンチコートを揺らし、踊るような滑らかさで、女面は扶れた脇腹を蹴りつけ、顎

を掌底で打つてくる。

よろめく身体を俺は意地で持ちこたえ、返す刀で袈裟懸け、黒い男も合わせて右の縦拳を放つ。続いて刺突に曲線を描く左の殴打、斬り上げに右の剛腕。

阿吽の息の、連携攻撃。

だが、速さも威力も、キレも呪力も……何もかが、女面に届かせるには足りていない。軽やかに全ての攻撃を掻い潜った女面は、刀を奪いながら合気で俺を投げ飛ばす。

地面に叩き付けられ、奔る激痛。這いつくばって見上げた先、女面は奪った刀で黒い男の——鳩尾を突き刺す。

咯血、黒い男の頭がガクンと下がり、動きが止まる。

静まり返る場。

黒い男は、震える左の手で刀を掴み——上げた顔、ギラギラと瞳を輝かせ、凄絶に啞う。

「……捕まえたぜ」

「なッ——」

至近距離。

血に塗れた拳が、女面の腹に——炸裂する。

初めて攻撃を受け、女面はふらつき。

石畳をもがいて起き上がった俺も、血を撒き散らしながらその背面へ右の拳を振るう。

須臾の時は、無限にも引き延ばされ、歪む空間。

叩き込んだ拳、宿した呪力が——黒く爆ぜる。

黒閃は、女面の背から脇腹を抉り飛ばした。

「——ッ!!……なんてヤツら……」

「ハハッ………！サプライズプレゼントだよッ………！コイツでお揃いだなッ………!!」

苦悶と驚嘆の声を漏らす女面。

響く苦痛も呪力に変えて。

勢いそのままに、俺は、左の拳も打ち込もうとし——。

——ゾクリと、不穏な気配を感じる。

次の瞬間、移り変わる視界、トレンチコートの女面は消え失せ、灰色の石畳が現れる。

続いて身体を襲う強かな衝撃。

「がッ………?!?!」

詰まる息、あばらの幾本かにヒビが入り、内から痛みが滲んでくる。元よりの負傷の痛みも相まって、意識が飛びかけた。

何がッ……起きてるッ……!?!動けないッ、地面に押し付けられてるッ……!?!……呪力の圧……それとも術式かッ……!?!

「……まったく、手負いの獣が一番厄介とはよく言ったもんだね。満足に動かせない拳で打ち抜いてくる胆力に膂力、土壇場でなけなしの呪力で黒閃を出してくるセンス……たまげたよ。残穢が残ってしまうから、使うつもりはなかったのに、コレを使わされてしまった」

頭上から、パンパンとコート汚れを叩く音に、辟易としたような声。

ギシギシと軋み地面にめり込まされていた身体がふつと軽くなる。

先までの圧が止んだ。

だが、起き上がる力は、残っていないかった。

近くに伏す黒い男は、ピクリとも動かない。

当然だ。

俺もアイツも……既に限界を超えていた身体を、何とか騙して動いていたのだ。

もうこれ以上は、意地や精神でどうにかなるものではなかった。

「まあそこから辺のリスクを考慮しても、君たちをここで排除できるなら、お釣りがくるわけだし……必要経費として割り切るとしよう。プレゼントには、お返しが必要だしね」

頭すらも上げられない中、上目遣いに睨めば、女面の血濡れたコート、その内の脇腹が治っているのが確認できる。

……コイツ、反転術式も使えるのか……いよいよもって、絶望だな。呪力は本当にすつからかんだし、得物も奪られた。こつからの逆転の目は……まるで見えない。

「……しかし、どうしたものかな。少し口惜しいね。もつと違うカタチで会えていたのなら、殺しまではしなかつただろうに」

暗い宵空を背景に、色のない能面が、こちらを見下ろす。

「ああでも、安心してもらって大丈夫だ。君たちの亡骸は、きちんと有効活用してあげるから。禪院甚爾の方は、そうだね、骨粉にでもして裏に流そう。よく売れるだろうね」
段々とボヤける視界。ぐるぐる回って、混ざっていく。

音も遠くなっている、身体に心地好い温かさが広がって。

自分が、どこに居るのか、何をしているのか、分からなく――。

「墓之瀬聡人くんの方は、術式はもちろん、五条悟や夏油傑、その他数人の術師とも繋がりがあからね。より一層役立ちそうだ。……困った、年甲斐もなく興奮してきそうだよ」

——その言葉は、いやに耳についた。

コイツは今、何と言った……？俺だけじゃなく……他も、狙って、いるのか……？俺の身体が利用されて……悟が、傑が……硝子ちゃんや、歌姫さんが……夜蛾先生が、冥さんが、日下部さんが……雄が、建人が……俺の大切な人たちの誰かが、コイツに、何かされるのか……？

「……………オオツ……………!!」

そんな、そんなのは……ダメだ……許容できない……大した人間じゃないんだ、俺はどうなっても良い……けど、みんなは、大好きなみんなだけは、絶対にツ……………!!

「——オ……………オオオオオオツツ……………!!」

血を絡ませた、呻きともつかない叫びを上げ。

ガクガクと震える脚で、俺は立ち上がる。

息をするだけでも、辛い。

ましてや、立っているのなんて、拷問だった。

でも、それでも、コイツを自由にさせるわけにはいかないから。

俺は、血塗れの、ボロ雑巾の身体で、女面の前に立つ。

「……………いや、なんで立てるの？満身創痍どころじゃないでしょ。脳震盪で意識は朦朧、

全身に打撲と裂傷があつて、脇腹は抉れ、肩と腿も撃たれて、呪力も術式も無いのに

……。人間として、そろそろ死んどきなよ」

呆れの溜め息を吐いて。

ハットの位置をずらし、調整する女面。

「……譲れないもんがあるからな……そのためなら、どれだけ身体がボロボロになつていようと……いくらでも立てるんだよ……」

「矜持か？けど、それだけじゃ私には勝てないよ。何も残ってない君に、はたして何ができるのか……見物だね」

興味もなさげに言い捨てて、女面は、俺から奪った刀を無造作に構える。

それに俺は、笑って返して。

「ご講釈を垂れてやる。」

「……残ってないなら……持ってくりやあ良いんだよなあ……」

「……なるほど……！……命を懸けた縛りでも使う気かな？そうすれば、一時的にとは言え私に對抗できる」

「50点の解答だな……縛りは、対価にするもので、得られる力も変わる……そして、俺が懸けるのは……命よりも大事な——」

ゆっくりと。

躊躇が、悲哀が、後悔が、拒絶が、未練が、溢れ落ちないように、暗い空を見上げて。
戻す視線——告げる。

「——思い出だよ」

脳裏を。

青春の光景が過る。

夜の街に怪しく微笑む冥さん。

車の前で、見送ってくれる補助監督さん。

校門の前で出迎える夜蛾先生。

刀を交えた先の日下部さん。

黒板の前、緊張気味に笑いかけてくる歌姫さん。

彼女と出かけた渋谷、初めて触った携帯電話。

並ぶ机の向こう、生意気に笑う悟に、穏やかに微笑む傑、ぽけーつとした硝子ちゃん。

夏の海、線香花火、スイカ割り、ビーチバレー。

新宿、悟と傑、冥さんと日下部さんと囲んだテーブルパーティー。

冬の高専、雪合戦。

桜吹雪、無邪気に笑む雄、真面目な顔の建人。

それら全てが、愛しい思い出が消えてしまうなんて、嫌だ。死んでも忘れたくない。ようやく手に入れられた、幸せに、楽しみに彩られた記憶。

けど、みんなを害そうと、傷付けようと、弄ぼうとするコイツを阻むためには――。

「……思い出が命よりも大切だなんて……随分とロマンチストなんだね」

「嫌いか……？ロマンは……」

「どうでもいいというのが、正直な感想かな？」

「風情の分らないヤツだな……」

交わす軽口。

応酬の中で、俺は、覚悟を決めて。

思い出を消そうと、縛りを結ぼうと、額に手をやり――。

――飛来してきたナニかが、目の前の女面を吹き飛ばした。

それは――金棒を持った、人並みの大きさをした、ウサギのぬいぐるみだった。筋肉質なそのぬいぐるみは、こちらを見て、ぐっとガッツポーズを取る。

宙を舞いながらも、刀で攻撃を防いでいたらしき女面は、軽やかに築地に着地し――

その壁を斬り崩して、裏から現れたタバコをくわえた男が、女面に無数の劍撃を浴びせる。

その閃く刀を凌ぎ切った女面、そこに群がるは数十もの黒い鳥たち。

全部、見たことがあった。慣れ親しんだものだった。

傀儡操術。

シン・陰流。

黒鳥操術。

あまりにも都合の良すぎる展開に、気が緩み、抜ける力、仰向けに俺は後ろに倒れ――

――ぼすんと。その身体が、優しく受け止められる。

既視観。

いつかのように、優しく声がかけられた。

「――遅れて悪いわね、聡人。もう大丈夫、あとは私に……私たちに任せてちょうだい」

冷たくなる身体に感じる温もり、慈しみを感じる声音。

起きた奇跡に、つい安堵の笑みを浮かべてしまう。

本当に、この先輩は……いつも来てほしいときに、来てくれて。

欲しいときに、欲しい言葉をくれる。

「……良いん、スカ……？」

「ええ、もちろん。そうですよ？」

「——ああ。聡人に……俺の生徒に、これ以上は手を出させたりはしない。安心して、休んでろ」

問いかけると、芯に響くも柔らかな声で、答えが返される。

それに俺は、どうしようもなく安心してしまつて。

もう大丈夫なんだと、思つてしまつて。

「……じゃあ、頼みますわ。……近付くと……地面に押し付けられるのと……反転術式も使うんで……気を、付けて……」

「ああ——任せろ。歌姫は、聡人を頼む」

「はい、絶対に守ります」

「……つたく、とんだパーティーになったもんだ……」

「まあまあ日下部。賞与が期待できて、多方面に借りを作れると考えたら、むしろ胸が躍つてこないかい？」

「そりゃオマエだけだよ、冥冥」

歌姫さんに抱えられる俺の前。

庇うように、夜蛾先生が、日下部さんが、冥さんが——並び立った。

第23話 宴もたけなわ

「……おかしいね。君たちが今日、高専に来る予定はなかったはずだ」

意識のない黒い男と子ども、歌姫さんに応急処置を施してもらっている俺の前。

並び立つ3人を越えた先、もうもうと立ちこめる白煙の向こう。

「それに、こんな所に来てる理由も不可解だ。敷地内には蠅頭が溢れ、日付は星漿体の同化当日。未登録の呪力を察知したとしても、普通は天元を護りに薨星宮に向かうだろうに……ああそうか、夏油傑がいたか」

トレンチコートを揺らして、ハットを被った女面が現れる。その手には、俺の刀が握られ、宵闇に鈍く光を放っていた。

その女面へ、夜蛾先生が問いを発する。

「……随分と内情に詳しいみたいだが……貴様、何者だ？」

「何者だなんて聞かれて、正直に答えるヤツがいるわけないだろ。質問は、頭を使ってからしてくれ」

「そうか。それなら——吐きたくなくなるまで痛めつけてやろう」

夜蛾先生の台詞と共に、動き出す金棒を持ったぬいぐるみ。

伴って、日下部さんと冥さんも、得物を手に駆け出す。

女面に迫ったぬいぐるみは、恐るべき臂力を以て、金棒を叩き付け——割れる地面——
軽やかに回避していた女面は、お返しとぬいぐるみを斬りつける。

が、ぬいぐるみはそれよりも先に後退してそれを避け、入れ替わり、日下部さんが前
に出てくる。

鞘に戻した刀を腰だめに構え、昂る呪力。

放たれるは——シン・陰流『抜刀』。

神速の剣閃、女面は立てた刀でそれを受け——天より大斧が迫る。

淡い水色の髪を逆立て、冥さんは大斧を振り下ろす。

女面は、呪力で強化した腕を掲げてそれを防ぎ——沈む足、地面に亀裂が入った。
暫しの拮抗。

女面は、両方を大きく跳ね除けて、流れるような美しい所作で、刀を振るう。

日下部さんは、刀を以てその剣撃を弾き、冥さんは烏を間に挟み込ませることで、そ
の剣撃を防ぐ。

刀と刀と斧と烏。

火花と黒い羽が散り——その合間を縫って夜蛾先生は現れ、拳を打つ。

右の曲打に、左の横拳、足刀に、肘鉄。

息も吐かせぬ見事な格闘術、しかし女面は、その尽くを捌き、流し、躲す。

挙げ句に夜蛾先生は、蹴り飛ばされ——入れ替わり、日下部さんが袈裟懸けを、冥さんが斬り上げを放つ。

1本の刀で、女面はそのどちらもを受け止め、なるはギリギリと押し合い。

はあ、と。

何かを諦めたかのように、女面は溜め息を吐いて——バツと日下部さんと冥さんが飛び退くと同時に、辺りの地面が陥没する。

例の能力だ。

「……流石に1級、この身体だと、少々手に余るね」

腕を軽く振りながら、調子を確かめつつ、女面はそんなことを言う。

その背後から、ぬいぐるみは金棒を横薙ぎに振るい、夜蛾先生も正面から鉄拳を振りかざす。

女面は宙返りで金棒を避け、ぬいぐるみの頭に着地してみせ、夜蛾先生の拳は空を切る。

見下ろす女面に、日下部さんと冥さんは斬りかかるも、器用にそれらを回避。

ぴよん、と女面は地面に降り立つと、例の能力をまた発動する。

夜蛾先生と日下部さん、冥さんは瞬時に大きく後退するも、ぬいぐるみは捕まり、地面に沈んだ。

「上手いこと避けたね」

「……チツ……」

その間に女面は距離を取り、止む庄、ぬいぐるみが何事もなかったかのごとく起き上がる。

円を描くように。

3人と1体が、女面を取り囲む。

その中央で、女面は、刀を持っていない方の手を顎にやり、考え込む仕草を見せた。

「……さて、どうしようかな。シン・陰はともかく、傀儡操術はちよつと面倒だね。ダ

メージなし、か」

「……それが強みだからな」

「そうだね。……ああ、シン・陰の、そんな微妙そうな顔をする必要はないよ。君にも相応の面倒さを感じてはいるから。もちろん、斧の君にもね。——だから……こうする

としよう」

ポイっと。

得物たる刀が無造作に投げ捨てられる。

突然の暴挙。

3人が、意図を疑ってそれに注視する中、死に体の俺だけは、女面本人を見ていた。スローモーションに映る動き。

女面は、自由になった両の手を裏にして、組み――。

「――領域展開――」

――紡がれんとする言の葉。

蠢く膨大な呪力、咄嗟に3人は止めようと、或いは簡易領域を展開しようと動き出すも、間に合わない。

だから――。

「――『呪限無』 ツツ……!!」

――歌姫さんに支えられながらも俺が、無理矢理に術式を解き放つ。

頭に奔る、抉られるような激痛。

あれより万一を考えて0から練っていた呪力では、一瞬しか女面の呪力操作は乱せない。だが、絶技たる領域の展開を邪魔するには——それだけで、充分だ。

「——墓之瀬聡人……！」

「ハハッ……やらせねえよ……!!」

能面越し、忌々しげにこちらを見やつてくる女面に、俺は笑顔を返し——ソイツに迫る、夜蛾先生の豪腕。

女面はすぐさま掌印を解き、唸りを上げる腕に手を添え何とか受け流すも、続いて日下部さんの居合——『夕月』が襲う。

半ばから女面のコートは斬り裂かれ、しかし後1歩、刃は届かない。

けれども避けた先、ぬいぐるみの振るう金棒までは躲せず、片腕を盾にし——歪み捻れる腕、遂には冥さんに斬り落とされる。

崩れるバランス、女面の身体の足取りは乱れ、そこに日下部さんの2度目の『夕月』、太ももに深い斬り傷が生まれる。

更に駄目押しでの追撃、踏み込んだ夜蛾先生の拳が背を打ち、疾く来たる鳥が脇腹を穿つ。血肉が、宙に散りばめられた。

「……チッ……！」

舌打ちを披露して。

飛ぶ腕を掴み、曲芸じみた動きで女面はその場を離脱、近くの小さな和建築の屋根に飛び乗る。

「……………」

沈黙。

無言で女面は反転術式を行使、腕を繋いで、太ももと脇腹、背を癒やす。

その軒下手前、跡を追って3人と1体が集う。

「……………はあ……………残念だけど、ここまでかな」

張り詰める緊張感、ようやく女面が口を開いた。

「……………ここまで、だと……………?」

「ああ。そこそこ消耗してしまっただけだからね。それに五条悟がいつ目覚めるかも分からないし……………これ以上高専に長居するのは危険だと判断した。まったく、どちらか1人は確実に殺しておきたかったんだけどね……………特に墓之瀬聡人の方は」

「……………聡人は殺らせんし……………貴様も逃がしはしない」

「良いのかい? 私ばかりに構って、墓之瀬聡人を家入硝子に診せに行かなくて。保つかどうかは、五分と云ったところだと思っただけ」

「くっ……………!!」

女面との会話、顔を悔しげに歪める夜蛾先生。

だが、次第に遠のいていつている俺の耳では、上手く聞き取れない。

「それじゃあ悪いけど、お先にお暇させてもらうよ。……またいつか、墓之瀬聡人」
最後に、俺を一瞥し。

コートをはためかせて、女面はふわりと浮き上がり、夜空に消えていく。
いつの間にか。

かかる雲は薄くなり、金の満月が覗いていた。

「——聡人っ、ちよっ、気をしっかり！目を瞑っちゃ——！」
月明かり。

必死に呼びかけてくる歌姫さんの、そして慌てて駆けてくる夜蛾先生の、日下部さんの、冥さんの顔を見ながら。

やってくる眠気、心地好い温かさに身を任せて、俺は——目を閉じた。



——目を、覚ます。

ぼやけていた視界、ピントが合うようになって初めて見えたのは、木目の天井だった。

チカチカと光る蛍光灯が眩しい。

何か……夢を見ていたような気がした。とても悲しくて……とても嬉しい夢を……。

……いや、違う。俺は……そうだ、女面と戦って……どうなったんだ……？みんなはッ……!!

慌てて起き上がる。

軋む身体、激痛が込み上げる。

「いった……!!え、何この痛さ……！むしろこれ、逆に身体に痛くない所がないみたいなくらいなんだけど……！」

布団の中、包帯の巻かれた身体を押さえて驚く。

無茶しまくったからなあ……そりゃこうなるか……。頭にも巻かれてるし……うわ、左腕ぐるぐる巻きた……。……つてか、あ、ここ、高専寮の医務室か……。

起こした上体、首を回して周囲を確認していると——かけられる声。

「——おや、墓之瀬くん。起きたのかい？おはよう。随分とお寝坊さんだったね」

「冥さん……！」

見れば、入り口の扉の方で、黒づくめの服に身を包んだ冥さんが立っ

「何日寝てました？俺」

「丸3日だね」

「わーお……あ、女面。女面のアイツはどうなりました!? あと悟は何ともないですか!? 黒い男は……!」

「まあまあ、少し落ち着いた方がよいよ、墓之瀬くん。身体に障る。君にとって大事なことはきちんとして伝えてあげるから、安静にしとくんのだ」

「……ういつす」

嗜められ。

俺は大人しく身体を戻し、ベッドに再び寝そべる。

傍にやって来た冥さんは、備えられていた丸椅子に腰かけ、ゆっくりと喋り出した。

「——君が目覚めたことを、他の人たちにも伝えないといけないからね。簡潔にいう。まず、今回の襲撃での死者はいないよ。怪我を負ったのも、君が一番重くて、あとはみんな、すぐ治ったよ。五条くんなんかは、ピンピンしてる」

冥さんの口から出てきた言葉に俺は大きく安堵の息を漏らす。

よかつた……みんな無事だったのか……。

「次に、あのお面を被った正体不明の襲撃者についてだが……取り逃がしてしまったよ。逃げ足があまりにも速すぎた」

……そうか……得体の知れないヤツだから、できれば捕らえておきたいところだったんだけど……まあ、アイツ、強い……というか気持ち悪いからな……しゃーないしゃー

ない。

「もう一人の襲撃者の方——君が言う黒い男だ——こつちもまた、意識を取り戻したあとすぐに逃げ出してしまつてね。一応足取りは探つてはいるけど……如何せん、相手は天与呪縛のフィジカルギフトッド。期待はできないと思うよ」

「なんだ、黒い男も逃げたのか……まあ共闘した仲だし……知らん間に死なれてるよりは、マジか。……つてか、俺がばらまいちやつた呪具はどうしたんだろ。アイツ、回収したんかな？」

「あとは……これが最も重要事項なんだけどね、墓之瀬聡人くん」と、冥さんが、そこで一旦区切り。

俺の注意を十分に引き付けてから——彼女は、言った。

「——君の秘匿死刑が、決定したよ」

「……………マジ??？」

「うん、マジ。じゃ、私はそろそろみんなに君のお目覚めを伝えてくるから」

「あ、はい、行つてら……」

立ち上がり、扉に向かう冥さん。

俺はそれを、ぼけーっと見守り——ガチャんと、丁寧に扉が閉まる音。

耳鳴りのするほど静かになった医務室、俺は天井を見上げながら——思った。

……え、死刑ってマジ………
???

第24話 目が覚める

高専寮の医務室。

全身に包帯を巻いた俺は、ベッドに腰かけながら、医薬品の並ぶ棚の先、窓を見つめる。

窓の向こうには、下半分に森林の緑が広がり、上半分に空の青が広がっていた。

良い天気だ……雲ひとつない……まるで俺の心模様みたい——ではねえなあっ！俺の心模様っ、今荒れ狂ってるからなあっ！台風4号っ、到来しちやっつてんだわあっ！えっ、死刑が決定したって何よ!?!どゆことっ!?!俺何した!?

窓の外の景色を眺めつつ、心中で混乱しまくっていると、ドタドタと足音が聞こえてくる。

その方向、入り口に目をやれば、勢いよく開く扉。

「——聡人っ！」

巫女装束の歌姫さんが、髪を振り乱しながら入ってくる。

急いでやって来たのだろうか、荒れた息。

揺れる黒の瞳が、ベッドの俺を捉えた。

「あ、歌姫さんじゃん。ちよりーす、元気し——」

——ふわりと。

軽く腕を上げた俺の身体に、歌姫さんは腕を回して、優しく抱きついてくる。

温かな人の感触。

肩の上、顔のすぐ横には彼女の顔が置かれ、髪が頬を撫でる。

硬直する俺を厭わず、彼女は心情を吐露し始めた。

「聡人っ!!良かった、起きてっ……!!あんな重傷で、急に意識を失ったから、もう、駄

目かどっ……!!もおっ、心配させんじやないわよっ……!!バカっ……!!バカ聡人っ……

!!」

「お……お……ご、ごめんちやい……?」

潤んだ瞳、嗚咽をこらえた声。

そこに、こちらを強く想っていてくれたことを感じた俺は、抱きつかれてるこの状況

も相俟って、赤面してしまう。

ど、どうしよう……対応の仕方が分からない……声の返し方も分からないし……だ、

誰か助けて……。

とりあえず上げてた手を下ろし、歌姫さんの背中を優しく叩きながら、宥め。どこかにSOSを発信していると、それが届いたのか、開け放たれた扉から、新たに人が入ってくる。

「聡人っ！」

「聡人先輩っ！」

「……………」

慌てた様子で現れたのは、2年ズの3人だった。

黒のサングラスをかけた悟に、珍しく髪を下ろしている傑、いつになく焦った表情を見せる硝子ちゃん。

彼らは、起き上がっている俺を確認すると、ほつとしたような顔を見せ、次いで抱きついてる歌姫さんを確認し、気まずそうな表情を浮かべる。

それに気付いた俺は、違うよ???そういうんじゃないよ???と目で弁解するも、視線を逸らされる。

なんだコイツら。

「…………あの、歌姫さん。みんな来たし、ほら、離れよう?大丈夫、俺、元気です」
誤解されるのもあれだしと、俺は歌姫さんを引き剥がそうとし。

「…………やだ。もう少し…………」

「いや、やだじゃなくて……俺、朝のお布団じゃないんで、延長機能付いてないんですよ。つてか、もう心臓さんの鼓動が危ないんで、はな、離れて……？」

なんでもかむずかる歌姫さんを説得し、不承不承ながらに離れてもらつて、俺は自由を得る。

その自由になつた身体を2年ズに向けて、改めて俺は挨拶を交わしていく。

「——傑、前髪どうしたの？変じゃないじゃん。逆に変だよ。」

「初手、煽りつて、心配した私がバカでしたね」

「硝子ちゃんが急いでるつてのも、なかなかレアだよな。あ、もしかしてお土産、ちゃんと届いてなかった？向こうの補助監督さんに頼んでおいたんだけど……」

「聡人先輩は私のこと、何だと思ってるんですか??お土産とか関係なしに、ふつーに聡人先輩が起きたつて聞いたから駆けつけただけなんですけどね……」

呆れたように額に手をやる傑に、唇を尖らせて不服そうな面持ちの硝子ちゃん。お、ちゃんと心配してくれてたんだ……ちよつと……いや、かなり嬉しかったり。

「悟は——」

「いや、待て、聡人。先に俺に言わせてくれ」

続いて悟に視線を送ると、彼は広げた手を前に出して、押し止めてくる。

そして、ガバリと頭を下げた。

「——悪い、聡人。俺がしくつた所為で、オマエに迷惑をかけちゃった。しかも、肝心なときには寝こけてた始末だ。……本当に、すまん」

「お、おお……いや、別に気にすんな……？」

誠心誠意。

しおらしく悟が謝ってきて、俺は戸惑いながら、頭を上げさせる。

調子かね、狂うよね……。生意気なのが取り柄だろ、オマエはさ。

「けど……」

「悟。大丈夫、俺、先輩だから。後輩のポカなんて、笑って許してやるよ」

なおも言い募ろうとする悟に告げると、彼は、唇を噛み——ガシガシと頭を搔いて、大きく溜め息を溢し。

「……ありがとな」

「ふふっ、どういたしまして」

ぶつきらぼうに礼を伝えてくる。

俺は笑ってそれに返して、湿っぽい話は終了、別の話に移る。

「それよかさ、悟。や、僕でも良いんだけど……星漿体の娘ってどうなってる？無事だよね？」

「ああ。天内も、黒井さん……お付きの人も無事だ。傷一つ無い」

「今は高専で預かってる状態ですね。ただ、色々揉めてはいるので……とりあえず七海と灰原に傍に居てもらってます」

「けっこー気になっていたことを尋ねると、ちよつとばかり不穏な答えがもたらされる。揉めているって……何？」

すると、その疑問が顔に出てたのか、悟が理由を明かしてくれた。

「……上のヤツらは、同化を拒否したのが気に入らないんだとよ。天元様は、別に良いつて言ってるのに」

「あ……まあ、そうだよな……そうなるよな……上のアホバカマヌケゲボカスどもは、何かと変化を恐れるクソチキンの集まりだもんな……でも、権力だけはあるから逆らえないという世知辛さ。渡る世間はゴミばかりや……」

「まあ、多分なんとかかりますよ」

「だと良いけどな……」

一抹の不安を覚えつつ、ベッドに座ったままぐつと大きく伸びをする。身体がまだボロボロなので、めちやくちや痛いけど、長い間寝てたおかげで凝ってたところがほぐれて気持ち良い。

「む。ちよつと、聡人先輩、まだ残ってる傷もあるんですから、大人しくしてください」

咎める声。

硝子ちゃんが、半眼になって睨んでいる。

「す、すいやせん……あ、そーいや多分、治してくれたのも硝子ちゃんだよね。ありがとう」

「……いーえ。別に、そこまで苦労してませんし」

庄にやられて子犬のごとく謝罪、あんど感謝をプレゼントすると、澄まし顔で受け取る硝子ちゃん。クールだね……。

そう思っていると、ニヤニヤ顔の悟と傑が、愉快そうに付け加えてくる。

「とか何とか言って、ほんとはめちやくちや大変だったくせに」

「私たちが、やり過ぎだ、倒れるぞって止めても、ずっと反転術式やら看護をしたのにね」

「……クズども、記憶を捏造すんの、やめろよ。1日1回、適量でしかやってねーっつの」

耳を赤らめ、硝子ちゃんはストッキングに包まれた足でゲシゲシと悟たちを蹴りつける。

……そ、そっか……硝子ちゃん、一生懸命俺の看護してくれてたのか……ほんまにええ娘やな……今度シャネルの……いや、ディオールの……いや、もういつそ宝石辺りあ

げちやうか？

2年ズがわちやわちややっているのを眺めつつ、俺は、脇の歌姫さんに問うてみる。

「女の子って、高級ブランドの品と宝石だったら、どっちが好きですかね？」

「え、何よ急に……まあ、宝石じゃないかしら。私も……そういうの貰えたら、嬉しいし」

「そーゆーものなのか……じゃあ今度歌姫さんにもあげますね。ダイヤモンドとか？」

「へっ!? ダ、ダイヤって……」

途端、顔を朱に染め、あたふたし始める歌姫さん。

どうしたんだろう……? ま、いつか。とりあえず冥さんに良さげな宝石のお店聞いて……って、違えわ、そもそも俺、意味不明に死刑が決定してんだったわ。ダイヤだなんだとか言ってる場合じゃねえ、むしろdie いやだの精神でいかないと。死刑になった経緯とか、歌姫さんなら知ってるかな？

「——そういえばなんですけど、歌姫さん。俺、死刑になっちゃったらしいんですけど、何か知ってます？」

問いを発した直後、彼女は険しく顔を歪める。じゃれあっていた悟たちも手を止め、こっちの話に参加し出した。

「……残念だけど、それは事実よ。アンタが意識を失って翌日に、総監部で事の処理がなされて……まだ生死を彷徨っていた頃だったのに、そういう通達がなされたわ。とりあえずは、まだ猶予期間だから、高専寮で預かれてるんだけど……」

「理由は、天元様が高専に張ってた結界を破壊し、呪詛師を招き入れたから……だったか? くっつたらねえ」

語られる詳細。俺は、えー……と、口をねじ曲げてしまう。

だつて、結界を破壊したつて……あれじゃん。ゴリラマンが悟を瀕死に追いやってん
のを見てぶちギレて、術式を暴走させてしまったときのあれじゃん。ここでもそれ響い
てくんの??? もうなんか笑えてきたわ。ウケる。

「あちらの言い分は、客観的に見ても変ですからね。何を以て呪詛師と通じていると
判断したのか……公平性にかけます。どこかきな臭さも感じますし……」

「ま、大方バレちゃった聡人先輩の術式がアレだったから、理由付けして消そうとかし
てんでしょーね」

ね、それね……俺も今そう思った。夜蛾先生が前に言つたことだからな、俺の術式
が上の人たちからはご遠慮願いたい類いのものだつて……というか、待つて待て待て?
「……もしかしてとは思うんだけど……夜蛾先生、とぼっちり受けてマズいことにな
つてたりしないよね?」

「……拘束されてるわ。アンタの術式を秘匿していたことと、死刑が通達されたことに猛抗議して」

歌姫さんの口から告げられる、ショッキングな現状。マジでか……!!

「大丈夫だ、聡人。冥さんと日下部の口添えで、先生の待遇はそこまで悪いことにはなつてねえから」

「なら良かった、とはなんないんだよなあ……」

だつてこれ、現在の俺らを取り巻く状況つて、まず俺が死刑じゃん？で、夜蛾先生は拘束されてて、冥さんと日下部さんは、性格的に、ちよつとこつちに寄つてくれるつて感じ。完全な大人の協力者は居ない。そこに星漿体の娘でのごたつきもあるから……え、ヤバいんだけど。最悪、みんな死刑とか、重めの処分下される可能性あるよね……。ど、どうにかせねば…………あ。

「待てよ、良いこと考えた。よく聞けみんな？」

名案を閃いてしまった俺は、ベッドに腰かけたまま、ピンと指を立て、注目させる。隣に座る歌姫さんや、対面に立っている悟たちの視線がこちらへ集まるのを感じながら、俺は口を開く。

「今、俺たちつてさ、俺の死刑と夜蛾先生の拘束、星漿体ちゃんの処遇の行方の3つの問題を抱えてるわけじゃん？」

「ええ、そうね」

「そこでよ」

フィンガースナップ——パチンッと指を鳴らし、俺は結論を披露する。

「——みんなが逃げようとした俺を捕まえたつてことにしてさ。俺の身柄を総監部に渡して死刑を執行させる代わりに、夜蛾先生の解放と星漿体ちゃんの未来の保障をしてもらうつてどう!?!」

完璧なロジック。

これ、この素晴らしい策、みんな唸つちやうでしよと期待していると——ガシッと掴まれる胸ぐら、ドンッと勢いよくベッドに倒される。

「どうわらべつ!ちよつ、歌姫さん、何を——」

「ああ?」

いきなり押し倒されたことに文句を放とうとし、上から来る黒々とした眼光と怒気の滲んだ声に阻まれる……というか、怖くて口をつぐまざるをえなかった。ひい……な、何い……?」

「おい、聡人、アンタ今、何つった。ふざけてんの?冗談にしては質が悪すぎるんだけ

ど。ねえ」

ぺちぺち。

マウントを取りながら、頬を叩いて、無表情で質してくる歌姫さん。

萎縮しつつ、俺は、精一杯言葉を返す。

「い、いや、あの、冗談じゃなくて……その、わりとマジで言つて——ひいつ……！眼がつ、眼が怖いっ……！助けて悟たち——ひいつ、こつちも怖い……！」

「ちよつと、人が話してんだから、ちゃんとかつち見なさいよ。おい、こつち見て、説明しなさい。なんでそんなバカげた考えを出してきたのか。ほら、早く言え」

「うえつ、その、えと……お、俺、これまで青春するために生きてたみたいなの、サムシングなんで……分不相応ながらも？それを達成できましたので、かくなる上は、もういーかなつて……」

「は？意味分かんねえこと言つてんじゃないわよ。何よ、もういいつて。勝手に1人で満足してんじゃないわよ。人の気持ちも考えなさいよ。アンタがぶつ倒れて、死んじゃうかもつて思つて、どれだけ私たちが心配したと思つてるの？ねえ。ねえ。ねえ」

「う……や、で、でも、このままだと、みんな立場とか悪くなるし……俺のやつすい命を使つて助かるなら——」

「ああ？」

「ご、ごめんなしやああい……」

「ごめんなさいじゃなくて。だいたい、先生も星漿体の娘も、私たちも……アンタに犠牲になつてもらつて救われても、辛いだけなのよ。ちつとも嬉しくなんてないのよ。だからやめろ、独りよがりは。おい、分かったか？返事は？」

「は、はあい……！分かつ、分かりましたあ……！」

怒れる歌姫さんの威に震え上がった俺は、大人しく返事をする。

それを確認した歌姫さんは、鼻息荒く俺の上から起き上がり、ベッドを下りる。

そして、頭を冷やしてくると言つて、部屋の外へ。

ベッドに、押し倒された姿勢、寝転がったまま放心していると、脇から悟と傑が語を発する。

「……歌姫が言いたいこと、ほとんど言つてくれたからな。バカげたこと言つた件は、オマエが復活したら、赫ぶち込むだけで許してやるよ」

「私は、極の番をぶち込むだけで許してあげますね」

「それ、許してなくね……??」

「ああ？」

「な、何でもないでえす……！」

後輩たちの威にも震え上がっていると、彼らは大きく息を一つ吐いて、覚悟を決めた

ような顔で出ていく。

最後に、それらのやり取りを見守っていた硝子ちゃんが、俺の寝ているベッドに腰かけ、話しかけてきた。

「……あれ、多分五条たち、総監部にカチコミにでも行くつもりですね。聡人先輩の死刑を取り下げさせるために。やばー」

「いや、ガチでヤバすぎでは……??？」

「ほんとヤバいですよね。私はと言えば、反転術式での治療を拒否ってるくらいしかしてないのに」

「え、全然硝子ちゃんもヤバいことしてんじゃん……なしてそげなバカなことを……？」

「なしてって……」

はあ……と、彼女は溜め息を溢し。

伸ばされた細く白い手が、ぴんつと俺の鼻を弾く。

「聡人先輩って、なんか自己評価低めですけど……私もアイツらも、そんなバカなことしちゃうくらい——」

優しく和らいだブラウンの瞳、硝子ちゃんが言う。

「——聡人先輩のことが、好きなんですよ」

言葉にされた想いが、真正面からぶつけられる。

一瞬止まる息。

ドクンと、心臓が跳ねた。

溜めてた息と共に小さく声にならない声が漏れ、どうしようもなく、顔が熱くなる。

「……そ、そーなの……?」

「そーですよ。つてか、言わなくても分かるでしょ、ふっ」

「そっか……」

「……そっか……思い上がりとかじゃ、なくて……俺、ちゃんとみんなに、好いてもらってたのか……そっか……」

形容し難い感情が奥底から込み上げてきて、俺は、そつとシーツを引き上げて自分の顔を覆い隠した。

「……どうしたんですか? 聡人先輩。急に顔なんて隠して」

「……隠してないが? シーツが俺に覆い被さってきただけだが?」

「じゃあシーツを剥いであげますね」

「やめっ……やめろおっ! それよりお腹っ、お腹空いたからご飯持って来てっ!」

「えー……ま、良いですけど」
面白がって。

力ずくでシーツをギチギチ取ろうとしてきた硝子ちゃんに頼み込んで、ご飯を取って来てもらう。

ガチャんと、扉の閉まる音。

「ふー……」

俺は、大きく息を吐き、シーツの暗闇の中。

——どうしてオマエなんかを産んでしまったのか
頭に響く声が。

——良かった、起きてっ……!!
上書きされて。

——出来損ないめ
どんどん。

——……ありがとな
どんどんと。

——オマエが死ねば良かった

今までの声が、薄れて。

——聡人先輩のことが、好きなんですよ

新しい、大好きな人たちの声が響くようになる。

「……………ふ……………ふ……………」

再度、震える息を、ゆっくりと吐き出して。

俺は、シーツを深く被り直した。

……………だつて、一応、男の子だからね。万が一にも……………こんなくしゃくしゃになつてしまつた顔は。

誰かに見せるわけにはいかなかった。

第25話 存在しなかった未来

——俺が目を覚ましてから、数日が経った。

依然、身体は本調子ではないが、軽く運動する程度なら問題ないだろうという硝子ちゃんの診断を貰えるくらいには回復した。

その間に、悟と傑は大立ち回りを繰り広げたようで、夜蛾先生は拘禁から解放され、星漿体ちゃんたちの身の安全は保障され、俺の死刑執行も無期限に延期された。

はたして、彼らは何をしたのか……気になってはいるが、戻ってきた夜蛾先生がすごい顔をしていたので、詳しくは聞いていない。だって聞くの怖いし……。

まあそんなわけで、晴れて俺は、輝かしい未来を手に入れられたのだけれど……結局は悟たちが無理を押し通した形、なのでまだ上には不満を持っているヤツらがごまんといる。

故に下手に外に出ると、向こうが事故を装って暗殺してきたりする可能性があるため、全快してはいない俺や、星漿体ちゃんたちは、まだ高専を出ない方が良いというこ

とになって——今。

身体に包帯を巻いたままの俺は、高専寮の悟の部屋を、勝手に使つて。

「——ああああああ美里さんっ、ミドリ甲羅はやめっ、やめてくださいっ!! やつと初めて1位が取れそうなのっ! ミサっ……ミサトさんっ!」

「え、えつと……その、すみません。……えいっ」

「ぐああああっ!! 死になさいされたあああああつっ!! い、一気に最下位に……!! なんっ……なんなんだよもうっ……!!」

「あはは。聡人先輩、おもしろ」

「やったつ、これで最下位じゃなくなった……! 黒井っ、ありがとうっ!」

「いえ、理子さま、お構いなくっ」

硝子ちゃんと、星漿体の娘——天内理子ちゃん、そのお付きの黒井美里さんと、マ○カーをしていた。

ちなみに悟と傑が居ないのは、禪院家がどうのとか言つてどっか行つており、歌姫さんと建人、雄が居ないのは普通に任務があるからだ。

なお、理子ちゃんはヘアバンドに長い髪を三つ編みで一まとめにした中学生の美少女ちゃん、美里さんはクラシカルな割烹着に身を包んだ美人さんね。

そして、その美人さんたちに結託された俺は、マ○カーレースのトップ争いから蹴落

とされ、画面で我が化身のヨ○シーがヘロヘロになりながらゴールする。

結果は美里さんのマ○オが1位、硝子ちゃんのピ○チが2位、理子ちゃんのルイ○ジが3位、俺のヨ○シーが4位だった。

その惨憺たる結果に、堪らず俺はコントロールを放り投げて叫ぶ。

「ちくしょう美里さん強すぎんだろっつ!! わざわざハンデで10秒後にスタートしてもらったのにつ……!!」

「ふっふっふ、当然っ! わたしの黒井は、マ○カーの天才だもん!」

「あ、あはは……」

「聡人先輩も聡人先輩で、弱すぎるんですけどね。マリカーの無才」

「うるさいぞ硝子ちゃんっ……!!」

俺の泣き言に、理子ちゃんはドヤ顔で嬉しそうに言って、美里さんは愛想笑い。硝子ちゃんは、なんでか言葉の刃でこっちを切りつけてくる。ほんとにそれはなんで???

「まあでも、これで聡人先輩は5回負けたことになるんで、罰ゲーム決定ですね。おら、コ○・コーラ買ってこい」

「わたしカ○ピスが飲みたい!」

「す、すみません……私はお○お茶で……」

「うぐっ……」

次々となされる注文、俺は顔をしかめる。

いや、別に飲み物を買うのは全然嫌じゃないんだが……罰ゲームでパシられるというのが、ね？ちよつと屈辱的なんだよ……。

「……はあ……分かったよ、いーよ、買ってくるよ……所詮敗者に権利はないんだ……それこそが、儂き世の定め……」

「スゴい、この人、マ○カー負けた罰ゲームで、世の摂理を悟ってる……」
不貞腐れながらも立ち上がった俺は、悟の部屋を出て。

マ○カーを3人で再開したのか、背後でわーわーと楽しいげな声が聞こえるのを感じながら、察の外、割と離れた所にある自動販売機に向かう。

……まあ、何はともあれ。

悟と傑が無茶してまで護った女の子が、楽しく過ごせてるんなら……良しとするか。そうして、フツと口元を綻ばせて廊下を歩いている内に、到着するのは自動販売機前。財布を取り出し、いざ注文された品々を買おうとしたときだった。

コツコツと鳴る靴音。

小銭を探す手を止め、その音の方を見れば、黒のジャケットを担ぎながら向かってくる女の姿が目に入る。

煌めく金の髪に、整った顔。

スタイルの良い肢体に、黒のノンスリーブニットと青のジーンズを身に纏っており、爽やかさと色気を同時に演出していた。

美人さんだー……と思っていると、その彼女はこちらに金の瞳を向け。

「君が墓之瀬くん？——どんな女が、好みかな？」

そう、尋ねてきて。

「……たしかに俺は、墓之瀬聡人くんですけど……どなたですか？それと好きな女のタイプは……顔はまあ、美人さんだと嬉しいっすね。で、自分を持つてる強気な人で、俺を救ってくれる感じの女性が良いです」

「ほう……良いね。ああ、私は九十九由基、術師だよ。君に少し用があつてね。わざわざ高専に来たんだ」

流れるように。

彼女はニコニコと自己紹介をしながら、自動販売機周りの備え付けベンチに長い脚を組んで座る。

そして、ぽんぽんと隣を叩いて追従するよう促してくる。做つて、隣に俺も座つた。

「——さて、どこから話したものかな……んーと、墓之瀬くん。私は君に、ものすごく興味があるんだよね」

「えっ、ぎゃっ、逆ナンですか……？やだ、照れちゃうなあ……」

「あつはつは、まさか。流石に高専の子に粉をかけたりはしないよ」
なんだ、違うのか……ちよつと残念。

しよぼーんと気落ちする俺を、九十九さんはクスクス笑い飛ばして——ピンと立てた人差し指。

彼女は表情を真面目なものに変えて、話し始める。

「私が興味を抱いているのはね、君の術式にだよ」

「あー……もしかして、あれですか？危険だー、的なの？」

「いやいや、上のクソジジイどもじゃあるまいし、私はそんなバカげたことは言わないよ。……私はね、墓之瀬くん。君の協力があれば、私の望む世界を創れるんじゃないかって、期待しているんだ」

どこか、遠い顔。

愁いを帯びて、彼女は心意を告げる。

しかし世界を創る、か……。

「……そりやいったい、どういう意味ですか？」

「……呪霊の生まれない世界が、創れるんじゃないかって……そういう話さ」

「呪霊の生まれない……!?!」

溢された言葉に、思わず目を見開いて驚く。予想だにしない台詞だった。

そんな俺から視線を外し、虚空を眺めながら、彼女は口を開く。

「少し授業をしようか。そもそも呪霊とは何かな？」

「金の成る木……」

「バツド、違うね。それ、誰に教わったんだい？」

「金銭面のしつかりした美人さんに」

「その人からは、守銭奴の匂いがするねえ……まあ良いや。答えを言ってしまうと、呪霊は、人間から漏れ出た呪力が寄り集まり形を成したモノだ」

「あ、そっちなー」

「そっちも何も、これしかないんだけどね。で、そうすると、呪霊の生まれない世界の創り方は2つ」

横顔、こちらを見ないままに、彼女は立てた2本の指を突きつけてくる。

「1個目、全人類から呪力をなくす。2個目、全人類に呪力のコントロールを可能にさせる」

「ほお」

「1個目はね、結構イイ線いくと思ったんだ。モデルケースもいるから」

「モデルケース？」

「君が最近戦り合った人だよ。禪院甚爾。彼は非常に異質な存在でね。天与呪縛に

よって、世界で唯一呪力が0だったんだ」

へー……あのゴリラマン、そんなスゴいんだ。

「彼の面白い点は、それだけじゃない。禪院甚爾は、呪力0にも拘わらず、五感で呪霊を認識できている。呪力を完全に捨て去ることで、肉体は一線を画し、逆に呪いの耐性を得たんだ。正に超人、是非とも研究したかったんだけど……もうフラれちゃっててね」

「どーんまいっ。お酒でも飲んで、愚痴は吐き出しちゃおう？」

「いや、これ、失恋話とかじゃないから……コホン。えーと、それでだね、墓之瀬くん。そんな折、君の術式のことを聞いたんだ。なんでも、呪いを……呪力を阻害できるとか」「ああ、なるほど。そう繋がるわけね。でも俺の術式じゃあ、人間の呪力を消し去るとかはできませんよ。あくまでも、一時的に呪力の巡りをなくしたりとかができるだけです」

ようやく話が見えてきた俺は、先んじて結論を出してあげる。流石に個人の術式程度じゃね……そこまで大それたことはできないよ。

結論を聞いた九十九さんは、やっぱりか……と、前のめり、開いた脚に上体を落としたり落胆する。

「……ダメかー……君の異質な術式なら、或いは、とも思っただけどね……」

「まあ、所詮は術式っすからね。領域を展開するならまだしも、呪力を消し去るのはムリムリ」

「だよねえ……領域を展開するならともかく、術式じゃあ………えっ、待って、領域を展開するんだったら、人の呪力を消し去ることができてるの??？」

「慰めるように言うのと、ものすごい勢いでこちらに詰め寄ってくる九十九さん。か、顔が近い……！身体も……ちよつ、当たつ、当たつてるつて……！」

「あ、ああつ、すまないね、ちよつと冷静さを失つてた……」

「気を付けてよ……こちとらピチピチの18歳なんだから。ドキドキしちゃうでしょ？」

「フフツ、正直者だね。以後は気を付けるよ。——それで、話を戻すけど……領域を使えば、君は他人の呪力を完全に消し去ることができるのかい？」

「体感ですけどね。それに領域を展開できたのも、数日前が初めてなので、確証はないけど……釣りが取れるなら、領域を解除後も呪力を0にしたままにできそう」

「マーベラス……!!最高だぜ墓之瀬くん!!抱き締めても良いかいっ!？」

「ちよつと、そういうのは気を付けてって言ったばかりでしょうが。……是非とも抱き締めてくださいっ!!」

「お願いした瞬間、首に回される腕、前に倒され——顔が柔らかいものに包まれる。こ、

これはまさか、おっぱ……!!

頭をショートトさせていけば、至福の時間はすぐさま過ぎ去り、俺は解放されてしまう。ぼーっとしながら九十九さんを見やると、彼女は喜色満面、笑みを浮かべていた。

「ははっ、あははっ！ やつと、大きな一歩を踏み出せそうだっ……い！」

「よ、良かったですね……」

「ああっ、まったくだよ！ あの時諦めなくて良かった……禪院甚爾から来て、君に辿り着けたんだから。けど、全人類の呪力をなくさせるんだったら、墓之瀬くん一人の力じゃ足りないし……何かそういう呪具、もしくは術式の持ち主を探さないとだね。いや、その前に、まず君の協力を得ないと、か」

キラーンと、目を光らせて。

肉食獣がごとく、彼女は俺を見てくる。

「が、こちらとしては、そんなビッグスケールな話は、簡単には決められないので……愛想笑い、するしかないですね。えへへ。」

「むう……そうだ、墓之瀬くん。きつと君は、これからその術式の所為で、上層部の連中に色々と厄介な目に合わされると思う。色々と、ね。ただ、私に協力してくれるんだったら、そんなヤツら、力ずくで黙らせられるけど……どうかな？」

「交渉ですか？ でも、そこら辺は大丈夫ですよ。うちの後輩が、任せろって言ってたん

で

「後輩……五条くんたちか」

「そ。だから心配要らないんすよ。だって、アイツらは——」
備え付けベンチから、立ち上がり。

九十九さんを見下ろして、俺は言う。

「——最強だから」

「……ははっ……随分、信頼してるんだね」

「ええ、まあ。他にも、夜蛾先生とか歌姫さんとか、支えてくれる人が居るんで……
きつと、これから先も、俺は大丈夫です」

「……そっか。なら、これ以上は野暮だね。——でも、墓之瀬くん。アプローチはやめないからね？ようやく見つけたんだ。逃すわけにはいかないよ」

「え、困る……」

同じく立ち上がった九十九さんは、不敵な笑みとともに、そう宣言してくる。
眉をハの字にしていると——新たな足音。

見れば、任務に出ていた建人と雄が、こつちに歩いてきていて。

「——あ、墓之瀬さんっ！お疲れさまです！」

「お疲れさまです。そちらの方は？」

「俺を逆ナンしてきた人」

「えっ」

冗談交じりに告げると、驚き固まる2人。面白い子たちだなーと思っていたところに、九十九さんがニコニコ顔で彼らに問いかける。

「やあ君たち。墓之瀬くんの知り合いかな？どんな女が、好みだい？」

「自分は沢山食べる娘が好きです！」

「灰原……誰かも知らない人に……」

「大丈夫だよ七海！この人は、良い人だから！人を見る目には、自信があるんだ！」

「……………その目から見て、墓之瀬さんはどうです？」

「良い人だよ！」

「節穴じゃないですか」

「どういう意味だ、建人おら」

と、わちゃわちゃやっっている内に、一向に帰って来ない俺を心配したのか、硝子ちゃんや理子ちゃん、美里さんも来て。

追加で帰って来た悟や傑、歌姫さんも集まり、何故だかマ○カー最強王者を決めることに。

そうして、楽しく、賑やかで、騒がしいままに、その日は過ぎていく。

次の日も、その次の日も、楽しく、賑やかに、騒がしく、時は過ぎていって——12
年が、経った。

最終話 廻る青春

——ドタドタと慌ただしく板張りの床を駆けて、見えてくる教室、その扉をガラリと開ける。

室内に居た人たちの注目を一身に受けながら、俺は教壇へ。

そこに元から立っていた、巫女服姿の黒髪美人さんの隣に立ち、ふー……と息を吐いて、言う。

「あつぶねー……遅刻するところだった。ギリギリセーフ」

「いや、ゴリゴリのアウトよ。何度も言うけど、教師が遅刻すんな」

「いてっ」

すると、お怒りの黒髪美人——歌姫さんに、スパアンつと勢いよく頭を叩かれる。ひどい……。

恨めしげに彼女を見てみると、はあ……と呆れの溜め息が聞こえてくる。

見れば、対面にある3つの席の1つに座る、黒髪を肩口程までに伸ばした女の子が、頬

杖をつきながら、半眼でこちらを見ていて。

「聡人せんせい……良い加減、きちんと時間を守つたらどうですか？もう大人なんですし」

「え、真依ちゃんつたら何その目……それ、ダメ人間を見るような目だよ……？違よ、俺はただ、深夜までネット対戦でマ○カーをしてただけなんだって」

「紛うことなきダメ人間じゃない。やつぱり、こんな目でも充分そう」

辛辣だ……若干涙目になって、俺は彼女を見つめる。

真依ちゃん——禪院真依。

彼女は京都府立の呪術高専の2年生であり、紆余曲折あつて先生をやつてる俺の受け持ちの生徒であり、10年来の付き合いの娘でもある。

というのも、俺がまだ呪術高専の生徒だった頃……悟と傑が、御三家や上層部とバチにやり合つて、高専に色んな子どもを連れ帰つてきてたんだよね。曰く、人質だとか、戦力だとか。

正直そこら辺はよく分かんかつたけど、子どもは嫌いじゃない……というか、好きな方だったので、その子らの面倒は、俺と硝子ちゃんで見えた。あと、雄とか建人も。で、彼女もその連れ帰つてこられた子どもの1人だった。

なんでも彼女は、禪院家の娘ではあるものの、双子であり、また呪術の才能が乏しく

冷遇されてたとかで、まあ色々大変だったらしい。

それに昔の自分を重ね合わせたわけではないが、放つてはおけなかったの、双子の真希ちゃん共々、全力で面倒を見てあげてた——の、だけれど……。

「……………うう……………真依ちゃん、昔はもつと優しくかったのに……………聡人さんのお嫁さんになるとか、言ってくれてたのに……………先生、悲しい……………」

「ちよつ……………ち、小さいときの話を持ち出さないでもらえるかしら!? あれは、気の迷いみたいなもので……………ちよつと、幸吉!? 何笑つてんのよ!」

深い郷愁に駆られて嘆くと、真依ちゃんは顔を真っ赤にして慌て出す。そして、プツと吹き出した、髪を高い所で結び上げた男の子に突つかかる。

「いや何……………お嫁さんになる、なんて、随分と可愛いらしいことを言ってたんだなと思っただけだ」

「こゝ、このちよんまげ男つ……………!」

ニヤニヤしている彼は、与幸吉。真依ちゃんと同じく、俺の受け持ちの生徒だ。

彼との出会いは、俺がここ、京都の高专の教師になると決まったときのことだった。

当時会った彼は、全身に包帯を巻いて、点滴の海に浸かり——まるで、この世を恨むかのような瞳をしていた。

彼は天与呪縛で、強制的に自分の術式能力を上げさせられる代わりに、右腕と膝から

下の肉体、更に腰から下の感覚が奪われ、肌も月明かりに焼かれるほど弱いものにされていた。

望んで手に入れたわけじゃない力の所為で、日の下を自由に歩けなくされた。その辛苦は、如何ほどだろうか。

憐憫だとか、同情だとか、種々の念はあつたが、とにもかくにも、この子にも青春をさせてあげたい。そう思った俺は、独断で領域を使い——彼を、五体満足な身体にしてあげることに成功した。

おかげで彼の術式の効果範囲は狭くなっちゃったし、呪力出力も落ちちゃって、普通に上層部からは怒られたけど……まあ、幸吉が咽び泣きながらお礼を言ってくれたんだから、ノーダメですね。ってか、割と前から悟と傑と九十九さんがハチャメチャやったんで、上層部に権力はほとんど無かったから、事実としてノーダメでもあつたり。

しかしまあ、2人とも大きくなったもんだ……。

感慨深い気持ちになりながら、歌姫さんと揃って幸吉と真依ちゃんの争いを見ていると、最後の生徒がそれを仲裁に入る。

「——ま、まあまあ、真依も幸吉くんも、落ち着いてください……」

「霞……」

「三輪……」

水色の長い髪に、黒のスーツを着込んだ彼女は、三輪霞。当然彼女も、受け持ちの娘だ。

彼女とは、高専で担当になるまでは関わりはなかったが、喋ってみると死ぬほど善良で驚いたのは、ちよつとした思い出だ。

なんか彼女、お家が貧乏らしく、弟も2人いるとかでね……若い身空でのそんな苦労話聞いたら、あたしもうダメよ、即行で札束あげた。でも彼女、こんなの受け取れませんつて遠慮しちゃうの。善い娘が過ぎる……。そりや真依ちゃんも幸吉も、彼女には強気に出れないわ。

「でも霞、幸吉のヤツ……！」

「わ、分かってますつて……。——幸吉くん。あんまり真依ちゃんをいじめちゃダメですよ?」

「……フン」

「この男……」

「あはは……」

三輪ちゃんが困り顔で宥めると、そっぽを向く幸吉。真依ちゃんがそれを見て、イラアつとした顔をし出しちゃったけど……許してあげてほしい。幸吉くん、好きな人には素直になれないタイプだから。可愛いね。

「——はい、じゃあアンタたち。聞いてちょうだい」
パンパンと。

生徒たちの話が一段落したところで、大きく手を鳴らして場の注目を集めた歌姫さんは、事項を告げる。

「3年生にはもう言つてあるけど、もうすぐ東京の姉妹校と交流会があります。去年はうちらが負けちゃったから、今年は向こうで開催ね。それに合わせて、アンタたちも、しつかり準備をしといてちょうだい」

「ハイ」

「……」

「分かりました！」

真依ちゃんは、気怠そうに。

幸吉は、無言で。

三輪ちゃんは、元気良く。

歌姫さんの言葉に返事をする。

彼女がそれに満足げに頷く中、続いて俺も、みんなに笑顔で告げる。

「なお、今回の交流会でも俺は、東京校の教師の五条悟と伏黒甚爾と、どちらが勝つか、賭けをしています。当然俺は京都校の勝ちに賭けてるので、みんなは俺の賭けのために

も頑張るように！良いね？」

「何も良くねーわよっ!! アイツらバカどもと付き合うのは辞めなさいって、何回言わすのよっ!! このバカっ!!」

「ぐああつ、とても痛いっ!!」

気付いたときには怒りのチョップが頭を直撃、顔面が教卓にめり込まされる。

割れた木片に埋もれつつ、痛みに呻いていけば、聞こえてくる教え子たちの声。

「この人、生徒で賭け事するとか、ほんと……」

「最低だな……」

「で、でも、ほら、私たちが勝つ方に賭けてくれてるわけですし……私たちを信頼していると考えれば……」

おっと、みんな呆れてますね……。でも、しょうがないじゃん。売り言葉に買い言葉って言うか、毎年恒例になっちゃってるわけだし……。

っていうか今更だけど、甚爾が教師やってるってビックリだよな……。明らかに向いてねえだろ。いや実際、毎日競馬とか競艇しにサボってるらしいが……。まあでも一番ビックリしたのは、アイツに子どもが居たって知ったときだけだ。

たしか学生時代に真依ちゃんたちを預かり出した頃……悟が新しく、ツンツンした男の子と、おっとりした女の子を連れてやって来てさ。次はどこの子だよって聞いたら、

甚爾の子だつて言うじやん？

なんか俺の知らない間に何度か接触（殺し合い）して、最終的に協力関係になつたらしいんだけど……にしても、アレに子どもつて……と思ひながら、その子たち——恵くと津美紀ちゃんを、1年くらい預かつた記憶。その後もちよくちよく会つたりしてて、今では東京に行つたら、一緒にご飯に行く仲になつてたりもする。つまり仲良し。

「——ちよつと聡人つ、聞いてんのっ!? アンタはつ、あんなのにつ、なつちやつ、ダメつて、口酸っぱくつ、言つてるでしょ!」

「やめつ、ちよつ、太鼓の○人みたく頭をリズムカルに叩くのはやめてください歌姫さんつ! フルコンボ目指さないでっ!!」

「……プツ。あらやだ、これ、端から見るとめちやくちや面白いわね」

「動画で撮つておくか」

「こ、幸吉くん、ダメですよつ……」

「どんどんかつか、どんかつか。」

受け持ちの子たちに笑われながら、教卓に叩き込まれビクンビクン跳ねてる内に、月日は過ぎ——秋。

京都校の生徒を連れて、俺は、東京の呪術高专に来ていた。

さしすの先輩聡人くん！

最終話 青春は廻る

「——いやー、バチバチだったねー！うちの子らとそつちの子！」

「だねー。挨拶だけであんな險悪とか……まったく誰に似たんだか。あ、歌姫にか」
「いや、歌姫さんが險悪なのは悟と傑にだけだよ」

「またまたー」

高専内、一室。

いくつもの椅子が置かれ、壁にはモニターが5、6個掛けられた観覧所。

隣の席にて脚を組んでくつろいでいる、銀髪に黒の目隠しの男——悟と、言葉を交わす。

今、観覧所に居るのは、俺と悟の2人だけだ。

一緒に東京校に来た楽蔵寺学長——京都校の偉い人ね、耳と眉毛がファンキー——は、生徒たちのミーティングに赴いていて居らず、歌姫さんも、東京校の学長になった

夜蛾先生と、どっかにお話しに行ってるからだ。

「いや、割とガチで言ってるんだけど……まあいいや。あ、そーだ悟。今夜のパティーの準備はきちんできてる？」

「ちよつと、誰に聞いてんの？僕がそこら辺のことを怠るわけないでしょ」
尋ねると、自信満々の返事。やるう！

「さつすが、目隠しは伊達じゃない！ちなみに参加者はどうなってる？」

「いや目隠しは関係ねえだろ。……えーと、七海と九十九由基は、夜には来れるっぽいよ。天内と黒井さんも。で、日下部は妹の家族と遊園地に行ってるとかで来れないらしいね。灰原も、実家に帰省中だから来れないって」

「あら残念……まあ家族仲が良いのは良いことよ」

「あと、伏黒甚爾は競馬場行って連絡取れないわ」

「終わってんなアイツ……なんで雇ってんの??？」

「いやだって、アイツを自由にさせるわけにはいかないでしょ……まあ首輪付けてても自由なんだけど」

無敵かな???: ……ああでも、アイツはあれで、津美紀ちゃんには頭が上がんないっぽいけどね。やはり女の子は強い……。

しみじみそう思っていると、パタンと開く戸。

頭だけ動かして見れば、厳めしい顔にサングラスをつけた男と、歌姫さんが、白衣を纏った長髪の美人さんと共に入ってきていて。

「あ、夜蛾先生、ちーつす！やー、いつ見ても若いっすね！」

「逆にオマエは、いつ会つても挨拶がなつてなさすぎるな……」

立ち上がり、片手を挙げて呼びかければ、頭を押さえて溜め息を吐く男——夜蛾先生。俺はその彼から視線を外すと、今度は白衣の美人さんに視線を送る。

「硝子ちゃんもよつす！相変わらず綺麗だね。……ああ、でもクマがちよつと濃くなつちやつてる？大丈夫？ちゃんと寝てる？」

「久しぶりです、聡人さん。そーですね、最近はあんまり寝れてないです」

「え、マズいじゃん……」

言つて、白衣の美人さん——硝子ちゃんは、儂げに微笑む。

それに哀憐を覚えたのか、歌姫さんは彼女にガバリと抱き付き。

「じゃあ今日は私と一緒に寝ましょう、硝子！しっかり寝かしてあげるわ！」

「ふふつ、いいですね。お願いします。……あ、聡人さんも一緒に寝ます？」

「えっ!?!いいや、逆に寝れなくなるから良いよ……」

「ありや、そうですか？」

クスクス笑つて、小悪魔チックな表情をつくる硝子ちゃん。クソう、手玉に取られて

る……。

そうこうしている内に、お次は楽巖寺学長が、黒づくめの美人さんと共に入ってくる。

「——あ、冥さん！」

「やあ、墓之瀬くん。元気にしてたかい？」

「それはもう！」

「なら良かったよ。フフツ、本当ならもう少し喋っていたいところだけど……先に映像の準備をしないとね」

「はい、お願いします！」

流麗な動作で彼女——冥さんは、俺に挨拶をしながら席に着き、モニターのケーブルを引っ張ったりし始める。

交流会の様子は、冥さんの黒鳥操術に協力してもらって、ようやく確認できるようになるからだ。

そしてそれを手伝うには、俺はちよつと知識が足りていない。悲しい……。が、しょんぼりしている間もなく新たな入室者。

両手に黒髪と金髪的女子高生をそれぞれ侍らせた、袈裟服姿の男だ。

「……うわ、絵面めちやくちや犯罪者じゃん。悟、110番して」

「おっけ、承った」

「やめて、任せるな、承るな。……はあ……まったく、聡人さんは何歳になっても変わらないですね……ほら、美々子、奈々子、そろそろ戻って。交流会始まるよ」

「はーい、夏油サマ」

「分かりました」

手を軽く振って、袈裟服の男——高専の教師となつてゐる僕は、女子高生2人を帰す。彼女らがペコリとこちらにお辞儀して、大人しく去つていくのを見送つてから、彼は口を開いた。

「……先に言つておきますけど、私はくつつくのはやめるように言つてる側です」

「初手弁明つて、疚しいことあるつて自分で言つてるようなもんだよ？」

「聡人さん……」

「じよーだん。……今のつて、美々子ちゃんと奈々子ちゃん？大きくなつたね」

「ええ。早いものです」

——美々子ちゃんと奈々子ちゃん。彼女たちは、俺が高専で真依ちゃんたちの面倒を見て暫く経つた頃、僕が連れ帰つて来た子だった。呪術が扱えることが理由で村で迫害されていたらしい。で、僕はそれにぶちギレて、村人にフィジカルパンチをお見舞いしてから救つて来たのだとか。そんな彼女たちは、当時から随分と僕になついていたけれど……そつか、会わない間にここまで……いや、何も言うまい。

——それから、席に着いていた楽巖寺学長を悟と傑と一緒に煽りに行ったり、その行為を夜蛾先生に咎められ怒られたり、遅れてやって来た後輩の伊地知くんと絡んだりしている、セツティングが終わったらしく、冥さんが呼びかけてくる。

時計を見れば、時刻も交流会開始もうすぐといったところ。

みんなで席に着き、やがて、悟がアナウンスを始める。

「——開始、1分前でーす。ではここで歌姫先生に、ありがたーいお言葉を頂きます」
「はあ!? え……えーつと……あーある程度の怪我は仕方ないですが……そのお……
時々は助け合い的なあれが……」

「時間でーす」

「ちよつ、五条!! アンタねえ——」

「それでは姉妹交流会——スターアートオっ!!」

「先輩を敬えっ!!」

音割れをさせながら悟が叫び、赤っ恥をかけた歌姫さんが飛びかかって、喧嘩が始まるのを横目に。

モニター内では、両校の生徒が並び立っていた。

派手な髪色の男の子に、恵くん、気の強そうな女の子、美々子ちゃん、奈々子ちゃん。おにぎりボーイ棘くんに、パンダくん、真希ちゃん。

真依ちゃん、幸吉くん、三輪ちゃん。

魔女っ娘桃ちゃんに、アイドルの高田ちゃん大好き葵、色々あつてマザコンの憲紀くん。

これからも彼らが、楽しく賑やかで、幸せな青春を送れることを願いながら——俺は。悟が馬鹿にし、歌姫さんがキレて、傑が煽り、硝子ちゃんが宥め。

冥さんが微笑を浮かべ、夜蛾先生が溜め息を吐き、楽巖寺学長が呆れる中。静かに笑んで、交流会の行く末を見守った。

閑話 双子 上

「——いやー、いよいよセミが鳴き出す季節になっちゃったなー……もーマジ最悪。チヨベリバだわー……」

「チヨベリバってもう死語ですよ、聡人先輩。ってかなんですか、セミ嫌いなんですか？」

「大嫌い。硝子ちゃんにはいつだか言ったけど、俺、耳めちやくちや良いからさ……セミの大合唱とかされると、もう頭割れそうになっちゃうのよ」

「へー……どんまいっスね」
「励ましが浅つさいなー……」

——星漿体及び高専襲撃事件から、数カ月経つたとある初夏の日。

任務のなかった俺は、高専の2年生の教室で。

机を挟んで椅子を向かい合わせ、暇潰しがてらに硝子ちゃんとお喋りをしていた。

窓の外には、森林の緑と入道雲の浮かぶ青空とが広がり、やや強めの日差しが照り付

けている。

激動の春が終わり、俺にとって高校最後の夏が始まろうとしていた。

初夏といえば、冬の終わりから春にかけての人間の負の念が一気に呪いとなって現れる、呪術師にとつての繁忙期。

去年の今頃なんかは、便利なコマ扱いをされて、あっちこっちに送られていたが……今年はそのようではなかったり。何故なら、この前の事件のあおりで、上層部と悟や傑、十九さんらが表立って反目し始めちゃったもんだから、今俺には、下手な任務は回つてこないようになってしまつているのだ。

詳述すると、俺の立場というのは、上層部と悟たちが強く対立し出した原因。テキトーな任務なんて与えられないよなつて話なのだ。上は一枚岩じゃない、悟たちにダメージを負わせたいやつらからすれば、なるべく俺に危険な任務をやらせたいだろうけど、ことを荒立てたくないやつらは、そもそも藪をつつきたくないから、任務自体を受けさせたくない。だが悟寄りのやつらは俺に功績を積ませたいから、良さげな任務をやらせたい……色んな思惑が重なった結果、難度バラバラの任務が、週1で俺に与えられるようになっていた。

「……でもアレですね。耳がそんなに良いつてことは、ちよくちよく皆で行つてるゲーセンとかつて、ヤバかつたりするんじゃないですか？」

「いや、遊びに行くときは呪力で何とかしてるから大丈夫なのよ。でもコレ、聞こえる音量を調節するのつて、わりと高度な技術だからさ。セミのうるささを凌ぐために、イチイチそんなことをやるのは面倒じゃん？だから困ってるのよ」

「いや、まず遊びに行くのにわざわざそんな高度な術使つてんじゃねーよつて話ですけど……この人ほんと遊びに命懸けてんな……」

片や頬杖をつき、片や机に顎をのつけて、だらだらと会話を垂れ流す。

穏やかな日常。だがそれは、突如として破られた。

俺の耳が音を捉えたと思ったのも束の間、ガララと音を立てて入り口の戸が開けられる。

硝子ちゃんと揃つてそちらを見れば、そこには、朝早くからいづこかに出かけていた筈の悟が立っついていて。

「——やつほ、聡人に硝子。ただいまー！」

「おかえんなさーい、悟ー」

「おかえりー。お土産は？お菓子とかはないの？」

「お菓子イ？あるわけないじゃん。つていうか硝子、そんなにお菓子ばつか食つてたら太るよ？」

「は???殺すぞ???」

昼下がりののどかな雰囲気、悟の発言を受けた硝子ちゃんの殺気で消し飛ぶ。

ひい……何の捻りもない殺害予告がいつちゃん怖いよお……悟はデリカシーをどこに置いてきたんだ……???

あわわと慄いていると、ヘラヘラと笑った悟が硝子を宥めにかかる。

「おー、怖い怖い。まあでも、お土産はきちんとあるよ？お菓子じゃないけど。——ほら、2人とも、入っといでー」

そして彼は、教室の外へ呼びかける。それに応じておずおずと現れたのは——顔立ちの整った、黒髪の双子だった。

纏うはそれぞれ朱色と淡緑色の着物、年は6、7歳くらいに見える。

1人は意思の強そうな目で周囲を窺っており、もう1人はおっかなびつくり、その娘の背に隠れていた。

混乱する思考の中、なんとか俺は言葉を絞り出す。

「……………え、悟オマエちよつと……………だ、誰との子なのお……………??も、もしかして歌姫さん……………?だとしたら超絶シヨックなんですけどお……………そ、それともそれとも理子ちゃんだったたり?あるいは美里さん……………?もしくは冥さんか……………?ま、まさか硝子ちゃんとかは言わないよな……………?」

「や、少なくとも私の子ではないですよ……………ああでも、夏油との子どもの可能性とかは

あるかも」

「あ、確かに……!! どうか、それもあつたか……!!」

「いや、ねーよ。違えよ。今出された解の全てが的を外れ、最後のに至つては的ですからなかつたわ」

提示した推測が、まとめて否定される。それにほつと安心するも、よくよく考えたらその場合、この子たちは、俺のまつたく知らない、どこぞの者とも分からない余所の娘との子どもになるということに気付いて、俺は慌てる。

だ、誰よその女つ、いったい悟の心を射止めたのは、どこの女なのよ!?

死ぬほどテンパっていると、悟は双子の背後に回つて彼女たちの肩を軽く叩き。

「このままだと、バカな先輩と同期が更に変なこと言い出しちゃうから、軽く自己紹介してあげて」

そんなことを宣つて、促す。彼女らはこくんと頷くと、こちらを見据えて口を開いた。

「禪院真希だ。いきなりこの白いヤツに連れて来られたから、あんまよく分かつてないけど……よろしく」

「……禪院真依、です。あの、色々頑張るので、ここに置いてください。よろしくお願いします……」

気丈に、また気弱に語られる情報。その言葉の意味するところに気付いた俺は——ガ

タガタと震え出す。

「どどっ、どどどどどどどうしよう硝子ちゃんっ、これ誘拐だ……!!き、悟がやらかしちやったよ……!! 110番、110番しないと……!!」

「まさか同期から犯罪者が出るとは……まあでも、いつかやらかすとは思ってた。聡人先輩は、とりあえずタバコでも吸って落ち着いてください」

「コイツら……。はあ……言つとくけど、誘拐じゃねえから。ちゃんとして本人たちの同意も貰ってるし」

「あ、そーなの?……いやでも待てよ、未成年の子どもが相手なんだから、同意を貰っててもダメじゃないか……!?!」

「そりゃあうちの保護者がまともだった場合の話だな。まあ聡人が、このガキんちよたちがどうなっても良いってんだったら、今すぐ戻してくるけど?」

会話の途中で、ワケありの雰囲気か仄めかされる。「保護者がまともだった場合」という発言や、「戻してくる」という台詞を聞いた双子ちゃんたちの不安そうな反応も気になるところだ。

意識を切り替えて、俺は悟に続きを求めた。

「……悟。本当のところ、いったいどんな理由があつて、この子たちを連れて来たんだ?」

「ああ、それはな——」

悟は、ゆつくりと概要を語り始めた。



——5分ほどかけて展開された、双子ちゃんの惨憺たるお家事情。聞くとところによれば彼女らは、双子という性質に、術士の格や術師としての素質、挙げ句は女だからという理由で蔑まれ、陰口を叩かれ、暴力を振るわれ、虐げられてきたらしい。まだ俺の半年も生きていないだろう年齢の子に、だ。

「——よし、禪院家ぶっ壊そう（ガチ）。悟、今すぐ案内しろ」

「やめろやめろ、こつちにも予定があるんだよ。今は抑えろ」

「えー……？」

普通に苛立たし過ぎて頭おかしくなりそうなんですがア？ 発散させてくれよ……。

「分かった、じゃあ半壊。半壊させるくらいだったら良いだろ？」

「良くねーんだわ。譲歩してやったみたいなの雰囲気出してるけど、結局抑えられてねえんだよ。頼むからオマエは、大人しくその子たちの面倒見てろ。そのつもりで連れて来たんだから」

「あ、そーなの？それは何、もしや俺の滲み出る父性に期待してってこと？」

「いや、ガキはガキと遊ばせとくのが一番だろってことだよ」

「あー、ね？なるほど……………え待って、俺今ガキ扱いされた??？」

え、嘘でしょ???ちよつと???

「じゃあ硝子、俺もうそろそろ行かないとだから、お守り任せたわ」

「また勝手なことを……………はいはい、任せろ任せろ。3人まとめて面倒見といてあげよ」

「さんきゅ、頼むわ」

そして悟は、背中越しに手をひらひらと振って、教室を出てく。まったく勝手なやつだ。……………ところで今、硝子ちゃんも俺のことガキ扱いしてなかった???3人って言ったもんね???

失敬など思っていると、当の彼女——硝子ちゃんが、こちらを見てくる。交錯する視線、彼女は机に頬杖をついた姿勢で、言葉を発した。

「……………で、どーします?この子たち。とりま私たちも自己紹介とかしといた方が良いでしょうか?」

「ああ、それは確かに……………よしっ」

彼女の提案を受けた俺は、席を立ち、未だ入り口付近で所在なさげにしている双子

ちゃんたちに近づく。

膝を曲げてしやがみ込み、目線をしっかりと合わせてから、簡単に自己紹介をする。

「——やあ、2人とも、初めまして。あの白いヤツの先輩の、墓之瀬聡人つて言います。気軽に聡人お兄ちゃんつて呼んでね！」

「分かった、聡人だな」

「わ、分かりました、聡人さん」

「いや、そうじゃなくて……いや合ってるんだけどな？ どうせならお兄ちゃんも付けて欲しいなーつて思うのよ。そこんどこどう？」

「え？ 聡人は聡人だろ？」

「えつと、なんで？」

「……そつかー……子どもにこの機微は分からないかー……」

男はね、小さい子どもにはお兄ちゃんつて呼ばれたいものなのよ……。

「こら、子ども相手に何バカなこと言ってるんですか。お兄ちゃん呼びなら今度七海たちにさせますから、今は諦めてください」

「硝子ちゃんこそ何バカなこと言ってるの。軽率に地獄を産み出そうとすんなや」

「良いじゃないですか、面白そうで。——さて」

同じく席を立って、こっちにやって来た硝子ちゃんは、俺を軽く嗜めた後、また同じ隣にしゃがみ込み。

「初めまして。私は家入硝子、あの白いバカの同期だよ。よろしくー」

ひらひらと小さく片手を揺らして、双子ちゃんに声をかける。

それに彼女たちが返事をしていく光景を眺めつつ、この先どうしようかと思案する。

子どもと仲良くなる方法とか俺、全然分かんないしなー……しかも女の子と来た。なんだらう……おままごと辺りか？それとも普通に鬼ごっこ？或いはお得意のマ○カー（得意とは言っていない）か？いやはや悩ましいな……。悟め、難題を押し付けやがって。

……まあでも、急ぐことはないか。幸い近頃は、お誂え向きに時間も余っている。ゆっくりと仲良くなっていけば良いだろう。

そう、結論付けて。

何やら白いバカのこと盛り上がっている彼女らの話に、俺もまた、交ざりに入ろうとするのだった。